

開南叢書第一輯

特231

南洋の寶庫

146

大ボルネオ

と

南洋の富源

海南海島

多田惠一著



始



特231
146

大 才
海 島
ボ ル
と 南

著 一 惠 田 多



行 發 院 書 民 國 京 東



大東亞
南

第一輯



東京

開南叢書第一輯出版に際して

曩には日獨伊三國同盟成立し、近くは日蘇中立條約の締結と所

謂横紙破りの松岡外交は、今茲泰佛印和平條約の正式調印を完了

して、新東亞建設の一大礎石を築いたのである。

吾人が日支事變直後以來、卒先して首唱絶叫したる、南進國策

も亦漸く軌道に乗らんとする現状にあるも、未だ猶朝野の認識に

於て、隔靴搔痒の嘆なきを得ぬものがある。

茲に三四年以來既に發表せる、開南卑見を一括して第一輯を出版し、更に筆硯を新にして南進樞軸地點濠洲、新西蘭方面の世界的空閑地開拓策を出ださんと欲する次第である。

昭和十六年五月

開南叢書第一輯出版者 識

自序

世界に類例なき、過去一ケ年の絶大なる戦果を獲得し、劃期的武略を中外に發揚せるは、畏こくも上

大元帥陛下の大御稜威と、下忠勇義烈なる皇軍將兵の、奮闘力戦の資たるは、敢て辯ずるまでもなき事ながら、此戦果をして、更に有終の美を收めしめ、初期の如く、東洋永遠の平和を樹立し、所謂長期建設の大業完成の域に到達する迄には、前途猶遼遠の感なくんばあらず。

此秋に際し、近代戦は即資材戦とも言はれ、物資調達の問題は、朝野を擧げて、其全智能を傾注しつゝあるの時、國內に於ては、容易に充足し得ざる現在に即しては、其手近にある海外に向つて

物色し、適切なる平和手段に依て、これが獲得に努力せざる可らざるは勿論にして、是れ實に銃後第一の國策に非ずや。

此意味に於て、我邦土に近き持てる國の領域中、天然資源に富み、而かも持てる國が、これを無爲に放置し、所謂寶の持腐れの現狀に在る、天與の豊土を、詳かに再検討することは、時局下の今日、焦眉の急務たるを痛感す。

況んや輓近、年々歳々百萬人を算する人口増率に起因する、幾多の國難を打開し、國家百年の大計を樹立するに當つても、殊更に此方面の進展策を講ずべきは、蓋し何人も異議なかるべきを信ず。

茲に於てか、予は今南洋寶庫大ボルネオを略説し、天下同憂の

志士に訴へんと欲す。石油あり、石炭あり、金あり、銅あり、鐵あり、錫あり、護謨あり、木材あり、塗料あり、而も米作、棉花、甘蔗等の栽培に絶好無二の地域にして、邦人の活躍に、人の和と、地の利の好條件を具備し、時局下の今日閑却すべからざる大ボルネオの新天地は、予が往年會遊の山河なるを以て、沈思默考這般無限の寶庫は、彷彿として眼前に出現し、追懷の情更に新なるものあり、敢て其の片影を録して、江湖の高教を俟つ所以なり

維時昭和十三年天高く肥馬嘶くの秋

日本對ボルネオ、スマトラ、セレベス比較研究圖



○日本全版圖よりも約五千方里廣いボルネオに現存人口二百萬人に足らぬことは、將來如何に發展の餘地を存するか一目瞭然たるものあらん。

南洋大ボルネオ寶庫

多田 惠 一 著

はしがき

近來我邦の南進論者は、異口同音に、持てる飽滿國たる英、蘭の領土南洋中の未開發地が話題に上せらるゝが、就中、ニューギニア、ボルネオの兩大島は、日本民族が開發する爲に、遺されたる唯一の新天地ともいふべく、其地の利に於て、其現住民族との和に於て、我日本民族が、世界中他の孰れの國民よりも、開拓の適材者たるは、以下に詳述するが如く、既定の事實たると共に、持てる國英、蘭の識者も決して否定し得ざる問題である。

時は今對支事變の擴大延長と共に、嚙て又、次に來らんとする思想的、世界大戰に備ふる爲め、物資調達の國策に、國を擧げて大童たるの折柄、而も我邦の要求する資源の最大多數を包藏する南洋寶庫を再検討することは、現時局下の重要事項たるは勿論である。況してや國家百年の大計たる、人口問題の解決に對して、尙更閑却すべからざるは、吾人の今更喋々を要せざる處である。併しながら一面

隔靴搔痒の嘆なきを得ざるものあり、茲に筆視を新にして更に憂國先覺の志士に訴うる處あらんとす。著者の卑意の存する處を賢察あると共に、其焦心苦慮するに對し、適切なる協力と指導とを吝み給はざる様敢て懇請する次第である。

著者は往年白瀬中尉南極探検隊に参加し、其途次ニュージールランド、大濠洲、比律賓島の概況を實視し、其後、大正五、六、七年の三ヶ年に亘り、南方支那、馬來半島、蘭領東印度諸島を視察し、其富源の探検に従事中、親しく蘭領ボルネオを踏査し、其頗る將來性あるを認め、且當時は、蘭國官憲も、邦人の此地進出を歓迎し、例へば入國税の如きも、支那人に對しては、既に二十五盾宛を課税しつゝあつたが、邦人にはこれを免するが如き、又租借地獲得に當つても、頗る寛大に許可を與へ呉れし時代であつたので、心私かに期する處あり、歸朝以來、或は新聞に、雜誌に、著書に、或は講演に、東奔西走して、ボルネオの理想郷たるを宣傳力説し、一方南洋開發社を創立して、同志の拓人をボルネオ各地に進出せしめ、日本人村の建設に努力したるも、微力にして、素志の萬一も達成するに至らざりしは頗る遺憾千萬とする處である。

爾來、世界情勢の變遷と、我海外發展策が遙かなる南米方面に偏し、所謂脚下に暗くボルネオ方面に無關心なりしと、世界經濟戰に打つて出でたる、邦產品の進出著しかりし爲め、却て蘭領東印度に於ける、邦人發展に惡感を招來するに到り、日蘭會商の危機に臨むと共に、拓人の進出にも防止策を

講ずるに至り、逐次累進的に我邦人にも多大の入國税を課し、現在は百五十盾(邦價約三百圓)てふ、巨多の課税を賦して、一大障壁を設くるなど其傍若無人的なるは、畢竟和蘭の背後に英國の排日勢力が策動するが爲めなるは、否定すべからざる事實にして、現下の日支事變の蔭に老獪なる英國の勢力が横行しつゝあると共に、吾人南進論者の等しく切齒扼腕する處なるが、こは須く我國人の銘記して、これが對策を講ずべきは先づ以て當面の急務である。爰に寶庫大ボルネオを語る劈頭第一に於て、聊か卑見を開陳する次第である。

大ボルネオ概観

予は敢て大ボルネオと呼ぶ

大ボルネオは、グリーンランド、ニューギニアに次ぐ世界第三位の大島であるが、其形狀は揚羽の蝶を彷彿たらしめ、赤道直下を中心に、南北兩緯に亘り、千古の神秘と、幾多の富源とを抱いて、眠るが如く横はり、其偉大なる地域は、我邦の全版圖よりも猶五千里の廣さを有し、全面積實に四萬七千九百八十九方里、全く大陸的であつて、予の敢てこれを大ボルネオと呼稱する所以である。

大ボルネオは、現在英蘭兩國の領有に屬し、其南方は蘭領で、南支那海に面する北方は英領である。面積としては約七割が蘭領で、三割が英領である。

大ボルネオは、島の中央部より放射状をなしたる山脈が、四面の沿海州に向つて射出し、概して山岳に富むで居るが、高山は比較的少ない。河流は中央山脈より、東西南北に流出して、何れも舟楫の便多く、中流以下は至極緩漫たる水勢で、上流には池沼が多い。又河口下流地域は概してマングローブ地帯である。

蘭領には大河が多く、西部のカツバス河は本島第一の大河で、全長四百十里に餘り、島の中央カツバス山脈から赤道直下を縫ふて西流し、西部ボルネオの大小河川を併合して、カツバスプツサ一と呼ばれ、航運の便最も多く、上流ポテシバウまでは、小汽船の通航するあり、河口には蘭領ボルネオの首府にして、赤道直下唯一の都市ボンテアナがある。

パリトー河は、本島第二の大河で、全長二百六十餘里、中央山脈より南流してジャバ海に注ぎ、百六十里間は溯航容易である。

マハツカム河は第三位で、東南に流れ、マカツサル海峡に注ぐ、全長二百四十餘里の長流で舟楫の便多く、ブラガン河は東流してセレベス海に注ぎ、レシアン河は島の北部を西南西に流れ、英領ボルネオに至りて、南支那海に注ぐ。

以上の五大河は、大ボルネオの曠野の大道脈ともいふべく、自ら五大流域を作り、其沿岸の沃野は、太古のまゝの處女林を以て蓋はれ、其大半は殆ど未開地域に屬し、拓人勇士の來るを期待しつゝ眠つ

て居るのである。

大ボルネオは、蘭英兩領とも其内部には道路らしい道路はないので、其内部へ向つての旅行は、概して大小河川の水流に従つて、大なるものは小汽船で、小なるものはモーターボート、或は土人の獨木舟に乗つて、水邊に散在する土人部落を巡るのである。故に河川は現在に於ける交通の衝である。前記の五大河には、上流まで通船と稱する小汽船の便があり、其多くは沿岸の各部落に、物々交換をなしながら、往復しつゝあり、中には定期航行のものもある。

開拓者を待つ大ボルネオ

現在大ボルネオ全島を通観するに、其地味に於て、其氣候に於て、對岸のジャバに比して、何等遜色なきにも拘らず、ボルネオの六分一弱の一小島ジャバの、全島残す處なく、よく開拓され、其人口は四千二百萬以上を算し、我本州よりも人口周密であるに反し、ボルネオ全島は未だ尙人工の施す處なく、人煙稀薄、全人口僅々二百萬内外なりといふは抑々何に起因して然るか。

こはボルネオが、ジャバの如く良港を有せず、其海岸線が、全面積に比して頗る短かく、四面海を環らすにも拘らず、交通上の不便利なるが、其開發遲々たる最大原因ではあるが、畢竟するに持つる國英、蘭が、此島に介意少なく、所謂寶の持腐れの現狀に因ることが、領有二百年後の今日に至る

も、何等開發の手段を盡さず、尙今後五十年百年の年月を藉すも、持てる國の力では其の開拓を期待すべからざるは、世界の定評ともいふべきである。然し我日本民族としては、臺灣よりすれば、四五日航程の眞近に、今尙かゝる未開の豊土の殘存せることが、大なる僥倖として、資源窮乏に泣き言を並べる間に、先づ以て此方面に進展路を見出し、平和的手段のベストを盡し、自由開發の舞臺たらしめねばならぬ。

大正五六年頃の邦人ボルネオ進出

著者が大正五年始めて渡航した頃は、邦人間には、ボルネオといへば、熱帯の孤島で、而も瘴煙蠻雨の焦熱地獄の如く想像して、瘴猛にして伍すべからざる喰人種が棲息して、鱒魚や、大蛇や、猛獸の巢の如く心得て居るものが多く、人類生存の理想郷なりとは、夢想だも信じられない處であつた。然し、當時は馬來半島を中心に、護謨園熱の隆昌時代で、慧眼なる獨人及米人は、夙にボルネオの肥沃地に着眼し、大正初年頃から、バリト―河畔並にカツパス河畔には、一二千英反の大護謨園の植林に着手し、成績も頗る良好で、ボルネオの三年木は、優にジョホールの五年木に匹敵する成育振りを呈し、採液期に入るのが頗る早く、ボルネオの土壌の肥沃を如實に物語るものとして、邦人の護謨園、椰子園等の事業家も、漸次この島に着目するに至り、其頃より英領北ボルネオには、三菱系の

窪田農園、タワオの久原農園の大規模なるものを筆頭に、蘭領ボルネオには野村護謨園、川北護謨園、元島護謨園等の有數なるものが續出しつゝあつたが、總て世界大戰の終局と共に、護謨市價の大暴落を來すに及び、此種栽培熱は一時に冷却した。又大正十二年の我大震災に際し、一時木材の用途が多かつた爲め、南洋木材の需用から、ボルネオに於ける邦人の林業會社が創立されたが、これも餘りに盛大に至らなかつたのは、我事業家の多くが、只眼前の利益にのみ没頭し、華僑の如く積年の研鑽による遺利の獲得に精進せぬのが、其最大原因であることは、今更喋々を要せざる事實である。華僑の成功者は、南洋到る處に進出して居るが現在ボルネオに於ても要地の隨所に散在し、共商權は殆ど彼等がリードする處で、而も一步一步築き上げた其地盤の堅實振りは、他山の石として我邦人の大に學ぶべき處である。

鑛産豊富なる大ボルネオ

——就中油田は南洋隨一——

地質學上從來發表されたる處によれば、ボルネオは、爪哇及スマトラと共に、第三紀最新世初期時代にありては、亞細亞大陸と連接して居たものと推測されて居る。故にボルネオの地質には前記二島と共に、其地質を同じくして居る。

本島の地質を構成するものを列挙すれば、

- 一、時代不明の無化石、古代石盤石。
- 二、二疊紀初期及中古代の火成岩。
- 三、花崗岩。
- 四、太古界の石炭岩。
- 五、三疊紀岩。
- 六、侏羅紀。
- 七、白堊系。
- 八、中古代の火成岩。
- 九、第三紀の始新世層、及漸新世層（本島石炭は多く本紀層中にあるが、其炭層極めて薄く、打算的鑛區は、未だ發見せられて居ないが、尙幾多の有望なる未來を有するものと推測せられる）
- 十、第三紀中新統。
- 十一、第三紀最新統。
- 十二、第四紀。

八

十三、新時代に屬する地層（就中前記五大流其他の河口には、河流の作用に依つて生じたる三角洲が頗る多い。）

本島には、金、銀の鑛脈到る處に發見されつゝあるが、未だ大鑛區として見るべきものはない。砂金の採取は支那人、馬來人等が、組合を組織して、従業して居るものを見受けるが未だ尙幼稚で、其規模も大なるものはない。

ダイヤモンドは本島の西部及東南部に産し、最近の年額三千カラット以上に及ぶこともある。採取者は馬來人が多數を占めて居る。（ダイヤモンド採取光景は後に詳述する）

時局下の現在に於て、吾人に垂涎萬丈たらしむるものは、蘭領ボルネオに於ける豊富なる石油鑛である。

ボルネオには蘭領の東南部に優良なる油田を有し、其大部は第三紀層中の中新世及び最新世層中に發見せられ、其油脈は偶々石炭脈と出會して居ることがある。

石油賦存の地層は大抵多孔質であつて、概して粘土或は砂礫にて蔽はれて居る。其重要なる石油脈は、重に油田をなし、從來の事實に徴すれば、最も産油多きは、壺狀油脈に連つた油層である。

ボルネオ産の重油中には、多くの芳香炭化水素、及び揮發油を含有すると共に、比重高きベンジンを含有して居る。且極めて多種の成分から成つて居る。

九

東部ボルネオ、サンガサンの油田は、本島中著名の油層であるが、此地方は其探掘の異なるに従つて其成分を異にして居るのも見取られる。

東部ボルネオ、タラカン島より産する重油は優良なる燃料油生産原料として有名である。これは〇・九五の比重を有して居るが、不純物除去と共に、燃料或はダイセルモーター用油として使用せられる。タラカン島は、英領北ボルネオとの國境近くにある周圍三十五哩の一小島で、東南部に大油田を發見したのは、一八六〇年頃で、加奈陀のタスピータと云ふ一船長が、給水を求めようとして、この島に寄航した時、小川の水中に浮游して居る原油を、發見したのが嚆矢と傳へられ、其後サミエール社派のセール石油會社の有に歸して、一九二〇年には、年額七一、一〇八噸に達し、實に本邦の全産額を凌駕して居る。

英領ボルネオにも從來有數なる油田がある。又、最近海底より探掘も開始され、將來有望視されつゝあり、又蘭領バリト河の河床からも有望なる油鑛が發掘され、最近ボルネオ島に於ける石油鑛は多事多端の狀況を出現して居る。

本邦に於ても、近年協和鑛業會社が蘭領ボルネオに於て、銳意ボーリングに精進して居るが、未だ尙前途遼遠の感がある。然しこれは決して失望すべきものでない事は當事者其れ自身が覺つて居る通り、其前途には頗る洋々たるものがある。

土人ダイヤ族の傳説には、「ダイヤ部落の奥地には、光輝燦然たる大金鑛の露頭がある。然し此境に入つたものは神隠しに會ふて、再び生還する事が出来ぬ」と語り傳へられて居るが、著者は、こは或は此邊に、天然瓦斯などの噴出の場所があり、其處に大金鑛の露頭が存在して、これに近づくものが、窒息して死に至るので、神話的に語り草となつて居るのではないかとも想像するが、何れにしても、大ボルネオの鑛富は、未だ推測すべからざる、無限の埋藏量を有し、頗る將來性あるものとして、探檢的餘地を存するは、争ふべからざる事實である。千古のまゝ鎖されたる、大ボルネオ奥地の神秘境こそは、眞に日本男兒の蹶起突進すべき、好個の活舞臺である。

學術探檢には國境なし、現に外國探檢隊は、日支交戰眞只中の北支方面に活躍して居るものがある。況してや白人が放棄しつゝある、大ボルネオ奥地に、邦人學術探檢隊の進出を阻止する何等の理由もない今日、只單に國內資源の窮乏に、泣言の百萬辯を繰返すより、脚下同様の此方面への關心を拂ふことが、大國民族を有する識者の最大責務ではあるまいか、否か。

ダイヤモンド鑛とダイヤ族

上はやんごとなき王侯の寶冠に、下は賤しき浮かれ女の指頭のものに鑲られて、燦然たる光輝を放つ、世にも珍重さるゝ、寶石界の王者金剛石が、白人からは恐ろしい鬼畜とも想はるゝ、蠻骨稜々た

る喰人種地域の、大ボルネオの名産とは、其對照が如何にも奇抜極まるもので、造化の戯れともいふべきものであらう。

大ボルネオは、北方サラワク、東南部バンジャルマシン方面にも、ダイヤモンドを産出し、西ボルネオ・ランダー州地方は、餘程古くから、金刚石の産地として知られて居る。

カツパース・ブツサーの一大支流たる、ランダー河畔深山幽谷の間には、到る處に金刚石採取場、採掘窖が散在して居る。以前採取した舊礦も澤山ある。ランダー河が乾季に際して、水勢の頓に減少した時には、河底の凹處からも採取するが、其多くは山岳からである。

或は想ふ、この石のダイヤモンドと呼ばれるものは、ダイヤ族の棲む國の山から出るので、かく名づけたのではなからうか。そして此地方に於ける採取従事者は、所謂喰人種ダイヤ族である。文化の何ものたるを解せぬ、元始人類其儘の喰人種ダイヤ族が、發掘採取した金刚石が、轉々して歐米に東亞に、世界文明人の頸に、腕に、指に、燦然たる光彩を發揮するに至るまでには、幾多の經路を辿らねばならぬは勿論であるが、今彼等が採掘の光景を敘するのも亦、興味ある大ボルネオの一挿話である。

土人の原始的の採取法

金刚石採取には、穴を掘ると、水流を利用して溝を掘り、其水上を掘り崩して土砂を水流に流しな

がら、所々に拵へた凹溜に沈澱するのを採ると、前項に述べた河流中の凹所に沈澱したのを、乾季に於て探索して採るとあるが、いづれにしても原始的の採取法である。

前二者は何れも最初に金刚石の層を採掘する。採掘には、ロツボ、或はジャンダーと稱する指頭大の光澤ある玉砂利のある層を發見するのが先決問題で、ロツボやジャンダーには、必ず金刚石が混じて居るからである。

採掘にはブラジャーと稱する鎗狀の長い鐵棒で、土砂中を衝き試み、鐵棒の尖頭の觸感によつて、其層なるか、否かを検討するのである。そして其層を探り當てたなら、淺きは三四米突、深きは十五六米突に達する、方三四間乃至七八間の窖を掘り下げ、其採掘した小砂利を木製のドラムと呼ぶ選別器に入れ、これを水中で巧にぐるぐまわして、土砂をふるい落し、あとに金刚石の殘留するのを採るのである。金刚石には砂金も混合して居て、砂金はほんの景物的に過ぎぬが、時にはこの砂金だけで、其採取費に充當することがある。

時には馬來人支那人も採掘する

従業者の多くは、前述の通り曆日に無頓着な土人の仕事で、少なきは三四人の一家族、多きは十數人乃至數十人の組合で、半永久的にやつて居るのもある。又時には馬來人、支那人など稍大規模に數

十名のダイヤ苦力を使役して探掘して居るのも見受けた。

金剛石採取は一六勝負的事業

さても金剛石と名が付けば、極小なもので一個幾十圓といふ價値が存し、大なるものは時に幾千圓幾萬圓はあるか、數十萬圓に達するものがある。かゝる貴重なる天下の名品だから、これが採取には豫想外の苦勞がある。餘程氣長なものでないとやれぬ。運がよいと一日に一組合で相當なのを二個三個と採り當て、數百金數千金の収益に、ほく／＼することもあるさうだが、これが運がわるいと、一月、二月かゝつて、石らしい石には、一個も出會さぬ不仕合せなことがある。かゝる際は、小規模的の土人等は、結局只働きの損失丈けだが、大規模でやつた資本主は、随分莫大な損失をする。

嘗て我日本人村の連中も、土人を使役して、一二ヶ月間金剛石採取に従事したが、あまり利益も得られなかつたので、採算的の事業ではないとして居る。

嘗て英、蘭の資本家も、大規模的採掘を試みたといふことだが、其永續しなかつたのを見ると、矢張打算的には行かぬものらしい。

本島では、従來南亞の産地程の金剛石産區は未だ發見せられず、これも亦一つの秘められたる大きな謎である。

然り、金剛石は無暗にあるものではない。世界を通じて其數量が少いから、名石たり寶石たるので、世界に知られたる金剛石の特産地たるこの地でも、金剛石採掘が一種の冒險的起業とされ、所謂一六勝負的の仕事とさるゝのである。

ダイヤ族の神秘的迷信

ダイヤ族は、金剛石の發見に一の神秘的迷信を持つて居る。彼等は多く神の力によつて、金剛石は秘藏されてあるものと確く信じて居る。そこで其採掘に當つては、必ず神を祀りて、成功を祈り、且日常の行爲にも、只管謹慎の意を表し、丁度我古來の刀鍛冶が、名刀を鍛鍊する時の様な、徹底な心理的狀態にあるものと見える。彼等は其場合に輕我でもすると「神は未だ我等に此地の金剛石を賜はる意志がないのだ」と諦め、あつさり其地層を斷念して、更に新層にと轉するのである。彼等が金剛石を採り當てた時は勿論だが、其新層に取りかゝる劈頭第一には、必ず酒宴をやり、所謂前祝ひをして、神に祈りを捧げ、中間に於ても同様に、神に中間報告をするなど、一種の迷信と、射的的兼樂的で所謂道樂半分の氣分でやる様に見受けらる。

結局利益は馬來人や支那人

かくて、千辛萬苦根氣よく、鶴の眼鷹の眼で、やつと掘り當てた金剛石は、多くはこの地方在留の馬來人、支那人等の、金剛石仲買業者に買占められる。其際原石に粗製的研磨をなした上、價值幾許と決定され取引される。そして、首都のポンチアナから、シンガポール、スラバヤ等を経由し、次で歐米や東亞の文明市場に出る。其處で金剛石研磨の本場で、本磨きをかけられ、一層其硅角を増すと共に、燦然たる本色を發揮し、各種の優秀なる裝身具に鑲められ、世界の社交會花形の持物となるのである。

ダイヤ族は原則として、採掘した最優秀品は、土王に献上することになつて居る。著者が數次謁見した、サンガウ王も、優秀品を澤山所持して居て、觀せて呉れたのであつた。

ポンチアナ市には、小規模の金剛石研磨工場があり、常に巨額の利益を占め、中には一角の富を得たものもあるさうだが、採取者たるダイヤ族連中は、金剛石で得た金は、忽ちの中に酒食の享樂に費して得たるので、根つからの金剛石成金も出來ず、現在まで依然として、道樂氣分で採掘に従事して居るのである。

金剛石の富礦探検！ これも亦、神秘境大ボルネオに於ける、愉快な一つの好課題である。

大ボルネオの林業

大ボルネオは、今日も尙人類の舞臺ではない。前記五大河流を溯航して觀ても、中流以上になると、行けどもく入里はなく、兩岸の平野は森林に蓋はれて、深山に續き、太古の儘に幾多の神秘を藏して、禽獸蟲魚の棲むに任し、人類開拓の遅々たるを嘲笑し顔に、樹々には果實のぶら下つた様に、嬉々然と戯れ遊ぶ猿猴の數千數萬の大群、數百頭の野猪の群、鹿の集ひ、九官鳥、啄木鳥などの、珍奇な愛らしい熱帯鳥の交響樂、夜となれば、河を壓する螢の光、絶え間もなき蟲の聲、行けどもく十里二十里とつゞく無人の境地に、鬱蒼たる巨樹大木の用をなすべきものが、未だ嘗て斧鉞に接せず、年と共に朽ちつゝあるものが多い。本島に於ける林業はこれからである。

著者が調査した有用木材を列記せば、先づ朱檀、黒檀、白檀、鐵木、沈香等の高級建築用材も豊富で、マンブシ、マンタンバカ、エムハク、トンブラオ、カユマダム、カユチナ、マランテンブレガ、マチカク、ピントンゴルブンカ、ブライ、パヨール、テンカワン、マヂヤオ、カラダント、ラワン等は、いづれも建築用材、鐵道枕木、羽目板、天井板等に用ゆべく、造船材料、家庭器具としても、勿論十二分の使用價值を有するものである。

現在我内地に於て、既に資源難を叫ばれつゝある、パルプ資源の如きも、將來其經營の如何に依つて、相當の利用價值あるを認むるが、今後大に研究すべき問題である。

林業に次ぐものに、ボルネオ全島に産出する籐の到る處に豊富なことである。現在籐は粗製のまゝ、

新嘉坡及香港を經由して、世界に輸出されつゝあるが、これが精製を試むるも亦有利なる一事業であらう。

叙上の木材及籐の如き、土人は孰れの地に於ても採取隨意で、個人的の所有權はなく、多くは組合組織で採集し、大なる筏を編成し、大河を利用して、恰も浮城然たる大筏を、水流のまに／＼河口の要港に流すのであるが、水流の緩漫なる爲、一ヶ月二ヶ月の日子を費して、河口に達するので、大筏の上には、二三家族の居住たるべき小家を作り、時には牛、豚、鶏などの家畜をさえ伴ない、幾組かの家族を載せて悠々流れ下る様は、全く曆日なき香氣な土人でなければ出來ない藝當である。

籐の外にも、幾多の野生の叢林産物がある。就中、ダマル、コパール、の如き樹脂、野生護謨、カツチ、テンカワン等の如く有用なる天然産物は、到る處に散在して、採集者の來るのを待ちつゝあるのだ。

サゴ椰子、砂糖椰子の如きも、叢林中にて隨所に發見され、採收されて居る。

徒らに資源難に陥りて、國民に困苦缺乏的忍従を、強要しつゝある現代の政治家は、一度眼を轉じて我隣接地域に、かゝる天與の豊土あるを見直し、而もそれが、寶の持腐れに放置されてあるに想し、平和的交渉の下に利用厚生之道を講じ、萎縮緊張井蛙然と、古物や代用品に憂身をやつすよりも、今少し積極的に、進取的に局面の打開を工作する事こそ、所謂國際正義遂行、人類愛護向上發展

の最捷徑ではあるまいか、否？ 咄！。

米作其他各種栽培の好適地

前述の如く護謨殖林の好適地なると共に、大ボルネオの沿岸地域は古々椰子栽培の好適地多く、奥地に到れば、胡椒、タピオカ、砂糖椰子、サゴ椰子、パインアップル、バナ、米作、茶、等の發育に適し、筍の如き蕨の如きも年六回發芽し、各種の野菜もよく生育し、近年は柑橘類も有望視され、又棉花の如きも好適地ありと言はれ、嘗ては不利益と斷ぜられた糖業地の如きも、著者の視察した結果に於てせば、内部奥地には好適地を發見する自信あり、香料、塗料の各種植物栽培も有望である。

大ボルネオは、其中心地が赤道直下に位置する熱帯地ではあるが、其氣候も年中を通じて、我臺灣よりは比較的凌ぎよく、奥地海拔百米以上の高地帯に入れば、更に氣温も低下し、年中七八十度以下で、奥地に入るに従つて、亞熱帶的地方もあり、將來交通路を開拓して、四通八達の便あるに至らば、人類生存の好適地たるは勿論にして、全島を通じ、數千萬の移民を收容する可能性あるは、著者の信じて疑はざる處である。殊に邦人の活舞臺たるべきは、以下更に詳説するであらう。

畜産、水産も亦可なり

蘭領ボルネオの如きは、近年土人の壓迫から、土人が武器を所持するを禁じ、銃砲の如きは、發見次第官憲が沒收する爲め、野獸の繁殖横行甚だしく、野豬の如きは、時に二百三百と群棲するあり、此故に野豬は蛇を好むで食するので、蛇で有名であつたボルネオも、近年は蛇が減少した程で、將來牧場を經營したなら、牛、豚、羊等の好飼育場が得らるべく、又河川には、人類の稀薄なる反比例的に、到る處魚類の發生頗る多く、アドンガンと呼ぶ、大鯉に彷彿たる大魚を始め、コンコン、クジャン、カランジヨ、スルワンなど呼ぶ鮎、鮠に似た美味なる無数の小魚に富み、鰻、鱒、鰻等も頗る多く、一舉手一投足好下物を捕獲するに容易で、著者の如きも、祖國に在つては、投網などは下手で、餘り試みやうともしなかつたが、ボルネオ滞在中、數次投網を試み、どんな下手でも魚の取れぬ事なきに感興を得て、遂に投網の名手となつた程で、釣の如きは一年中不適な時はなく、大公望には絶好の樂土である。銃獵も亦年中禁止季節もなく、山に海に獸、鳥類の捕獲に容易で、副食物の缺乏は夢にもないことである。

米作は年二三回可能

米は熱帶の特産物であるから、本島にても土人は定食として、原始的な火田の法によりて、陸稻を作るのだが一回の收穫で僅に二年間の需用に充つるを得るので、元來蓄積心なき土人は、缺乏する迄

は作らうとせず、時には困ることもあるが、其處は野に山に食物は豊富だから平氣である。邦人が經營するなら、立派な水田も得らるべく、又年に二回三回の米作も容易で、これを滿蒙地方の如き半歳は冬籠りせねばならぬのに比較せば、其生活程度は實に問題とならぬ樂天地である。

大ボルネオに生活難なきは、無智蒙昧な土人が、悠々自適呑氣に天恵に浴して居るに徴しても明らかである。

米作好適地にして、其氣候も邦人に適する、其他好條件が邦人に恵まれて居る、只其自由進出に多少の外交的工作がなくてはならぬ丈である。

「行け八紘を家として」……………

然り行くべき絶好の天地は大ボルネオである。我政治家は先づこの好適地あるを見直して、殖民政策の第一條件に入れなくてはならぬと思ふ。

現在大ボルネオの實際勢力者は？

現在大ボルネオ、英領と蘭領とを通じての居住人口は推測總計約二百萬人と稱せられて居る。就中大多數は土人インドネシヤ系のダイヤ族で、此種族は沿海地及港口の市街部等を除き、全島に居住して居る。百四十萬乃至百五十萬人と推測される。土人に次では馬來人が約三十五萬人で、中心勢力者

は何といふても馬來人である。大酋長を始め小酋長、部落長の大部分は馬來人である。次は支那人で、全島を通じ約十五六萬人と稱せられ、西部ボルネオは殊に支那人が優勢である。ボルネオが英、蘭の領域確定以前は、一時支那人の勢力下にあつたことがある。現在に於ても、商業界の實權及河川航行權の如きは事實上華僑の獨占場裡ともいふべく、華僑の手足となつた支那苦力は、如何なる奥地にも侵入して、支那人部落を構成し、農民生活をなしつゝ、其片手間に土人と物々交換をなし、あらゆる遺利を細大洩さず獲得して居る。

現に支那人は一等國民として取扱はれず、其起業に對しても、例へば銀行會社を創立する場合には、一等國人を重役に入れねばならぬことになつて居る。又汽船なども一千噸以上のものには、其高級船員は皆一等國人ならざれば航行權が與へられぬので、此間非常な不便利があるが、克く隱忍自重して、二代三代に亘りて、致々として其地盤を造り上げ、遂に今日に至つた事は、一は彼等に信頼すべき祖國がなく、寧ろ海外の他國領域に在る方が、生命財産の安全なるにも因るが、要するに、海外發展の素質が邦人よりも勝れて居ることは、現在南洋各地在任の華僑總數が、約五百萬人といふ大勢力を有するに徴しても知るべきである。

一面持てる國側の英人蘭人の多くは、官公吏、銀行會社員、士官等で、全島を通じ白人の總計二十人以内なるべく、此間にありて邦人は合計千二三百人で、護謨、椰子栽培業、農業、工業、鑛業、商業、漁業、林業、其他雜業に従事しつゝあるも、更に莫足を伸ばすべき餘地の多々あるは、茲に喋々するまでもない處である。

日本人村の唯一の協力者

—— 白人の所謂喰人種族ダイヤ族 ——

大ボルネオ全島を通じて、百五十萬人は居住すると推測さるゝ土人は、白人からは喰人種の名を冠せられて居るダイヤ族であるが、成程此民族は、未だ尙文化に浴せぬ、太古の姿其儘で、頗る鬪争を好み、常に他部落と勢力争ひをなし、又室内を飾るにも、敵の晒首を多く羅列しては誇りとするので、白人の恐怖感念から、喰人種の名を冠するに至つたものであるが、必ずしも白人が想像する様に、人肉を嗜食するものではない。野にも山にも、河海にも、一舉手、一投足の勞力で、彼等は佳肴珍味が獲得されるのである。然るを彼等が白人から、鬼畜の如く扱はれて居るのは畢竟多年の間、白人に征服され、白眼視され、冷遇、壓迫、侮蔑、鞭撻、驅使さるゝので、一種の反動的行爲となり、常に抗白意識に燃えて、残忍性を發揮し、相互に反目する爲めであり、白人官吏は往々襲撃を受け、兇刃に倒さるゝ事もあるが、彼等も白人の文化には潔く甲を被いで降服して居るので、善意を以て指導したならば、決して喰人種扱ひをする必要はないと思ふ。

論より證據、我等の先驅者支那拓人は、早くよりダイヤ族を手足として使役して居る。

現に我が日本人村はダイヤ族の部落たる奥地ランダーに在り、彼等ダイヤ族は終始邦人の忠實なる僕婢となり、荒蕪地開拓に献身的努力を吝まず、唯一無二の協力者であることは、實に邦人の意を強くする處である。

著者の如きも、往年ダイヤ部落に滞在し、起居飲食を共にし、其探検視察に際しては、ダイヤ族の若者を従者として、食糧や寝具等の運搬に使役し、河川航行の船頭たらしめ、或は猪狩り、魚漁り、鳥獵の伴侶にしたが、實に柔順にして、而も純情の持主である。嘗て著者がマラリヤ病に冒され、土人部落で呻吟した時なども、至れり盡せりの看護振りには、鬼神も怖ぢぬ著者も、感激の涙に咽んだものである。想ふに喰人種てふ冠詞を彼等に附したのは、白人が或種の警戒から、鐵條網變りに使用したのではないかと臆測さるゝのである。

殊にダイヤ族は、他の何れの國よりも、我邦人を信頼し敬慕して呉れる。支那人にも喜んで其使役に甘んじては居るが、支那人は往々欺瞞的に其賃銀支拂などを誤間かすので、決して彼等も信頼はしない。此點支那人と邦人とはよく區別して、格段の差を以て、邦人を尊敬する點は非常に心強く感ずる處である。

こは由來ダイヤ族は、其骨格、皮膚、頭髮、眼光から推して、印度人、馬來人、支那人等よりも日

本人に酷似して居る。其氣質性格迄が邦人其儘である。武勇を好尚し、武士道的潔癖性を有し、廉耻心に富み、正直にして淡泊な點、かく數ふれば一事が萬事日本民族に酷似して居る。其敵首を飾りて喜ぶ邊は、我元龜天正時代の古武士が、敵首何級を獲たと、武功を誇る第一條件にすると、五十歩百歩で、武術に於ても亦、稍類似して居る。其處に何等か血脉的奇縁があるのを發見するのである。

茲に於てか斷案するものがある。曰く時は今である。既に人の和がある。既に地の利がある。吾人は徒らに右顧左眄する必要はない。逡巡拱手することはいらぬ。神人共に許す絶好のこの寶庫を、開拓する完全の鍵は邦人の手にせねばならぬものである。叙上の一事に徴しても、大ボルネオ、大ニユーギニアの如き、白人の所謂喰人種地域は、潔くこれが開拓の適材者たる邦人に其所置を一任し、白人は須く大地主たる權利を收得する所謂共存共榮の策を講ずることが、應ては世界平和と人類幸福とを増進する捷徑である。

又我邦人にして、眞に血あり熱ある拓人は、申すも畏きことながら、神武天皇の東征肇國の聖業を偲び奉り。狹國は廣く、險國を平げてふ、神代からの祝詞の神意を體得して、特に日本民族に遺されたる、天與の豊土を開拓することは、何を措いても着手遂行せねばならぬ、現代焦眉の急務である。

然も近來白人中の識者はこれを是認しつつあるにも拘らず、我政治家に關心少なく、我財界人に義

憤なきは、かへすくも千秋の恨事で、慨然筆を投じて、轉だ長大息を繰返さざるを得ぬものがある。遮莫！吾人開南健兒たるものは、飽くまで邁進せねばならぬ。「世界を制せんと欲するものは、先づ熱帯を制せよ」。然り今日東洋制覇の大業すら、資源地域たる熱國を除外視しては、何事も出来得ない現状ではないか。

請ふ先づ以下に記述する、ダイヤ族の風俗習慣上、如何に拘すべきものがあるかを知悉して、除るに國家百年の大計に向つて局面展開を試みやうではありませんか。

ダイヤ族の其通用語

ダイヤ族には由來固有の土人語がある、而もそれは部落々々に依て相異なり、これに通ずることはなか／＼容易ではないが、多くのダイヤは、現在表南洋の國際的通常語たる馬來語を熟知して居る。中には蘭語や英語すら解し得るものもある。一般的には馬來語で充分用が達せられる。因に馬來語は、其使用範圍頗る廣く、馬來半島、新嘉坡を始めとし、蘭領東印度諸島、英領ニューギニアに及び、又印度の東南部、暹羅、緬甸、比律賓諸島等に我委任統治内南洋群島にも通用し、約一億數千萬人の通用語で而も叙上各地に於て活動しつゝある人種の、共通せる國際語でもある。此點馬來語の習得は、表南洋に活躍せんとするものゝ、是非共必要なる問題である。

馬來語並にダイヤ語中には、我薩摩地方の方言に類似した言葉が頗る多いのも妙である。且邦人が習得するには他の何れの國語よりも比較的容易である。

至極理想的なダイヤ族の棲家

彼等は先天的に神の寵兒である。先づ以て、綽々として餘裕ある廣大なる天地に生を享け、文化人の多くが現在惱みつゝある、幾多の生活難も知らぬ顔に、のび／＼と太古の儘の姿で、生存競争も知らず、權利義務も論ぜず、醉夢死の極樂生活を送りつゝあるは、天惠豊富なる地域なるが故であることを如實に物語るものである。

すぐ傍の山には、天を摩せんとする蟲々たる老樹が林をなし、萬代不朽の鐵刀木や、黒檀、朱檀などの高價木が無數にあり、カユマダムと呼ぶ我樺に似た、柱や板に適した、土人が獨木舟にする良材があり、少しの手數で、無價で得られる建築材料は豊富だから、金殿玉樓思ひの儘なるにも拘らず、彼等は太古のまゝの粗糲極まる、原始的棲家である、細い竹の様な木を柱とし、屋根は椰子の葉や茅の葉で葺いた、いぶせき小屋に甘んじて居る。

たゞ床下が約七八尺位の高さで、立歩して通行出来る。室への出入は梯子であるから、土間でも二階でもない折衷的のものである。しかしこれは至極衛生的で、日本の床下の様に空氣の流通悪しく、

年中陰氣で濕氣臭いのに比較して頗る理想的である。これは一は野獸の侵入を防ぐ爲めと、一つは暑熱を緩和する爲めとの必要からで、防寒の設備は更に必要としないから土壁はいらぬ、椰子の葉か木皮で室の周圍を塞ぐ丈けである。

由來勞力を吝む彼等は、一家族毎に家は拵へぬ。數家族或は十數家族の共同住宅であるが、日本の貸長家とは異なつて、アパート式に食堂、客室、婦女子の仕事兼幼兒の遊び場、米穀置場の如きも共同的で、棲家の中央部は通し廊下式になり、各自は一家族毎に、八疊乃至十二疊敷位の寢室を有し、一家の起臥團欒はこの部屋でやる。そしてこの家の年長者が、家長兼部落長である點は、自治の制度も頗る理想的である。

床はすべて小さい丸木を粗雜に籐で編むたもので、廊下などは我々でも縦に踏むと足を落しさうだが、彼等は子供でも慣れたもので、決して足を落さぬのは奇妙である。籐で木の皮を編むた敷物、草の葉を巧に編むた敷物等が、寢室や客室に敷いてある。敷物の製法は頗る上手で、客室の分は特に念入りで、何時新調したのを備へ付けて居る。これは一つは彼等の客を遇する唯一の儀禮でもあるのだ。

彼等にはこれが最上の樓閣である。日本の様に地震國でないから、耐震設備もいらぬ。滿蒙の様に耐寒設備もなくすむ。粗雜極まる掘つ立て小屋でも、雨露さへ凌げばよいのである。只年中蚊が居

るので、粗製でも蚊帳丈は必要である。蒲團は煎餅蒲團でよい。

我々がダイヤ部落を旅行するに當り、往々叙上の大家族的棲家に、一夜乃至數夜の宿を借ることがあるが、老弱男女が擧つて、珍客御座れと計り慇懃親切に優遇して呉れる。そは文化の都市で、設備は完全して居ても、獨り淋しくホテルの部屋で起臥し、金銭づくで待遇されるのとは、寧ろ人間味豊かで、氣持ちがよく、旅情の憂さを晴らすに足り、往昔の名ある武者修行者の旅行もかくやと惚ばるゝ計りである。

大ボルネオの奥地旅行には、この棲家が五里に一戸、十里に一戸、或は二十里三十里にして一戸がある。斯かる人煙稀なる地域に、悠々自適些の生活難もなく、勿論就職難も、行路難も、人生の惡競争もなく、平穩無事、太古のまゝの粗野の原始的生活に甘んずる、彼等の棲家には、何等の裝飾も、何等の美術も發見されないが、其處には文明人の様な、隠匿される幾多の罪惡もなく、欺瞞も虚榮も奢侈もないのである。只單に人間味豊富な清淨無垢な樂園であり、太古を偲ぶ平和な神仙境でもある。

厠は「かはや」の本家本元

ダイヤ族の棲家に次で、茲に特記すべきものは、尾籠ながらも、奇抜極まる彼等の厠のことである。これは此地方の馬來人、支那を通じ同型であるが、孰れも河流の岸邊に建てゝあることだ。

元來かはやなる語は、河家といふのが本當で、日本でも太古は、河邊に便所を造つたものだと、古い文献にもあるが、土人の「カツコース」と呼ぶこの地の廁こそ、眞正のかはやで、これがかはやの本家本元であらねばならぬ。

ダイヤの棲家は概して河川の邊に建てられてある。勿論彼等の部落は交通上河川の沿岸にあるから、一戸用も共同便所も河岸には必ず在る。日本の野雪隠の様な小屋が、大なる樹幹數本を筏の様に浮べた上に建てられて在る。これは比較的進化した部落のものだが、至極原始的なものは、河岸に大木を一本突き出して横たへ、何の圍ひもないのに、男も女もお尻を出したまゝ用を達すのだ。隨て朝の起床頃になると、この河上に横はる大木には、老弱男女がお尻を並べて、競争的に用を達すのである。これはこの地域獨特のもので、他にはない一奇觀である。遠くから眺めると恰も小鳥が樹の枝に鈴なりに、止まつて居る様でもある。そして彼等は用を達した直後には、必ず河水でお尻を洗滌する。紙や草の葉で拭くことはせぬ。これも熱國特有の習性で、至極衛生的であり、彼等に痔疾がないのは、一つは用便後洗滌する資であらう。

我々も旅行中は、日常この水上廁で用を達したが、これは自然的の淨化便所で、一切れ毎に下流に運んで呉れるから、實に天下一品の氣持ちのよいものである。日中でも納涼氣分で用が達せる。これを晝尚暗く、冬も尙ムツとする様な、温臭味を感じる日本の舊式の廁と比較すれば、豈地ながらこの

かはやの方が數等優秀であるとも言へる。然し其處には一得一失は免れず、下流の者は、上流の者のお流れを頂戴せねばならぬ。朝などはふわり〜と小土左衛門が上流からやつて来る。土人はこの水で平氣に洗面もやる。米野菜も洗ふ。飲用料にも汲むのである。が其處にはまた好都合な事もあつて、河には非常に流蕪を好むジョアラと呼ぶ、我が國の鯉の様な形の魚が居ることだ。この好蕪魚群が待ち受けて、セツセと衛生掛りとなつて呉れるから重寶なものである。時には脱糞と同時にパクリとやられ、鰐魚でも來たのではないかと臆を冷すこともある。而もこの好蕪魚ジョアラは、熱帯魚には珍らしく肥えて居るので、脂肪が多く頗る美味で、土人が無上の珍味として嗜好するのも妙である。

又この廁は、ダイヤ族の婦女子は洗濯所にも併用する。

嘗ては南極の大陸、氷雪益々白皚々たる清淨界に、所謂雪隠の語の眞髓を解し得た著者は、其以前西比利亞原頭、青草茂る綠果なき曠野に、誰憚らぬ野蕪の快感を體得したこともあるが、ダイヤ族の廁の妙趣には、頗る喫驚すると共に三嘆し且つ共鳴さざるを得なかつたのである、呵々。

裸體にもとりくの裝身具

如何なる野蠻民族でも、温帯乃至寒帯に住居する者は、如何に簡易粗野であつても、防寒に備へるを原則とせねばならぬが、其處は熱帯に生を棄け、四季の變化もなく、寒暑の往來もないから、年中

赤裸々で過ごされる、この地のダイヤ族こそは、天下随一の氣樂者である。彼等が着物を必要とするは多くは夜間就眠の際か、降雨の時位のものである。

生れ落ちると、所謂一絲も身に纏はず、天真爛漫の赤裸々のまゝで育つた彼等、山で遊ぶにも、野でも、川でも、海でも、裸跣で飛び廻り跳ねかへつて、成育した彼等である。稍長じてからは、流石に陰部丈は隠すが、男も女も木皮そのまゝで、禪となし腰巻となすのである。或はまた木皮の袖無し半纏ともなすのである。大樹一本伐り倒せば、忽ちにして一家所要の着用衣類は此木の内皮から得られる。ダイヤ族は、太古からステープル・ハイパーの愛用者である。此點丈はダイヤ族に劣らず、邦人間にも近來ス・フの全盛期で、文明の逆行も此處までに到達すると、笑へない一個の悲哀的ナンセンスでもある。

ダイヤ族も、文明に接近した者は、木綿の腰巻、メリヤス襦袢位は着て居るが、これとても一二着あれば充分で、洗濯すると一二時間経てば、直ぐ乾く處丈けに氣樂である。

我々探検人、或は拓人等も、一度この境地に入ると、夏衣一着、寢具、下着若干があれば、優に文明人の態度が保たれる。小さい旅靴一個で、我々の着物を入れるに充分である。

進化部落のダイヤ族でも、衣服は別に美しいものを欲しがらぬ。多少餘裕あるものは、首飾、指輪、腕輪、足輪、腰輪、四肢五體、金銀珠玉を以て裝飾することを好む。着物に贅を言はぬは熱國人の通

有性で、ダイヤ族も装身具に、金銀寶玉類を見せびらかして得意とする。中には日本の古い一圓銀貨の大型大の蘭貨で、腰輪を作つて、得意然と第一装用にして居る。又金貨銀貨でボタンを拵へて居るのも見受けた。

男子は頭部を白布で巻くが、これは各部落に依つて、各特色があるのも面白い。帽子代用とも見られるが、一つは馬來人回々教徒の風俗習慣が普及したものらしい。ダイヤ族は人眞似を好むので、頭髪を白布で巻いて居るからとて、必ずしも回々教徒ではないのである。

人眞似と言へば下記の様挿話がある。著者は嘗てダイヤ族の部落に居た時、邦人の勞働者がよくやるやうに、手拭を頸に巻いて、山野を跋涉して居た。處がダイヤの若者は、

「且那のネクタイは面白い、そして汗ふきにもなるから頗る便利だ、一枚私にも下さい。」

といふので、これを與へると大喜びで、部落中を見せびらかして歩くので、所望者が澤山出來、所藏の手拭を大部分分配してやると、いづれもそれを頸に巻き、日本のネクタイだと得意然たる、無邪氣さ可憐さには微笑まるゝものがあつたのである。

彼等をよく善導し、よく教養をしたなら、今日の彼等よりも、數段有用な能力を發揮せしめ得ることが出來、吾人の眞の協力者として、神祕境開拓の第一線に活躍せしむることが出來る事は、著者の信じて疑はざる所である。

寝具はサロンか薄布一枚

生れ落ちた時から、裸體で暮す彼等には、寝具の如きも至極簡單ですむ。年中蚊帳は必要だが、蒲團は所謂煎餅蒲團一枚を敷いて、其上にサロン一枚纏ふたまゝでゴロリとなる。これで寒いと思ふ時がないのだから氣樂なものである。

サロンとは、表南洋、印度、馬來半島、熱國一帶に亘る住民の各人種共通的に使用され、腰巻とも、袴とも、着物ともいふべき、筒狀の綿布で、贅澤なものになると、絹布のものもあり、木綿のサロンでも、高級なものは、印度、ジャバ婦女の手工品で、畫き更紗として、頗る高價で珍重され、一枚數十圓數百圓にも價するものがある。

日本の袴はサロンの進化したもので、現在婦女子の用ゆる都腰巻こそは、其形狀サロンに彷彿たるものがある。

因に、馬來、印度などの婦女子は、其外出に當りては、サロン二枚を用ひ、其一枚は袴代用として、一枚はカツギに用ひ、上半身を頭髮上より纏ふ様、丁度我朝の鎌倉時代の上流婦人の盛裝カツギに酷似して居るのも妙で、寧ろこれも熱國の風俗が本家本元であるかとも思はれる。又比律賓婦女子の盛裝上着は我維新前の武士の儀禮に着用する袴に酷似して居る。

ダイヤ族も、進化した部落の婦女子は、外出の盛裝には時にカツギを用ゆるを見受けるが、一般にはサロンを腰以下に纏ふのみで、上半身は概して裸體である。但し處女は乳を布で隠して居るのも見受ける。

サロンは彼等の被服たるのみならず、子供の哺育用具にもなる。物品を包む風呂敷代用にもなる。而も製作は幅三尺、横五尺位一枚の布の、兩端を縫ひ合せた儘の筒狀だから頗る簡易、洗濯にも輕便で、熱國の代表的名物である。著者も旅行中はよく着用したが、頗る理想的で着心地もよい。

ダイヤ族男子の禪は、日本男兒の禪と同型で、所謂六尺禪である。これも多くは木皮製である。ダイヤ族男子の武裝した時(盛裝の時)には、腰に日本の力士が用ゆる化粧廻しの様な、赤、白、黄、青、緑などの各色を交差配合した、けばくしい前垂れ様な裝具を纏ふのも妙である。

ダイヤ族は、男女共バランと稱する山刀を腰にするが、男子武裝の場合はこれを二本落し差し、或は吊して居る。これも日本古武士を聯想せしむるものがある。彼等は更に、右手には獵用の吹矢兼手槍を持ち、左手には楯を携へる。吹矢の尖端には植物性の、混成毒汁が塗つてあり、これが身體の一部に命中さへすれば、全身に其毒が廻り、遂に命を落すさうである。

叙上の如く、サロンと袴、上着と袴、カツギ、禪、化粧禪、武裝等いづれも我國との共通的のものがあり、寧ろ其本家本元が熱國であると思はれる幾多の根據がある。其處に一脉の相通する何ものか

がある。くどん／＼しい様だが、想ひを茲に致し、此妙縁奇縁をして、唇齒輔車の域に進展せしめねばならぬではないか。

ダイヤ族の食物と嗜好物

白人は彼等を喰人種呼ばりして、さも人肉の嗜好人種の様宜傳するが、事實は我々東洋人通有の米が主食である、矢張白米にして炊いて食ふ。多くは印度人、馬來人の様に、熱國料理のカレーライスが其常食である。副食物には、鹽からの小魚、野菜、木の芽の類を湯に通して搗いて、鹽で味を付けたものが常用で、一枚の皿に飯を盛り、これに鹽カレー、唐辛、胡椒で味付けした獸、鳥、魚肉类や、蜥蜴、蛇、蛙、蝙蝠等の肉や、前記の副食物などを混交した、グロテスクなものを、先祖傳來の右手の五指で巧妙に口中に運び込み喫食するのである。彼等は決して箸とか、ホークとか、小刀の類を使用せぬ。我々がこの種の器具を勸めても、寧ろ五指でやる方が美味だといふ。但、彼等は右手では決して汚物を扱はぬが、これは食事の時、箸代用にする爲めである。我等がダイヤ族に物を與へる時も、左手を用ひたり、又方向を示すにも左手を用ゆることを非常に忌むのは、剛に於て左手は洗滌の役目を果すので、先天的に左手は汚いものとして居るからである。

天與の豊土、自然の樂園に生を享けた彼等は、自ら勞作して食用とするは、米位なもので、野に、

山に、バナ、鳳梨、チンプダ、椰子等の如き食料、或は無名の食用若芽、草の葉等が年がら年中、新陳代謝的に簇生して、少しの手足を勞すれば、食卓に上せらるゝのである。彼等の馳定とするものには、猪、鹿、猿、豚、鳥類、魚類、蛇、蛙、蜥蜴、蝦蟇、蝙蝠等がある。これらの好下物を捕へたなら、鹽煮か、焼くか、鹽漬か、鹽から等にする。鹽、カレー粉、胡椒、唐辛等は、彼等熱國料理になくてはならぬ調味料で、コーヒー、コ、ア、紅茶等の如きも朝から晩まで數回に亘り嗜飲する。洋食でも、和食でも、支那料理でも與へれば喜んで食するが、自ら進んで料理法を習得しやうとはせぬ。人は人、自分は自分、幾千年前から太古料理、原始的料理、夫れで丸々と子供も育つ、女も孕む、乳もよく出る。寧ろ其發育振りは、文化人よりも良好で而も早熟である。殊に面白いのは、生後間もない一週間位經過した幼児に、飯でこねた小さい團子をこしらへ、それを指頭で喉へおしこむのだ。乳の出の少ないのや、生母が幼児を寢籠に寝かして置いたまゝ、外出する様な場合は、多くはかうして育てるのだ。それで病氣も出ぬのだから不思議千萬である。彼等は湯茶よりも、コーヒー、コ、アを嗜飲する。食後は冷水を瓢箪の中から出しては飲む、水を呑むといふ言葉が、ミノムといふのも面白いではないか。

煙草は彼等の大嗜好物である、土地に出来る煙草をきざむで、ロツコといふ干草の葉に巻いて、巧みに巻煙草を拵へては喫む。女子は男子ほど好まぬが、男子は少年時代から盛に喫む。紙巻煙草を與へ

ると非常に喜ぶ。

殊に面白いのは、寺小屋式の小學校で、授業中に先生も葉巻をくゆらせつゝ教授すると、生徒も煙草を吹かしつゝ聴講して居ることである。尤もかくしないと、熱國のこととて居眠を催すからであらうが、此處にも蠻族は蠻族丈に人間味があると思ふ。

酒は彼等が、先天的唯一の嗜好物である。官憲からは酒造は絶對禁止されてあるが、彼等は巧に山奥に於て密造する。米作が豊饒な年などは、盛に造り盛に飲む。君子ならぬ彼等のことゝて、酔へば必ず亂に終る。首狩的鬭争の演ぜらるゝのは、酔餘の行動が其原因をなすことが多い。

ダイヤ族の婦女子は、好むで、熱國の特産物たる檳榔樹の實を、シレーと稱する葉で巻いて嚼む。彼女等の唇が、何時も紅色を呈するのは其爲めで、彼女等は敢て口紅を付けるからではない。此れも我國の婦女子が、化粧に口紅を付けるのは、所謂故郷忘じ難しとやら、其昔を忍ぶ習性からで、南來民族の一證左でもあらう。殊に近年のハイカラ女性に見受ける濃厚な口紅は、ダイヤ族の婦女子共儘である。あの濃厚な口紅と、南洋色の蠻的パーマネントの變態的近代婦女子を見ると、文化即蠻化といふことになり怖ろしくもなる。我々はこは寧ろ唾棄すべき一種の惡流行であると思ふ。大和撫子式婦女子こそ、日本民族の特色である。此點蠻的嬢の反省を冀ふに切なる所以である。

ダイヤ族の結婚とその奇習

熱國は生物のすべてが早熟である。要するに天恵が豊富で、神の榮光が普く、萎縮といふことを知らず、のび／＼と發育するからであらう。蠻人の常として、彼等は概して早婚である。彼等は早熟なるが故に、早婚するので、男が十四五歳、女が十一二歳になると、結婚期に入るのである。可憐なる少年少女が、椰子の樹蔭に嘯々私語するのは、多くは戀仲を語り會ふて居るので、彼等の遊戯友達は、やがていつしか戀仲になるのである。食慾と色慾との外には、殆ど何等の慾望を持たぬ彼等には、戀は其一半の生命でもある。隨て彼等には文化人程の結婚難はない。早熟即早婚の結果、隨つて早老も免かれないが、十五歳位で母となり、三十歳で祖母となるのだから、オールドミスは搜してもない。餘り長命はせぬにしても、思ひ残すこともあるまい。

併し彼等には多少の生活問題がある。如何に天與の恩恵に浴するとして、多少の勞力は人間生活に必要である。其處に働き手と、能無しとの區別が出来る。茲に於て父親の勢力のあるものとか、働き手の若者とかは、早く伉儷の契を結ぶことが出来る。

然り彼等に於て、結婚は人生の一大事である。殊に彼等は結婚式を、彼等の生活中最も盛大にする風習がある。多きは數百圓、極少きも、數十圓といふ彼等に取つては、頗る巨額の結婚費を要するの

で、花婿たらんものは、この費用の負擔能力がないと、其資格が得られない。

そしてダイヤ族の結婚の一奇習として、新婦が夫の家に嫁入りするのでなく、新夫が婦家に婿入りするのである。花婿は此際花嫁への持参品として、約七品のものを、用意せねばならぬのが常例とされて居る。これは各部落毎に多少の相違はあるが、上着、サロン、豚、タワ(樂器)レンパン、茶碗、皿、(約一打)レンゲバロ(通貨二盾半のもの)等は其制定品である。

さていよいよ結婚當日となると、花婿は盛装して、媒介者に連れられて、花嫁の家に行くが、花嫁の家では、門戸を堅く鎖して、靜かに待機して居る。それを外から「開ける〜」と敲くが、婦家ではなか〜開けぬ。この「開ける〜」が十四五回の後、媒介者は携帯した銃で一發打つ放すと、同時に鎖された門戸は開かれる。媒介者は待つて居ましたと計り、花婿を伴つて室に通るのである。

其處でいよいよ合衾の式が挙げられる。そしてかための酒は新郎新婦が、竹の管を酒甕につき込むで、互に吸ひ合ふのも面白い。此際花婿は手づから、花嫁へ指輪や腕輪をはめてやる。この式後親戚知己の大酒宴が開かれるのである。これが盛大なものになると、二晩三晩と續くのである。水牛、牛、豚、鶏等の、彼等が平素最珍重する高級料理で、酒も二十甕三十甕と飲む。其處は稜々たる蠻骨家揃ひの連中だから、文字通りの牛飲馬食、亂舞、喧騒、夜を徹して騒ぎ明すのである。

かくて結婚式が完了しても、新夫婦間には、今一つの一大事がある。それは式が終了した日から三日

の間に、新婦の親が、好きな夢を見ねばならぬことである。これがもしもよき夢を見ぬとなると一大事、此結婚は神意にもどるものとして、破鏡の悲嘆に到ることである。故に結婚式後、同衾はしても、親達がよい夢を見る迄は、××は罷り成らぬとされてある。

ダイヤ族は、由來一夫多妻主義で、勢力ある酋長などは、數人乃至十數人の妻妾を、而も同一構内に雜居せしめて居る。而も決して嫉視せぬさうである。

ダイヤ族の信仰

彼等の信仰は、其智識に準じて、未だ尙幼稚極まるものではあるが、其神に祈禱を捧げるといふこと、自己の上に最高唯一の神ありとの信念は、各國の信仰に共通的のものがある。現在尙醫藥の貢獻に普く浴し得ぬ彼等は、一度病氣に罹り、やがて瀕死の状態になると、一家一族集合して、大祈禱をなし、病氣平癒の願を懸けるのである。

大抵部落には行者の様なものがある。これは男子もあり女子もある。そして患家にはこの行者を聘して、神棚を病人の枕頭にしつらえる、これが丁度日本の神や幣の飾りとよく類似して居る。ニツバといふ葉で拵へた幣は、日本の麻や紙で拵へた幣と酷似して居る。神はないが、芳香のある花を、神の様に建てる。そして机の上に碗の様なものや並べ、それに彼等の珍味佳肴とするものを數々供へる。

更に又豚、或は鶏を生きた儘縛して供へる。これは神に捧げる最高の儀禮で、我國の生贄といふ處である。

夜間になると、患家では、一家親族故舊が會合し、行者を取り巻いて神樂を奏する。太鼓笛木琴等の樂器で調子を取り、行者は樂の呂律に伴れて、舞踊をする。これが又日本の神樂と酷似して居るのも妙である。

著者の觀たのは、若い女の行者で頗る盛裝して居た。行者はお祈の俗語の音頭を取りつゝ舞ふ。一同はこれに和して譚ふ、とても騒々しいものであるが、これが患者の枕頭で演ぜらるゝである。而も二夜三夜に亘り終夜これを續けるのである。患家も患者もこれを無上の榮譽とし、且病氣平癒を期待するのである。

彼等は別に神社佛閣を設けぬ。馬來人部落には、ラマ塔の様なものもあるが、信仰上同化せぬ彼等は、これに詣でる風もない。唯往々山中に木の偶像を建て、これに默禱をさへげつゝあるのは往々にして見受けられる。

雷雨は常夏の熱國には、四時を通じて始終ある。彼等はその電光はキラといふて電光視して居るが、落雷はグノといふて一種の怪神として、神様扱ひにし、落雷があると、何かの祟りであると、非常に恐怖して謹慎するのも、彼等の幼稚さが推知される。

嘗て和蘭の軍隊が、彼等を征服した時、山砲を以て攻撃したことがあるが、今も尙この山砲が山頂に放置してある。彼等はこれこそ雷様の正體だとこれに默禱を捧げるさうである。

ダイヤ族の耕作

彼等は概して火田民族である。恰も蒙古人が牧草を追ふて、轉々移住する様に、年々深林を伐り倒した樹木の、炎天に晒されて乾燥するのを待ち、點火して野焼きをなし、其燒跡を整理して、其處に粃を蒔いてゆく。天與の廣漠な土地を有する彼等には、一定の耕作地を專用する必要がなく、次から次へと火田の法で移つて行くのである。ダイヤの女房に向つて、其の兒の年齢を尋ねると、

「此兒は彼處で米を獲つた時、生れたのですから、其時から何處、其處の林を開いたから、今年で幾歳です」

といふ風に答へる。山中曆日なき彼等は、年中行事の火田の跡が、我等のタイムを知らず時計の様に、長い一生の思出の葉となるのである。

春夏秋冬の四季の代謝のない常夏の熱國にも、乾季と雨季の交代がある。毎年四、五、六、七及十、十一、十二月が雨季で、他の八、九、一、二、三月の五ヶ月は乾季である。

彼等は乾季時代に、各自播種撰定地に於ける、處女林に密生する、千年の老樹巨木を、一々伐木し

て、其處に一場の枯木の野邊を作る。伐木後二三ヶ月乾燥せしめ、これに點火して灰燼にして仕舞ふ。而してこの焼け野の原に糶を蒔くのである。この新開地には播種後一度も肥料を施さずして、豊熟せる米が出来る。

彼等は、乾季時代に林を伐り開いて、火田を拵へ、播種を畢れば、夫れで一年の糧食は得られるのである。彼等は何故毎年次から次へと、新開地を移してゆくか、それは火田には米と共に雜草が茂り、これを絶無にする事が、不斷な勞力を要するので、骨は折れるが一氣呵成の火田の法を選ぶのである。

ダイヤ族の糶蒔の行事

乾季に入ると、此處にも彼處にも、野燒きが始まる。遠方近方の枯野には、ホイ／＼ダイヤ族の若者が風を呼ぶ聲が、木や竹が火に爆破する音と相和して聽こえる。天をも焦がす、すさまじい野火、黒煙、白煙天に押し、恰も兵變を觀る様である。夜に入ると更に美しい、遠くから眺めるとイルミネーションかとも觀られる。

二三月前に伐り倒した森林地帯は、こゝにあとなく一面の灰と化して、立派な農場が出来る。ダイヤ族は此時が、一年中の緊張時代である。

今日は何處其處の糶蒔と決定すると、附近のダイヤ落部からは、猫も杓子も總出の大集團が出来る。

盛装した色の黒い娘もあれば、腕自慢の若者も居る。少なきも三四十人、多いのは二百人三百人の勢揃ひ、丁度日本の田植の様なにはひである。

火田では、一列二列三列と、列をなした男達が、間餘の丸い棒で深さ一寸程の小穴をあけてゆくと、女達は其あとから、其穴へ十粒内外の糶を巧に入れつゝ進む。日本の田植は、あとへ／＼と植えて退くのだが、ダイヤ族のは前へ／＼と進むでゆく。

多勢の糶蒔には、ドンガラドンガラと樂器が入る。美聲を誇る若い男女が、蠻聲を揃へて唄をどなる。手拍子、腰拍子、男は兎が餅搗姿の如く、女は鶴が小魚を漁りて歩む如く、黒い勇み肌の男、赤いサロンの色どりも、此地では優美な活畫である。

糶蒔には一定の馳走が出る。それは砂糖湯の中に飯を入れた「ボ、イ」と呼ばれる饈の一種である。糶蒔には必ずなくてはならぬ物物の馳走である。ダイヤの糶蒔はこれあるが爲めに景氣づき、これあるが爲めに喜色が溢れる。見物に行つて勧められるまゝに、著者も一椀味ふて見ると、喉が潤渴して、飲料を欲する折柄故、其風味に拘すべきものがある。成程此場合に於ける絶好の御馳走だと首肯される。

ダイヤは、二椀三椀とお代りをやる。そのあとでまたしたゝかに飯を喰ふ。下物には「ハカサレ」といふ酢ばい魚の鹽からが、無上の佳肴で、これを嘗めつゝ又鱈腹に飯をつめこむのだ。

かくて歡聲場裡に彼等の靱蒔の行事は終了するのである。

靱蒔は、ダイヤ族の行事に於ける唯一の大切なものである。農場には、彼等が假寢所の小屋が建てられる。そは彼等の部落から、二里三里と隔つて居る。日々監視に通ふのが骨が折れるから、交代で此處で監視に暮るのである。

小屋の傍には、甘蔗、高粱等いろ／＼の副作物が播種される。豚、鶏、犬等も連れて来る。ラダン小屋は一面彼等の別荘である。

彼等の農場は、一年毎に次から次へと移つてゆく。永久的農場ではないのだから、これに通ずる行路もほんの假道で、荆棘を切り開き、谷には丸木橋や、危ふい吊橋がかけてあるだけ、それでも彼等は平氣で往來する。子供も女も平氣で往來する。

著者も探檢旅行中、ダイヤ部落を尋ねつゝ、彼等の農場に迷ひ入り、不圖も、この峻しい難路を通過することがある。そして其處に甘露の果物を得て、餓と渴とを醫しつゝ、舌鼓の法悦にひたることがある。

農場には各種の蒔ものが終了すると、女連は折々通ふて雜草を取る。男は數十町歩に亘る、廣い農場の周圍に樹木で柵を作る。これは猪、鹿等の野獸の侵入を防ぐためだ、肥料は一回も施さぬが、天與の膏壤地には、いつしか美果豐熟の春が来る、秋が来る。彼等は全く神の寵兒である。

彼等の耕作は、全く原始的で、其處には何等の工夫もないのである。若しも彼等に我農法を教へて指導したなら、立派な永久的の農園も出来る、水田も得られる。畑地としても優秀ものが得られるであらう。

ダイヤ部落旅行中の思ひ出

宿家もないダイヤ部落の旅行には、往々露營することもある。故に寢具、蚊帳、着衣、雨具、天幕一式を携帶せねばならぬ。エンゲと呼ぶダイヤの特製の旅籠に入れて、ダイヤの若者の従者に、これを背負はせるのである。

カーキ色の背廣服に、毛メリヤスの襦衣袴下、脚部はゲートル地下足袋がよい。靴は却て不便である道路らしい道路はないのだから登山姿旅装がよい。

崎嶇羊腸たる峻坂峻路もある。深い溪間には吊橋がある。丸木橋がある。瞰下すれば十數仞、底知れぬ深い谿間に、細い丸木の吊橋など渡る時は、輕衛師流の冒險である。ダイヤ族の子供等は先天的に慣れて居るから平氣である。

山を越え、谿を渡り、峻坂難路、燉くが如き炎陽の下を、瀧つ瀬なす流汗拭ひもあえず、喘ぎ／＼進むほどに、喉は渴く、腹は空しくなる、蠻勇に誇る壯漢も、流石に氣息奄々たる折しもあれ、突如

として前途に幽けく聴こゆる犬の遠吠、鶏の鳴き聲、

「旦那もう部落が近づきましたよ」

従者のダイヤの若者も、流石に嬉しさうに叫ぶ。道路もない、休息所もないこの旅路に全く嬉しくなつかしきは鶏の聲、犬の叫びである。恰も渺茫果なき遠海原を、一葉の扁舟に棹し出た時、水天相接する遙かの彼方、一帯の陸影を望み得た時と、同様の嬉しさなつかしさである。況してや数日の間人煙相離れて、山また谿を經廻つた折からのこの聲この叫びこそは、眞に暗夜に火光を得たると同様な筆舌のよく盡すべきでない底のものである。

犬の遠吠え、鶏の鳴き聲を耳にしながら勇氣百倍して、千古の密林中を突破せんとする、首すぢにひやりとするものがある。これは樹の枝に止まつて居る山蛭が、人間の通るのを臭覺で感じて、降下して吸ひ付くのである。山蛭は大ボルネオ深山の嬉しからぬ名物である。深山を突破して、火田の跡に出ると、野道らしいものがある、其處には大蟻が居る、時として蝮が居る、蝎が居る。これらも山中旅行の憂きものである。或は大蛇の道に當つて横はることもあるが、これは左程恐ろしいほどのこともなかつた。猪群、鹿群の大集團に遭ひ、驚かされることもあるが、決して人には迫つて來ない。大ボルネオ名物の猿群には到る處で遭遇する。氣味悪るい程澤山居るが、危害を加へるといふ狒々猿には會見する機會がなかつた。天狗猿、手長猿、足長猿、尾長猿、ポケット猿など何十種の猿の群は、

彼等から見ると珍客なるべき著者一行を、キャツ／＼と奇聲を發しつゝ送迎して呉れる。何といふても人間味あるは猿猴の群集である。

グ／＼と河邊の大樹の根本に、大窟をかいて晝寢中の怪物が居る。よく見ると大鱉である。喫驚して立ちすくむと、同時に人間の聲音に、彼も驚いて身を躍らして、脚下の深淵に飛び入る、かゝる珍事には時折遭遇する。

いろ／＼の行路難を突破して、やつとなつかしい喰人程部落に辿り着くと、何はともあれ、渴を醫すべく、椰子の實を採らす。頭大の巨顆を採つて、穴を穿てば、中には神の與へられた、純粹無垢、清淨なる水が充ちて居る。而も氷の様に冷えて居る。其儘口を付けて痛飲する。その快味、その甘味！正に是れ一掬千金の價値がある。骨をもとるかすこの熱國に、神はこの好個の飲料果實を人間の爲めにお授けになつたのだ。人智で出來た冷凍菓子も、冷ソーダも、天與のこの椰子の果實の水には、足許にも及びもつかぬ。

椰子の葉蔭に熱國の炎暑を忘れ、椰子の實汁に旅路の渴を醫しつゝ居れば、芭蕉の若葉を音づれて涼しい／＼風が来る。

「旦那、食事召し上れ」

無邪氣なダイヤの娘が、心盡しの馳走カレーライスを運んで來る。釋迦ならねども、天上天下唯我

獨尊の感が起る。

椰子の蔭王者を夢む晝寝かな

五〇

氣骨ありしサンガウ王

大ボルネオ蘭領酋長中で、相當大酋長でもあり、又稜々たる氣骨を有し、且つ大親日家であらせられたサンガウ王には、著者は數次謁見の光榮を得たが、今も尙人民の統治權を有する王^{フヂヤ}酋長^{フヂヤ}は外人の土地租借に當つても、これに認諾を附與する權限を有して居らるゝので、蘭國理事官の承認を得る前に、酋長の認諾も必要とさるゝのである。

サンガウ王は著者を厚遇さるゝと共に克く其意志を洞見され、

「他日日本人の青年を多數引率して來た際は、サンガウ州内の土地なら、貴下の任意の處を許可する、又如何様な便宜も與へる」

と力強い同情を與へられ、著者が歸朝の爲めお別れに行くと、いたく袂別を惜まれ、種々の珍らしき品々を土産として澤山贈與され、特に著者及相互の従者と記念撮影までせられた程であつた。其後數年、再會をお約束した著者の計畫も、數次頓挫して、實顯するに到らぬ折から、老齡の王は遂に永眠されたのであつた。

王は馬來人中、稀に見る、堂々たる軀幹と豪放魁偉の容貌との持主で、將來又語るに足る大人物と敬慕措く能はざる處であつたが、今更返らぬ繰言ながら、追慕の念に驅らるゝまゝ茲に略述する次第である。

模範的青年英雄の偉業

|| サラワク王ジエームス・ブルークの事蹟 ||

大ボルネオに就いては、尙幾多の語り草は盡きないが、この短篇では、到底詳記し得ないから、それは他日稿を更むることとし、最後に英領ボルネオを略説する。

現在英領ボルネオは、大ボルネオの約三分ノ一で蘭領に比し山嶽多く土地一般に叢地が多い、北ボルネオ、ブルネー王國、サラワク王國の三區に分れて居る。總面積一萬二千八百五十一方里である。北ボルネオは、もと英國北ボルネオ會社の管理せし地であつたが、千八百八十八年來英國政府は、之を保護領として、知事を駐在せしめて統治しつゝある。

ブルネーは北ボルネオの西南にあり、面積僅かに一千三百餘方里、人口約三萬餘の一王國である。千九百〇六年の協約により、酋長は、英國政府の保護下に屬することとなり、其一般行政事務を英國駐在官に一任して居る。

サラワク王國は、ブルネー王國の西南にあり、現在英國政府保護領で、面積七千方里人口約六十餘萬を有する、ボルネオ北西岸一帯の地域である。

サラワク王は、現代は其二世で、前代の一世以來英國人であり、而も其一世王に就いては、我山田長政に似て而もより以上に成果を収めた點は、我青年をして、憤起せしむべき、英雄的史話がある。

第一世サラワク王ジェームス・ブルークが、ブルネー王からサラワクの統治權を得たのは、我天保十三年の頃、即ち西曆一千八百四十二年で、近代史の一節として、語るに足るべき事件である。

是れより先、ブルークが、未だ領國たる英本國に於て、一運轉士たるの時、彼の父は約三十萬圓の遺産を残して死んだのであつた。彼は此時三十幾歳の青年であつた、青春の客氣熱血萌ゆるが如きものありし彼は、父の遺産を利用して、一隻の商船を購入した。そしてこれに貿易品を満載して、遙かに領國を離れたる東洋に向ふたのであつた。

かくして彼がサラワクに寄航した時、折しも其頃ブルネー王と、サラワク王とは、互に雌雄を争ふて開戦中であつた。彼は半好奇心に驅られつゝ、一方ブルネー王の請を容れ、幾多の軍需品を供給し、大に其後援に努力した。果然、鬭争は、ブルネー王の勝利に歸したので、其後ブルークは、サラワクの統治權をブルネー王より讓渡を受けたのである。

爰に於て乎、彼は一小船長の地位から、一躍して王冠を戴く身分となり、爾來幾多の艱難を冒し、

土人を慰撫し、領土の安寧と秩序とを保有し、遂に一王國の建造者となり、得意然として祖國を訪れたのであつた。

英國皇帝は、彼の勞苦を多とし、遂に王號の榮譽を彼に與へ、彼の新領土を、永久に英國の保護領下に置くことゝなつた。

我山田長政の成功と彷彿たるものがあり、而も理解ある、其祖國の擁護は、山田長政に對する我徳川幕府の如き頑迷的冷遇的でなかつたため、遂に天長地久建國の大業を創始し得たのである。近世の幸運兒ブルークは、其後この王國に没し、今は第三世が王位を繼承して居る。

時には輕快な、一小軍艦に乗じて、新嘉坡あたりを巡航されつゝある、現サラワク王を見受けることもある。

數年前には、サラワク王は帝都を來訪され、帝國ホテルに御滞在遊ばされたこともある、親日家で在せらるゝといふことである。

サラワクの首府は、レジアン河の中流クーチンといふ處にあり、新嘉坡とは、直接航路の便があり、貿易はなかく盛である。

御断りと御願ひ

不肖は大正六年三月約一ヶ月に亘り、大阪毎日新聞にボルネオ紹介の記事を連載し、其年六月、厚底を給はりし大隈重信侯の序文、頭山滿先生の題字を請ひ得て、

富源 南洋西ボルネオ 四六版 三百餘頁 大倉廣文堂發行 一、八〇

を、又昭和四年八月には頭山滿先生の序文、松田拓相の題字を請ひ得て、

南洋 大ボルネオ 四六版 三百五十頁 南洋開發社發行 一、五〇

を著述し、以て大ボルネオの紹介に力めました。殊に前記大ボルネオの拙著は、畏こくも

天覽・台覽

に浴し得たるは、實に身に餘る光榮とする次第であります。現在兩著共絶版に歸

し、各位の御高覽に供するを得ざるを以て、取り敢へず此短篇を草し、卑見を陳述し、更に他日の詳述を期する所以であります。又大ボルネオと共に將來日本民族の進展すべき、ニューギニア、ニュージーランド、大濠洲等に就ても、今後更に探査詳述の熱望を持つものであります。何卒微衷を御洞察あり、可然御指導御鞭撻あらんことを願ひする次第であります。

多田 惠 一



開南叢書の由來

去る明治四十三年秋、白瀬中尉南極探検隊用船の艦裝成るに當り後援會長大隈侯は東郷元帥に其命名を懇請するや、元帥快諾これに『開南丸』の名を以てせりき。『開南丸』！嗟『開南丸』曷ぞ而かく適切なる、加之意味の深長にして且抱負の雄大なることぞ。

絶世の偉人と聖將とは、既に二十九年の先日吾人に開南國策の實現を期待されたるにあらずや。國事多端に際し往時を追懷して感激の情更に深し。

今茲開南叢書を上梓するは、畢竟吾人に興へられたる好課題に、萬一の微志を捧げむと欲するにあるのみ。

南極探検隊の一士 多田惠一

多田惠一著圖南書籍既刊目錄

題名	發行所
南極探検日記	前川文榮閣
南極探検私録	啓成社
南極みやげ	泰陽堂
南洋見物	敬文堂
南洋西ボルネオ	廣文堂
南洋渡航案内	全
南洋樂士大ボルネオ	南洋開發社
南洋開發案内	全
往々南洋樂士	全
南洋寶庫大ボルネオ	全

著者と其近什



觀青年運動會有感、

疾驅競走較雄雌、

分隊相應幾健兒、

借問他年南大陸、

堂々掲否日章旗。

目次

六〇

學國待望の快報來……………一
 南進國策の基地建設……………二
 宛然畫龍點睛の快舉……………三
 支那隨一の未開の寶庫「海南島」……………四
 我銃後國民の善處を要望す……………五
 畏こし高松宮殿下の海南島の攻略に御參加御作戰ニユース……………七
 海南島の中華民國文獻と我獻策……………一〇
 小磯新拓相に望む……………一一

—海南島の全貌—

概観……………一五
 地質……………一六
 土壤……………二〇
 地勢……………二一

温泉……………三〇
 港灣……………三三
 主要都市……………三三
 氣候……………三七
 風雨……………三八
 農産物……………三九
 蠶業……………四〇
 牧畜業……………四三
 林業……………四四
 森林副産物……………四六
 鑛産……………四七
 鹽業水産業……………四八
 工業……………四九
 貿易及金融……………五〇
 海南島開發は一億萬民族の聲也……………五一

六一

—大ボルネオと日本人—

熱帯を制する者は世界を制す……………五
 過去の「大ボルネオと日本人」……………七
 近代に於ける「大ボルネオと日本人」……………七
 模範的拓人元島作太郎翁……………六
 日本人の行商組合は軍事探偵だと和蘭官憲に誣告……………六
 現在「大ボルネオの邦人事業と將來の開發策」……………五
 我識者に大ボルネオ再検討を要望す……………六

—海南島寫眞及地圖—

往け矣「海南島」へ

多 田 惠 一 著

舉國待望の快報來

一億萬同胞が、鶴首待ちに待つたる、「海南島奇襲成功」の快報は、春眠を破る曉鐘の如く、突如として、我日本民族の耳朵を劈いた。而もこよなき舉國記念祭日たる。紀元節の佳き日の直前に於て……………

時恰も新東亞建設の重要國策審議の眞只中であつた、帝國議會に於て、此快報が發表さるゝや、滿場の議員は等しく驚喜して、我を忘れ急鞭の如き拍手を以てこれを迎へ、感激昂奮の渦巻議場に横溢たるものがあつた。

内に在つては都も鄙もおしなべて、ラヂオに新聞に喧傳されて、我國民は異口同音に快哉を絶叫した。

外に於ては、全世界に多大なる衝動を與へた。況んや老獐飽くなき、支那分割の夢に虎視眈々た

る英も、佛も、ソ聯も等しく愕然として座ろに戦慄を覚えしめた。
更に又怨敵蔣介石一派の狼狽、茫然自失の程は察するに餘りあるものがある。

南進國策の基地建設

聖戰茲に三年、忠君愛國の熱血溢るゝ我が將兵の、勇猛果敢なる進撃には、雖攻不落の堅壘も、雲霞の如き大軍も、嵐の前に木の葉の飛散する如く、北支に中支に將た南支に、所謂決河破竹の勢もて、絶大なる戦果を獲得した事は、有史以來の快記録たると共に中外の等しく驚嘆する處であるが、唯我南進國策遂行の爲めに、開戦以來隔靴搔痒の嘆を抱き、其日の遲きを怨み詫びつゝありし海南島進出戦が、如何に我々同志の絶大なる期待であつたかは、實に知る人ぞ知る底の隠忍自重そのものであつた。

宛然畫龍點睛の快舉

茲に於て乎、連戦連勝の皇軍は、錦上更に花を添ふの觀を呈し、一層光彩陸離たらしめたのである。畫龍點睛といふ言葉は、正しく現下の海南島攻略戦の場合である。而も有意義にして、理想的百パーセントの戦果である。

其華々しさに於ては、これを上海敵前上陸戦、徐州大會戦、南京攻略、武漢三鎮陥落の大快戦に及ばないかも知れぬが、奇襲一撃頑敵の意表に出で、執拗にも援蔣方策に日も亦足らざる、準敵國ともいふべき、英、佛、ソ聯の心膽を寒からしめた點に於ては、前に廣東の攻略と、今次海南島進撃こそは、我皇軍最後の決意を披瀝して、秋霜烈日快刀亂摩を斷つ概あり、對支聖戦中の白眉とも言ふべき快舉である。

平沼首相が組閣以來説く處の、國民の總和的意氣は、斯くの如き快報に於てよく實現せらるゝものである。

一億萬同胞は、「海南島迄進出したぞ」との一報に愈々緊張味を倍加した、頑敵蔣何ものぞ準敵國何ものぞ、四百餘州は愚か、全世界に皇運を扶翼すべき重大なる決意の程を、鞏固ならしめたる「此一戦」である。

支那隨一の未開の寶庫「海南島」

海南島が、南支の咽喉であつて、蔣政權殲滅戰略上の要衝たるは、今更喋々するまでもない事實であるが、我々南進論者をして、最も驚喜せしむるものは、本島が幾多の富源を擁し、支那隨一の未開の寶庫たる一快事實である。

支那は曩日「臺灣と海南島とは、支那海に突出した、一對の眼である。兩島とも支那に於ける戰略的生命線であるが、其片眼の臺灣は日清戦役に依つて日本に割讓し、今又残る片眼も危險に瀕して居る。我々は飽くまで海南島を死守しなければならぬ」と絶叫して、英、佛、の援護を空頼に、まさか日本軍が此處迄は來まいと、毎日根性圖々しく、本島出身者宋子文が首唱者となり、三千萬元の開發資金を、全國經濟開發委員會から支出せしめ、急速に其資源開發に着手した計りで今回の事變となり一時中止の状態に陥つたが、其最後の重要會議を本年一月二十日前後に行ふたといふことである。彼等が皇軍進撃の直前迄海南島に纏綿たる未練を有し、其死守の善後策に汲々たりしものありしを、眼前にしつゝ奇襲に成功した事は、運命の皮肉ともいふべき現象である。

我銃後國民の善處を要望す

昨秋西沙島に軍事行動を起して、海南島一帯を我物顔に振舞ひ一種の恫喝を試みし佛や如何、又香港埠頭山なす援蔣軍需品を陸揚げせし英や如何、よもや此處までは手を延ばすまいと見くびり、蔣一派同様、枕を高くして安眠最中の彼等が床を蹴つて、周章狼狽せし醜態こそ所謂寢耳に水の驚きとやいふべく、笑止千萬痛快至極である。

然しながら、瘴烟蠻雨といふ頑敵以上の苦惱と炎熱とを冒しつゝ、此快學を決行した、皇軍將兵

の奮闘力戦を想ふの時、一度手中のものたらしめた海南島に對し、多大なる關心を拂ひ、本島在住民と相協同し、其資源開發に努力し、又彼島民を指導して、幾多の施設を完成し、所謂共存共榮的利用厚生之道を開くところ、我々南進主義者として、着手せねばならぬ重要問題である。

今や池中の大魚は既に俎上に横へられたのである。此を料理するは、銃後國民の仕事である。佛や、英や、將た米や泣訴哀願今更何事ぞ、有田外相は我には領土的野心なしと、恒例の外交辭令を以て應答した。夫れ或は然らん、併し、資源開發は領土的野心とは自ら別問題である。我等は世界人類の爲めに、有史以來何千年間無爲に放棄された此未開の寶庫を、萬難を排して探究調査して急速に善處することこそ、何を措いても決行せねばならぬ、我銃後國民の双肩にかゝる焦眉の急務である。

畏こし高松宮殿下の海南島の 攻略に御參加御作戰ニユース

——颯起せよ全國の我青年——

高松宮殿下には大本營海軍參謀として、本月初旬海南島作戰に御參加遊ばされ、引續き作戰諸要務の爲め、中支方面に御行動中のところ本日午後五時御機嫌麗しく、御歸京遊ばされたり。「大本

營海軍報道部二月二十八日午後五時十分公表

申すも畏こき極みながら、金枝玉葉の尊き御身を以て、大本營幕僚として、帷幄に御參畫御參戰遊ばされた、高松宮殿下には、波浪高き南支海上、旗艦○○に御乘艦遊ばされ、折しもモンズン吹き荒ぶ海南海峽にて、軍艦の動搖甚だしく、舷側波をかぶる難航中にも、徹宵艦橋に在し軍務に御精勵遊ばされ、又奇襲效を奏して、無血敵前上陸が敢行された、二月十日午前八時、秀英砲臺猛烈砲撃の際は、同じく艦橋に在し、敵砲臺から不敵にも一彈二彈と反撃し來る危険の中を、莞爾として御觀戰遊ばされた。

又十二日には、南支派遣最高指揮官近藤中將、伊藤○○艦長等、各幕僚を従へさせられ、攻略成つた瓊山、海口を御視察遊ばされ、椰子の樹茂る南國風景を、御興深げに眺めさせられつゝ、秀英砲臺に成らせられ、前日反撃して來た四門の敵砲臺を具に御視察遊ばされた。

次で十五日には飛行艇に御搭乗三亞港、三亞衛皇軍占領地點を御視察、何吳と御不自由勝な艦内生活にも、終始御明朗に軍務に御精勵遊ばし、御自ら範を全國青春の徒に垂れ給ふた御事は、誠に恐懼の極みである。語を寄す、青年諸君よ近くは、殿下の御奮戰振りを眼前に拜觀し、又遠くは神武天皇の、新日本建設の御偉業に就中丸木舟に乗御あらせられ、遙々九州の御宮居より大和に向はせられしその上の御壯圖を拜察し奉るの時、遂巡袖手傍觀すべき時局下ではないのであるぞ、血あ

り涙ある眞の同志は來れ、而して、最有意義なる、海南島開發の快舉に参加せよ!!、南進國策の基地として我日本男子の確保すべき要衝海南島に、其島民と共に王道樂土を建設する事は、所謂新東亞青年の一大任務である。

海南島の中華民國文献と我献策

海南島は、今や世界の視聽を集めてゐる。殊に英佛兩國では、東亞に於ける自國勢力興亡の分岐點とし、日本の海南島に對する行動を懸念し、昨年七月共同して、我方に、海南島非占領の申し入れをした程であつた。

海南島が、近く邦人の話題に共せられたのは、例の北海事件である。即ち北海で藥屋を開業してゐた邦人中野氏が、支那人に虐殺された爲め、北海の對岸海南島が我邦人に存在を認められるやうになつたが、著者は先輩故梅屋望南翁から、往年南支、南洋方面に巡遊する際は、何時も海南島の重要性を力説して、其視察を勸告されたものだが、今日迄其機會を得なかつたのである。此程喧傳された海南島唯一の在住邦人勝間田翁の如きも、從來は邦人よりも寧ろ英人間に、奇鳥採集家として知悉されたといふ位で我邦人の認識極めて淺薄で、纏まつた海南島に關する文献としては、昭和十四年に南洋協會台灣支部から刊行された、海南島誌(菊版六五〇頁明細地圖挿入)位なもので、

これとて原著は中華民國十九年（今より九年前）に陳銘樞が總纂として、民國政府の命に依り編著したるものを、翻譯されたものだ。其序文中に

（前略）去年余は廣東南善後委員に任じ、既に稍其の匪患を平治し、即ち意を治安、交通二事に措き、居者をして安堵の便あらしめ、行く者をして澁難の苦なからしむ。裏足趨超の者をして、纏負至らんとするの心あらしむるを期し、即ち黎民の向化商旅の奔集坐ながらにして致すべし焉。又來者の相るなきを慮り、乃ち政務處に督し、海南島志一書を爲り、其の郡縣、山川、區域、道里、人物、風俗を志し、以て最近宅土安民の施設に及び、覽者をして目其の詳に遊び、而して後之に向つて其の一日の慮を煩はすに足らざるに曉然たらしめ、亦以て國賦を益し、資實に備ふべく、此に於てか、苟も舊貫に安んずるを得ざらしむるものあるあり。庶幾くば、將さに來らんとする者をして其の章を追琢し斯志に順つて、而してこれを成さんことを」

と陳銘樞自ら記して居る。又其凡例の最終項中

「民國以來頻年戰亂あり、政に常主なく、官守は傳舍に同じく、海南一隅前後軍民政を執る者は無慮二十餘人、循暴迭に見る。是れ生民之樂の關する所たるが故に、政局變遷の大略を述ぶ。又海南は久しく匪患に苦しみ、閩里寧んぜざるもの十餘年、保甲を編辨し、戶籍を清查して以來、奸宄斂息し地方人民認めて異數と爲す。此の宅土安民の術は、宜しく其の制を存すべし。又海口築港問

題は、議論沸騰すること最近六十年に亘る。環海二千餘里（註支那里にして我六丁が一支里なり以下之に同じ）の巨島にして、未だに嘗て一港を築かず、安全吞吐の所と爲すは、實に海南榮枯の繫る所とし、後の執政は宜しく其の先務の急なるを知るべし。西沙群島は、吾が國最南の領土、南航船の經る所にして、榆林を去る百四十五里とし殆ど治權の及ぶ所に非ず、其の地燐酸礦を産する處と甚だ豊にして、屢々外人の盜取する所となり、坐ながら利源を喪ひ、而して國人の其の狀を知る處の稀なり、只之を知らざるが故に、之を愛せず、門戸の側に乃ち此龐然たる棄物あり、此れ誠に室に居る者の羞なり。云々」

と記述して居る、圈點は著書が施したのであるが、讀み來り誦し去り、嘗に他山の石として、觀るべきのみならず、其の圈點を附したる邊は、これを移して我官僚諸公の机右の銘として、進呈せんと欲する至言そのものである。著者が憧憬する濠洲、新西蘭、ニューギニア、ボルネオ等の如く現在持てる國が、この海南島同様、門戸の側に龐然たる棄物同様に三十年以前も今も同様、人口も増加せず、開發もせず、只白人專有の獨擅場と豪語橫行することは、寧ろ其排日、毎日の點蔣一派政府の其れよりも久しく、より以上に酷烈なるに想到し、新東亞建設は南進の一途あるのみ、著者多年の主張を寛容し、敢てこれを砲火の威力に訴ゆるのみで解決せんと欲せず、強硬外交ヒツトラ外交乃至ムツソリーニ外交の如き即ち國際正義・人類進展正義を標榜の外交で、正々堂々

持てる國々を首肯せしめ、現下百萬二百萬の人口は容易に移殖出来る、海南島への進出は勿論、一面前記の大陸的巨島へ、大手を振つて、東亞民族の進出を容易ならしむる様に作謀することこそ第一目標とすべき、新東亞建設の重要事項である。

「八紘一宇」の實現は、單に朝夕のラジオで、宣傳するのみでは駄目である。敢て憂國慨世の志士に訴へ、日清支三國總和の大綱に南進國策を加味しての大經綸發足を獻策する所以である。否？重ねて言ふ、將來我邦が盟主として新東亞建設の使命を果すには、締出しを宣言されて居る前述の空地に、東亞の黄色人種が容易に拓士として進出出来る様にする事で、此難問題さへ解決すれば、隣邦四億の支那人は異口同音に我に迎合し共鳴し、所謂日支親善は朝食前に解決さるゝ事は、嘗に著者の架空論ではないことを強辯するものである。

何となれば、由來支那人は利に敏く、現在六百萬華僑が、南洋各地に進出し、而もあらゆる屈辱と、搾取とに忍従しながらも、勤儉勉勵よく巨萬の富を成すもの續出し、蔣政府の如きも、其軍資の大半は在南洋華僑が負擔しつゝあるに徴しても知るべきで、これを要するに、物資豊富なりと稱せらる支那本土よりも、南洋各地がより以上に發展性あるを如實に物語るものである。

餘談ではあるが、華僑の海外進展は實に驚嘆に價すべきもので、著者が南極探検に参加し、三十年前ニュージールランドの首都ウェリントンに寄港した際の如き、同港には只一人の邦人も居ない

のに在住支那人は約一千人と言はれ、既に總領事が居つて我隊を歓迎に来て呉れ、我隊の糧食炭水の補充に當り、何呉れと斡旋の勞を取つて呉れた程であつた。

白人濠洲に於ても、黄色人種入國禁止以前移住した、支那人の數は夥しく、安住の樂土でない故郷に未練なき支那人は、海外進出は世界一ともいふべき素質があるが、何億の收容力ある樂土、濠洲、ニュージールランド、ニューギニア、ボルネオの如き新天地が、閉鎖の暗影地域から、開放の明朗舞台に好轉したならば、それが日本の力で實現した時、何で支那人が抗日排日をやるものか、此の趨勢を、朝野の有力者はよく熟考され、不條理なる國際間に張られた、眼に見えぬ無數の鐵條網やトーチカを突破すべく努力邁進せねばならぬ。

小磯新拓相に望む

先頃就任された小磯新拓相は、其劈頭第一聲として

『國運發展の第一歩は拓務よりといふことがいはれるが、自分は然らず、日本精神の昂揚にありと思つて居る。日本精神を眞に把握認識するためには、平沼首相のいはるゝ國民の總親和、總努力に俟たねばならぬ、拓務行政に關して、自分の經驗と知識からいふならば、わが國是は、天業恢弘であり皇道の宣布でなければならぬ、日本精神の世界宣布、これこそ拓務行政の基礎である』

わが國が滿洲事變以前滿洲に對して、二十億内外の金を投じて居りながら、其成績の見るべきものがなく、天業恢弘が實現せられなかつたのは、人的要素の移殖が足りなかつたのも原因であつた。

自分はいかに點に鑑み、妥當適正にして勇敢なる移民政策の實行にまづ努力したい、其他の具體策については、諸責任者の意見を聞いた上で然るべく所信を固めて實行に移したいが、拓務行政の重點は、今後海外拓殖に置くべきと思ふ。朝鮮、臺灣の外地統治に就いては各總督とも努力して、中央の方針を徹底せしめたいと思ふ。南總督、小林總督はいづれも自分の先輩であるが、外地と中央との關係については、協調すべきは協調し、中央の方針に基き、統理すべきは統理し、拓務省と外地との緊密な連繫につとめたい、滿洲移民も海外殖産も、其具體的なことは、今後關係者の意見を聞いた上で機構全體を弾力性ある機能として、合理的に活用したい』と聲明されて、其抱負の一端を披瀝されて居るが、我々としては、今少し積極的に其經綸を實行されたいと思ふ。

拓相は諸責任者の意見を聞いた上で、云々と聲明し居らるゝが、凡そ、海外發展の問題は簡單に机上の空論のみでは、不可能である。從來の諸責任者が、完全に其職責を盡されたならば、明治維新以來、屢々乎として歐米の文化を凌駕するに至りし、我國情中、最も遅々として頗る不振の状態に

ある海外發展の政策が、今日の如きに沈淪する道理がない。少くとも官僚式萬能では、海外發展の如き國策の實行は不可能である。他の問題はいさ知らず、海外發展の一事に於ては、民間の實行者先驅者の全知全能を集注して、今後の大方針を決定されなくてはならぬ。新東亞建設の大事業の如きは、これを對國內政機構の改革よりも、對外方針是正の急務なるを絶叫するものである。

拓相の言はるゝ、滿洲開發問題の如きも、人的要素の移殖が足りなかつたのも原因であつたかも知れぬが、畢竟するに、天惠の要素が滿洲には比較的少ないことが、日露戰役以來、三十有餘年間の長日月を以てしても、机上論者流の思ふ様に行かぬ最大原因である。

凡そ人類の發展と、生物の繁殖には、第一條件としては天惠である。太陽の光と熱との普き天地には、四時絶ゆることなく、草木繁茂し、生物躍動し、人間生活の要素たる衣食住に些の不便を感じせしめぬ。

これを我内地に於て觀るも、結核患者が世界の何れの國よりも多く、而も年々歳々増率を示しつつある如きも、要するに、光と熱との天惠に缺ぐからである。衣、食、住の原則に大缺陷があるのが、最大原因である。これを内地よりも天惠の劣れる滿洲に生め殖やせよの移民樂土の建設を夢むことは、より以上の境地あることを知らぬ井蛙者流の机上方針であることを熟慮されたいものである。但し滿洲は我第一生命線であるから、國防的義勇移民の進出は、何處までも遂行せねばなら

ねことは、勿論であるが、これには我國家は相當の金を吝しまず、多々益々辯ずる巨額の投資の用意を怠つてはならぬ。即ち人的要素よりも、資金的要素が滿洲繁榮策の根本義である。此點吾人は拓相の所見には疑義がある。

此意味に於て、今後の拓務方針としては、海南島の如き天與の豊土、而も未開の寶庫を、拓相の言はるゝ如く最も勇敢に開發し、南進國策遂行の好試練場たらしめねばならぬ。而して現時局下戦線に於ても、銃後に於ても最も困苦缺乏に忍従しつゝある、熱帯資材の確保に邁進せねばならぬ。

敢て小磯拓相に此一章を呈し、聊か著者が憂國慨世の素懷の一端を開陳する次第である。妄言多謝々々……

以下予は「海南島誌」を抄録して、如何に本島が天恵に於て優越せるかを紹介し、更に他日實地踏査後の詳説を期する次第である。

海南島の全貌

概観

海南島は、廣東省に屬する支那第一の巨島で、通稱して海南島と謂ひ、別に瓊州と稱し、行政區域名では瓊崖と呼稱する。

「位置」東經百十一度二分三十秒より百八度三十六分に至り、北緯十八度九分より二十度二分に至り、西は佛領印度支那を望み、南はパラセル島（西沙島）我新南群島を連ねて、遙かに著者が多年憧憬する大ボルネオを控へ、東方我臺灣並に比律賓群島に相對し、北方海南海峽を隔て二十海里の雷州半島と對峙し、國防上に資源に南支隨一の重要地點たり、英國は香港新嘉坡の連鎖とし、佛は印度支那の障壁と見做し、虎視耽々垂涎萬丈の要衝で、何時迄も放置したなら、彼等豺狼の好餌たるは勿論の要衝であり、今回の我快舉に際し英佛が内心如何に憂鬱たるものあるかは、是又知る人ぞ知る一大事實其ものである。

「面積」本島の面積は、精確なる測定ではないが、支那陸軍當局の（最近民國十六年）の測定に依れば、東西約六十二里、南北五十五里、全面積約二千七百平方里で、臺灣より三百八十平方里大

きい。(此項及以下記する里は日本里程なり)

黎區と漢區と相半ばし、現に其行政區域は左の一市十三縣に分れてある。

海口市、及澄邁、陵水、臨高、瓊山、文昌、瓊東、萬寧、定安、樂會、崖縣、儋縣、昌江、感恩の各縣

「耕地」住民の約八割は農民であるから、耕地も相當開拓され地租を上納しつゝあるは全島面積の約百分の十五六と推測さるゝが、荒蕪地の開拓に適するものは、全島の約百分の二十位はありと言はれて居るから、其開拓の餘地多大なるものあることを知るべきである。

「林地」地帯は全島の約百分の五十を占むると稱され、海濱一帶の平原地方を除き、深山方面は殆ど未だ嘗て斧鉞の入らざる神秘地域である。

地質

火成岩

本島の火成岩は二大種類に分れ、一は噴出岩類で、玄武岩、橄欖玄武岩、安山岩、層灰岩、文像班岩等である。二は侵入岩類で花崗岩閃長煌斑岩石英斑岩である。

(イ) 噴出岩

- (一) 玄武岩 發見場所は三あり、海口附近、文昌蓬萊市近瓊山甲子附近及牛屎山一帶地方である
- (二) 橄欖玄武岩、瓊山雷虎嶺及其附近に分布す、上部、中部、下部各特色を呈する。
- (三) 安山岩、臨高の高山嶺に發見せられ、色黒く微紅を呈し、鐵を含むこと頗る多く、尙大塊の鐵鑛が山嶺山坡に散布して居る。
- (四) 層灰岩、雷虎嶺山麓水塘の壁に露頭があり、層面は清晰で頗る水成岩に類してゐる。
- (五) 文像班岩、島坡水公路の傍に暴露し間々石英の微粒にある。

(ロ) 侵入岩

- (一) 花崗岩、瓊山甲子市附近に頗る多く發見され、最古の岩層で、質は甚だ堅く、其地質時代は泥盆紀に屬し、牛屎山附近は花崗岩と噴出岩とがあり、石英岩、油頁岩等相互接觸地帯で、花崗岩には雲母が頗る多い。

石英脈は花崗岩中に穿走し、方向不定にして厚さは一吋乃至二吋ある。安定南閩嶺は花崗岩、黒雲母を普通とし、各鑛物の晶體及び顆粒は均しく前二者よりも輕少である。石英の岩脈は少しく現はれ、其他は石墨で山坡に發見され、零星散亂脈狀を成さない。土人が山産銀といふのは之である。紗帽嶺花崗岩中石英脈の石英は、結晶が完全で且つ金鑛を含み、其他花崗岩のない西岸嶺には、花

崗岩の雲母は稍少なく、長石が多い、長石の色は肉紅及灰白である點が稍異り、崖縣の三亞港附近に亘り之を發見する。

瓊山子市、定安金鷄嶺、臨高、和舍市方面は、噴出岩と花崗岩と接觸する關係上頗る清晰である。花崗岩は、多く山頂山谷に露頭がある。噴出岩が其山麓を圍繞してゐるのは即ち花崗岩が久しく侵蝕されて地面に暴露し、火山が併發し、岩は流れて四方に溢れ、其上に遮鋪した爲めで、花崗岩は噴出岩よりも老いしことが知るべきである。

(二) 閃長煌斑岩、定安島坡市の北に此岩の發見があり、多くは大塊をなし、地面に暴露し其岩脈の在る所は土壤に埋没せられ、之を尋ね得がたく、只附近の地域は均しく花崗岩である。

(三) 石英斑岩、定安南閩市の東南八里及崖縣の三亞港、岩山の甲子市附近に露頭がある。

(四) 砂岩、頁岩、含炭地層は砂岩及頁岩を以て主とし、砂岩は灰色及黄色を呈し、頁岩は灰色及黑色多く積層甚だ薄い、其地質時代は、石灰紀或は二疊紀に屬し、瓊山甲子の如きは其一斑が窺はれる。

(五) 石灰岩、石灰と爲すに適し、黎境及西南各地に散見し、其地質年代は二疊紀に屬する。

之を要するに、上述各地層生成後、花崗岩の外起があり、本島の高山峻嶺は、多くは花崗岩の造成に係り、河川流域は花崗岩の崩壊に因つて起つてゐる。北部の平原は亦花崗岩の長期に亘る侵蝕

の結果と見られる。此侵蝕時期中次山の爆發あり、流岩が花崗岩の上に流れたものがあり、面積は極めて廣く、海口市西方の雷虎嶺馬鞍山等は均しく火山口の岩石であり、浮石凝灰岩粗面岩の如き均しく之を存し、而も火山と花崗岩の侵入は時を経ること久しく、第二期の末期である。而して火山の爆發は第二疊紀以後に在る。火山噴發を停止した後は、地面尙ほ繼續侵蝕された爲め、今日河川の傍は積んで砂礫を成し、其火山岩溶解の結果は、鐵質を含むこと甚だ豊富であり、又紅土を成してゐる。

(ハ) 水 成 岩

(一) 牛屎山石英岩、牛屎山西南の小盆地に半露頭してゐる、層次及傾角は未詳で色は褐黄を呈し質は甚だ堅く塊狀を爲し、下は花崗岩の變質を爲して接觸してゐる。

(二) 橋嶺雲母片岩、儋縣橋嶺山麓の西、小溪河床及兩岸に發見され、下は花崗石の變質と接觸し上は灰密石灰岩と整合接觸し、層は正西に傾き或は稍北に偏し、傾角八十度層厚十餘呎侵蝕甚しく質は酥鬆色は灰黄である。郡大市の西北約二里の西坊にも亦此岩層がある。

(三) 灰密石灰岩、儋縣那大市の西北十二里の灰密村下の河床及兩岸は概ね石灰岩露頭あり、正西傾角五十五度乃至八十度である、層厚百數十呎で、侵入の影響上重ねて結晶を爲し、色は深灰、質は極めて脆く、石層は清晰で、厚さは約七呎ある。方解石の岩脈は縦横に交錯し、其中に亂穿し、

臨高南豊市の傍も亦此岩がある。

(四) 牛屎山油頁岩、牛屎山西麓の傍に油頁岩層の暴露があり、正北十二度に向つて傾き、厚さ六呎、東西長さ七、八十呎、南端は均しく花崗岩と相接觸し、油頁岩上に紅色の頁岩一層あり、厚さ一呎乃至三呎で、油頁岩の下に粘土層があり色は灰で厚度は未詳である。

(五) 白石嶺礫岩瓊椰子寨の南方一里弱の白石嶺に發見さる。該山は高さ約二百四十呎で岩内の石子は肉紅及灰白の長石、乳白の石英粉紅の花崗岩塊、紫花崗質の砂岩、黒雲母及暗紅鐵礦等とし粒多く稜角なく、大小不同で大は豌豆の如きより、徑一呎以上に達するものもある。是れ蓋し附近の花崗岩は侵蝕破碎された後、復た膠結したもので、其生成時代は花崗岩侵入後と想定さる。

本島濱海の地は、海水侵蝕して沙灘石灘を成し、中に石蟹(三亞最も多し)は近代の化石である又崖縣沿岸には珊瑚礁があり、亦近世紀地質中の重要産品である。

土 壤

本島の土壤は沖積層甚だ少なく、土壤の色相は能く原生岩を代表するものが三種ある。

一は凡そ灰白色に屬し、石英粒を交へるもので花崗石なることを知る。二は色は紅で質は細く、石英粒のないものに屬し、噴出岩なることを知る。三は色は紅で、大小不同の石英粒を兼有し、即

ち噴出岩と、花崗岩と接觸する區たることを知る。

然れども、此特性を表す原因は、即噴出岩は輝石、橄欖石、雲母、角閃石、磁鐵礦等を含むことが最も多い。侵蝕分解を経た後に、鐵分は多く變じて養化鐵と爲つたので、現に紅色である。花崗石は長石石英を主とし長石は變じて灰白色の粘土と爲り、石英は變じて細粒と爲つてゐる。故に土色は灰白で石英の小粒を交參してゐる。噴岩と花崗岩と接觸の區域は紅色の土壤は石英粒を交へ、乃ち二岩の特性を交錯して居る。海洋の沖積土は色は淺黄で、砂粒頗る細く、頗る均一で、勢ひ前三者と相混じ、其發育地域は沿海一帯に亘つてゐる。此の外河流沖積の如きは、甚だしく發育せず竟河の西岸間にも之を存するを見受ける。

地 勢

山 嶺

本島の地勢は、中部は高く、海濱は低く、恰も釜を伏せた如く、本島第一の高峰五指山は聳然中央に其王座を占め、樂會、萬寧、陵水、崖縣、感恩、昌江六屬の山は、峯巒連續其分脈となり、瓊山、定安、澄邁、臨高、儋縣五屬、南部の諸嶺は其の餘脈である。是等山系を分水嶺として、南渡

江は北に流れ、寧源水は南に注ぎ、加積溪は東部に通じ、昌化江は蜿々西濱に、陵水は東南海に、北門新昌は洋浦に入り、文瀾は乃ち臨高の獨水、大陽は萬寧の孤河である。是等諸江は一幅の射状を成し、主峰五指山は、實に本島水系の發源である。

本島北部は火山發育の區で、岩流噴出の關係上、地勢は稍平坦となり、間々低丘あり、孤嶺概ね高さ百呎内外長さ二、三百呎乃至五、六千呎に過ぎない。是れ即ち火山の遺蹟で、遠く侵入岩山系の雄拔に遜る。これを各河流より觀察するに、多くは溺河を成し、其特徴たる海岸線下降の如き、海南島の成りしは、或は斯に存するかと思はれる。

主峰五指山は、一大侵入體花崗岩の構成で、中部に大起し海拔五千八百七十呎、山勢其名の如く五支脈を成し、其支脈の伸びて、西北に入るものは安定に於ては南半嶺、南閩嶺等となり、瓊山に在つては巖高嶺海公嶺等となり、澄邁に在つては銀嶺、双柑嶺となり、臨高に在つては、白石嶺、南豐嶺等となり、儋縣に在つては、紗帽嶺、洛基嶺等となつてゐる。

以上諸山は、皆侵入花崗岩の構成したもので、東は樂會に起り、西は儋縣に延び各溪谷を構成し一大侵入岩體の山系を爲すものである。

本島の北部海濱地は、東は文昌の清瀾諸港より起り、西は儋縣の新英諸港に至り止まる。南北は南五、六里より十里に至り、東西走向の一火山帯を爲してゐる。山は高くなく、侵蝕尤も易き故平

原が多く岩石の侵蝕程度から論ずると、該地火山爆發することも兩次あり、熄滅久しき火山に至つては、岩石は既に大半は變じて紅色の土壤となり、且其の火山の遺跡は模糊として清からず、熄滅未だ久しからぬ火山は岩石が新鮮で遺痕が著しく存在する。

該火山發育の區は、瓊山城から潭口溪仔口に至り次で文昌の蓬萊の黃竹に至り、雷公井から文昌城に至り、秀英から豐盈、澄邁、臨高、儋縣に至り、以上の低岡倭丘は、高く海面五十呎乃至百呎に出で、輾轉起伏、直徑百呎乃至一里に達するものあり、間々扁圓形をなすものがあり、缺口の一方は一長溝を成し、種々の形状、地面の凸凹甚だしい。是れ即ち火山及火山裂縫の殘形である。又火山區の形状には傘の如きものがある。中山は一平頂の小山で、山麓は四周に向つて緩傾斜をなし五度乃至十度に至り等しからず、定安城東の舊州嶺の如きは面積六百里に達し、又臨高の多文嶺、文昌の青山嶺邁豆嶺も亦其の例である。

高山嶺は、高さ約百數十呎で、山に三峰があり、北峰は高峻、南峰は平突で、中峰には一湖がある。徑約三十呎水深二呎ある。是れ即火山口が蓄水湖を成すものである。

又瓊山永興市の西南八里、雷虎嶺も亦一噴岩丘で、高さ百二、三十呎、口徑約百數十呎口の深さ約七十餘呎ある。内壁は陡峻、火山滓の構成する所たり、四周に向つて流溢の層次は顯はれ見易く微々しく北に缺口し、山麓傾斜約三四十度、山麓の火山灰は既に壓して層理あり、火山彈の附近に

散布する二、三十里のものは、侵蝕尙ほ淺く、石多く土少なく、永興市の東北八里は、新火山岩下に紅色の土層あり、極めて厚い、是れ即、火山の風化物で、雷虎山嶺西北の馬鞍山に在つては、其の噴岩の構造雷虎嶺と相同じく、只數里の内噴口數起し、稍異なる所あるのみである。

本島の山脈は句漏山より南に亘り、七星嶺を経て雷州半島を貫き、海を渡つて來り、主峰は五指山と爲り、中央に隆起し、其の支脈は各縣に綿布する。

河 流

江河は、孰れも其源を五指山に發し、皆海に注いでゐる。就中南渡江を第一とし、次は萬泉河、龍滾河、大湯河、陵水溪、北河江、新昌江、金仙河、文瀾水、寧遠河、昌江河、文昌江、平昌江、望樓河、安仁江、殊江、三亞水、簸橋水、感江等が東、西、南、北に其流域の沃土を縫ふて流れて水運に灌溉に便益を與へて居る。

南渡江 本島第一の大河で、源を五指山に發し、黎母山を経て臨高の南部に入り、約十三里で瓊山より填口に至り、紆餘曲折を経て新埠渡に至り、分れて二流となり、一は北流して牛姑港に至り海に入る。

南渡江は其の統名で、地に因つて其稱を異にし、臨高境では約十三里の間を大江と言ひ、澄邁境

では約二十三里間を新安江と呼び、定安境に屬する約六里間を建江と稱し、只船崖から瓊山境を経て、海に注ぐ十六里の間を南渡江と名づくるのである。全長五十七八里の大河で、舟楫の便灌溉の利頗る多く、下流は積積二百擔の帆船を航行し得らる。

安仁溪 文昌縣の北に在り二源を有し、一は馬家坡から西北に向ひ、一は胡山から北に向つて流れ、中途合流して、鋪前港から海に注ぐ、全長約十里、上流は水淺くして沙多く、下流は水深くして泥多く、積載三、四十擔小舟の便がある。

文昌江 俗に霞洞溪とも稱す、發源地は三つあり一は西區の蓬萊から、一は太平橋から一は後坡壩から各文昌城に入りて會合し、文昌江と呼ばれ、東南に向ひ清瀾港から海に注ぐ。上記三流は各長さ約十里位であるが沙底で淺水だから舟楫の便なく、下流文昌城から清瀾港に至る約七里の間は、河幅十餘間に至り、滿洲時には十餘萬斤の積載帆船の通航容易であるから、此江に浚渫工事を施したなら、將來清瀾港の繁榮を助けるであらうと言はれて居る。

平昌江 源を文昌蛟塘圍の境内に發し、大路、抱芳、文教各市を経て三里弱で龍渡江と合流し、清瀾港から海に入る、全長約十五六里で文教清瀾間の三里餘通航の便あり滿潮時及霪雨の際は、岸に溢るゝ計りであるが、早天及干潮の際は、水深膝に及ばぬ位である。

萬泉河 此河は二源あり、一は五指山の東に發し、喃嘯峒より思河嶺に出で、樂會の峻口に至り

嶺を出で、雷公灘を過ぎ、峻口に會し、水は東南に向つて行き、船埠市を經、石壁市に至る。此邊を石壁江と呼ぶ。石壁から樂會龍江の椰子寨を經、文曲を過ぎ、馬口溪に會し、嘉積で、瓊東の發嶺龍角沐皇の諸溪水を納れ、嘉積溪と名づけ、嘉積から東南に曲折し、樂會縣の西に至つて、南北二支に分れる。一は縣北を繞り萬泉河と呼び、一は縣南を繞り、流馬河と名づけ、亦南門河とも言ふ而して縣の東北なる雷撲山下に至り、復た合流して、且龍滾河を合併し、直に博鰲港に出で海に注ぐ、此河は樂、瓊、定三縣を繞り、全長約七十里あり、其經過地域は概して花崗岩から成り、博鰲から船埠に至る約三十餘里間は舟楫の便がある。

龍滾河 源を黎區の烏雅嶺に發し、六連嶺に出でて、東向し、萬寧縣北の籐寨、端熙、龍滾等の市を經、金牛嶺下に至り、樂會の嘉濂小河を合し、尙ほ東行して、南港村に至り、萬泉河と會合し直に博鰲港に入る、中流は、萬屬第四區の境内に蜿蜒し、上流は萬屬二縣天然の界線と爲り、全長約十里強、下流五六里間舟行すべく、萬寧嘉積間の交通要津である。

太陽河 一名踢容河とも言ひ、源を萬寧縣西の黎區西峒南萬嶺に發し、東南に向つて流れ、轉じて東北に折れ、興隆市を經て、番鳳、普禮、水口、石塘等の諸村落を過ぎ、石龜の河流を合し、縣城の西南二里の邊から分れて二支となり、一は銅鼓嶺下から城南餘里を經て大溪水と曰ひ、一名南渡溪とも呼び、又三曲水の稱がある。東流は金仙河を合し、周村港から小舟楫の便がある。

金仙河 源を萬寧の黎山に發し、萬寧縣城の西北二里の城塘溪に至り、分支して四流となり、一は城北半里を經て金仙河と言ひ、城を繞り東山より行き一は城北二里を經て、石狗溪と稱し、溪傍に石形狗の如きものがある。又高邱があり、登攀すれば山海の眺望が恣に出来る。一は城北三里餘を經て白石溪と曰ひ、一は城北五里を經て蓮塘と呼ぶ、又小渡港の名がある。均しく東流し、周港に入り港北港から海に入る。共に長さ十數里で、下流は小舟を通ずるに足り、大雨には泛濫し、旱天期には絶水することもある。

陵水溪 源を五指山に發し、東南に向ひ、石峒棧合口を經て、沿途諸支流を會し、陵水縣治を過ぎ、水口港に至り、全長三十里石棧水口港間約二十里小船の便があるが、河床は沙質で、冬期は遊沙移動し、深淺定らない、又雨期には深さ丈餘に達し旱時は膝以下である。

藤橋水 東西二水に分れ、東水は陵水某代弓石岩嶺から西流して崖縣境に入り、大本昂貢二弓の山峽から流れ、西方某屏弓を經て翻砂嶺蓬嶺の小水と會し、南は藥峒に至り、大肚、供内、牟密、陽丈、贊坡等の村落を經て白虎嶺に至り、藤橋市の東南を繞り西水と合ひ、西水は源を崖縣の東北に發し、流れて參嶺に至り、分れて東北二流と爲り、東流は又分れに二と爲り一は只讓弓を出で、南は打密潭を經、一は嶺西羅葵峒大嶺から北流し、南林峒に至り、石母河を逾え東流と會合する。之を三汊河と爲し、曲折南に向ひ、長枕龍樓の二嶺を經て、直に藤橋市に至り、東水と合流し、藤

橋港から海に入る、東西二水各長さ約十里弱である。

三亞水 崖縣の東北長嶺から抱冲力羅に至り、抱寨虎嶺の小水及抱豪、鏡枝諸嶺峽の水と相會し南行し、落牛潭に至り、小溪を合し、東折して、打啤地嶺下を経て、檳榔園の椰根水を納れ、南流して三亞市に至り、大坡、臨川二水を合し、三亞港から海に注ぐ、全長十數里で舟楫の便はない。寧遠河 源を五指山に發し、陵水、雅康の黎村大嶺から西流し、南解略克を過ぎ、崖縣の境に入り抱龍、黎村の夾水を経、又嘉岸、大龍、陀筭、抱浩を歴て溝口に至り、北來一支の水小と會合し南流し縣城の東北に流れ、東行して北廂を経、西折して抱城の南で分流して二と爲り、保平港から海に入る。全長約三十餘里、漲水の際は小船は縣の南門外に達し、此より上流は只筏の下航するのみで、黎村から米穀竹木を輸送する。

望樓河 源を崖縣西北の大抱扛嶺に發し、東流し小抱扛嶺を経、抱蓋、抱改二山の水と會し、東南を廻り樂平汎地澗を経、港水と相合し、西南に折れ長槐、只峨嶺、大浩嶺、覃寨嶺の諸水と相會し、西に向ひ抱拿、辰聳溪を経て、嚮水潭に入り、又西南に轉じ、油井坡、落馬潭に出で、小水と合し、竹溪、沖坡、烏山、樂羅、望樓を経、榕村港に至り海に注ぐ、河面廣大で崖縣諸水の冠であるが、望樓渡邊に近い所は廣さ三百米突に達し、平素は舟楫の便がないが、雨期滿潮の際は小船は望樓以上にも通ずる。

感江 一名感恩水とも呼び、源を小黎母山に發し、東より西に走り、感恩縣城に至り海に注ぐ、この河は平素水甚淺く舟行の便はない、然し雨期には水深丈餘に達する事がある。

胃江 一名昌化江と稱する。源を五指山に發し、古振州の水に會し、胃江縣の東南から境に入りて、西北に曲折し、老楊地嶺村を経て舊縣村に至り、分れて二支となり、各西に向つて流れ、英潮港から海に注ぐ。全長五十餘里、江面廣き處は里餘に達するも、平日の水深は僅に二尺旱天には、水落ち沙出づるが、暴雨一過せば、水深丈餘に至り濁流漲るを見る。只蛋場からの下流約一里通航の便あるのみである。

珠江 又芙蓉江の名あり、源を胃江の鶴鵝、落膊等の嶺に發し、珠墟、海頭、新市を経て、海頭港より海に入る、全長三十餘里河幅廣き處は約三町、滿潮時は下流一里半舟行の便あり。

新昌江 源を儋縣南の草鞋落膊等の嶺に發し、北流して和盛、王五、數教を経て新英港から海に注ぐ、全長三十數里で通航一里半である。

北門江 又の名は淪江、源を嶺縣那大市附近の蓮花嶺及紗帽嶺に發し、那大、長坡、舊城を経て新英港から海に注ぐ、全長約三十里數、河幅廣き處は半里、上流には石多く、全流には石多く滿潮時は下流深水十尺で二里間は舟楫の便あり、又長坡市の南に在るは侵入岩で、北には噴出岩が在る文瀾水 源を臨高の大王約に發し、北流して、和祥の東を経、約一里餘折れて西北に向ひ、和舍

の西南に至る。一里半で北山（又名雪嶺）流來の小水と會し、更に西北に流れ加來の西南に至る七里にして、僧屬の和慶水と相會し、東北に折れ、美台の西を経て、臨高縣城を過ぎ、西門から南及東に向ひ百級灘を歴て、博鋪港に至り海に入る。全長三三數里河、面頗る廣く、河床に沙質多く亦灘石も多い。經過地域は源地附近の侵入岩地帯を除くの外は噴出岩及沖積地である。水深淺く舟楫の便はない。

溫 泉

本島には下記數ヶ所に於ける溫泉が知られて居る。

- (一) 澄邁縣南の東青嶺下に在る溫泉は、嶺谷中から流出し、熱度は鶏卵を煮るに足り、礦黃泉に屬するものである。
- (二) 文昌縣城の南六里に鹽水池と呼ぶ溫泉がある、冬夏共に温く鹽分を含むものである。
- (三) 樂會には溫泉二ヶ所在る。一は縣城の西五里の上北偏郷に在り、熱度は沸湯の如く一は縣西約八里の白石郷にも同質のものが在る。
- (四) 萬寧縣の城西七里に平地泉が在る。
- (五) 崖縣には二個所ある。一は縣城の北一里弱遷拖嶺下に在り、明の正徳間甃石池を成し、清の

光緒十五年知州唐鏡沅之を重修し、亭を其上に建て、己濟亭と名づけ碑記がある。池は方、圓に分れ方者は又温涼の二に分れてゐる。

(六) 感恩にも二泉がある。一は縣城の東二里、一は縣城の北十里餘に在る。後者は古來瘋患、痔疾等に特效ありと傳へられてゐる。

(七) 臨高縣蘭洋東北の沙田村に一泉あり石壁から湧出し、沸然たるものが在る。

港 灣

本島は、南支那海の北端に屹立し、四面汪洋、海岸線の延長約三百三十餘里、沿岸港灣頗る多いが、就中天然の良港は南部の榆林、東部の清瀾、北部馬嶺の三港である。次は西部の新英も亦有望である。海口は雷瓊海峡の要衝に在り、南渡江の下流に據り交通形勢の關繫上古來鎮を設け、市を開き、政治、經濟、軍事の全般に亘り重要地點たる故其港灣は不良であるが、將來築港完備せば港灣としての利用價値は本島隨一である。次は三亞、藤橋の二港で皆南部に在る。若し榆林をして軍港たらしめば、前二者は南部に於ける商港として、重要視されて居る。

此外の港灣には、鋪前、潭門、博鰲、港北、新村、保平、鶯哥海、墩頭、英潮、新盈、紅牌、龍崑、博鋪、海頭、東水、花場、玉泡等の如きが在るも、補助港たる資格に過ぎない。其他漁業鹽業

上有用の小港は隨處に點在する。

主要都市

海口市 本島海陸交通の重要地位を占め、從來海には香港、廣州、北海、暹羅、安南、新嘉坡各地間の定期汽船の往來せるあり、陸には、車路各縣に聯貫し、輸出入貨物の大半は茲に集散し、本島第一の繁榮市場である。民國第十五年末、始めて獨立市を置き、海口市政廳を設け、幾多の改良進歩を示す、全市の面積は約四万里強で、三十餘街に分ち、就中、中山路、北門路、四牌樓、新興街、得勝沙が繁榮街である。人口約四萬五千餘、居留外人は、男女計四十餘名、主要の商工業は反物、雜貨、制靴、椰殼の彫刻、米穀、棉絲、海産物、紙料、牛豚輸出、銀行、爲替等を營む者が多く、貿易品中の主要なるものは、牛豚家禽鶏卵、牛皮、檳榔、芝麻、赤糖、西瓜種子、籐、鹽等の輸出、洋布、石油、米、白糖、車糖、麵類、化學品等の輸入で、貿易總額は二千萬元と稱され、將來鐵路の開通、港灣の修築完成の曉には、其發展は期待さるゝものがある。

瓊山縣の各市鎮 縣城、列樓、龍橋、大林、永興、東山、郡芭、塔市、演豐、靈山、龍山、雲龍三江、道崇、嶺脚、舊州、龍發、甲子、潭文、鐘瑞、文嶺、大坡、會文、新興、屯昌等二十餘處あり、就中縣城、列樓、舊州、屯昌四市が繁榮である。縣城市の粗布、製靴、煙草、烈樓市の牛、豚

芝麻、糖、豆、油。屯昌市の生豚。赤米、椰玉、蟲絲、家鴨卵、舊州市の糖、米、竹器、諸芋等が重要輸出品で輸入品としては洋貨、石油、反物等が多い。

文昌縣の各市鎮 文昌市鎮には、舖前、林梧、東坡、錦山、羅豆、溪尾、胡山、菠羅、鳳毛、憑家坡、翁田、龍馬、再新、大昌、公坡、水北、大路、中心、潭牛、新橋、南陽、高隆、便民、頭苑東閣、拘芳、昌酒、文教、龍樓、東郊、陳家、邁號、冠南、白延新等三十餘處がある。市街の多數は商況の殷盛なること各縣に冠たるも、輸出品は甚だ少く、鳳梨、椰子等の外は輸入品の取引が多い。

就中便民市は、文昌縣治の所在地で海陸交通極めて便利で、特に在南洋華僑よりの爲替送金は年額數百萬元に達し、嘉積と共に本島屈指の爲替取扱業者の多き處である。

陳家市は便民市の東南三餘里にあり、往時司官守備の地で市街廣潤である。
清瀾市は陳家市を距る十二丁、碼頭市と相對し、清瀾海關、地稅館、清瀾商會、清瀾團局、清瀾鹽務收稅處、三亞場分廠、航政分十、砲經費處等の各機關所が在りし所で、輸出品には、椰子、椰子油、椰布、海菜等がある。輸入品は、木材、鹽魚、牛骨等である。

白延、邁號兩市は相接近して、共に縣南繁盛の市場である。白延の輸出品は、餅乾、刻煙草、椰子油等で、輸入出は米、鹽、魚、反物等である。邁號の輸出品は、椰子、菠羅、薯等で、輸入品は

反物、罐詰、糖、油、乾菜、紙料等である。

瓊東縣の各市鎮は、嘉積、福田、長坡、大路、煙塘、縣城、里文、蔚蘭、山竹、潭門等で、就中嘉積は繁盛で本島第二の市場である。萬最も泉河の北岸に位し、輸出品としては、檳榔、椰子、木材、牛豚、紅籐、蜜糖等あり、輸入出は洋絲布、石油、反物、雜貨、紙料、爆竹、陶器等を最多とし在南洋華僑よりの爲替送金年額も百餘萬元ある。福田市は食鹽の輸出多く、大路市は豆油の産地である。

樂會縣の市鎮は、卜鰲、縣城、中原、陽江、龍江、椰寨、文市等の七處で、就中卜鰲が第一位である。同市は、卜鰲港の北岸、萬泉、龍滾兩河の下流に在り、東路一帶の水運要衝である。輸出品は、荳香、檳榔、紅白籐、益知、木材、生豚、蜜糖等で、輸入品は鹽魚、生鹽、陶器、紙料等である。

定安縣の各市鎮 定陽、巡崖、仙溝、平和、龍洲、雷鳴、永豐、富文、龍門、黃竹、居丁、思河嶺口、龍塘、南閩、吉安、楓木、嶺門、荔枝塘、鳥坡、石壁、文曲等二十餘處あり、就中定陽、巡崖、嶺門、龍門の四市が最も繁盛である。

定陽市は公路四通し、定安縣治の在る處で、輸出品には米、生豚、鶏、家鴨が多く、輸入品は食鹽、石油、反物、木材等である。

巡崖市は百貨出入の要衝たるも近來海口の發達と反比例的に衰頹の狀況に在る、嶺門市は、米、檳榔、蛋、生絲、山瑞、竹筍、牛、羊、豚、馬、鶏、家鴨、木材等の輸出品多く將來性に富み龍門市も亦縣の中央部に在り、縣南主要市鎮に到る、交通の衝である。輸出品には米、豚、牛、鶏家鴨等があり、輸入は鹽、反物等が重要品である。

萬寧縣の市鎮 分界、龍滾、和樂、后安、縣城、興隆等數處あり、就中縣城、和樂、分界の三市が較繁盛である。

縣城は萬寧第一の市場で、輸出品には生豚、生牛、荳香、檳榔、椰子、木材等あり、輸入品は反物、煙草、燒物類、乾菜、藥材、紙料、爆竹等である。

陵水縣の市鎮は、新村、多華、北關、貢學、萬陵、寶寧の六市で、北關、新村が最繁盛である。北關市は、縣城外、陵水港の北岸に位し、本島第三位の商業市場である。輸出品中、産米は毎年五萬餘擔を出し、次は木材、鹽魚、牛皮、白皮、白藤、椰子乾、家鴨蛋等で、輸入品には石油、反物紙料、爆竹、燐寸等が多い。

澄邁縣の市鎮には、豐盈、老城、白蓮、橋頭、花場、福山、安仁、美亭、金江、大雲、長安、瑞溪、新吳、加樂、石浮、西昌、海軍、福來、中興、岑崙、和安等二十餘處がある。

就中金江瑞溪兩市が最大である。金江市は新安江の北岸に位し、縣治所在地である。輸出品は生

豚、米穀、家鴨蛋等あり、輸入品は反物、洋絲布、石油、黃豆等である。

瑞溪市は、新安江の南に在り、輸出品には米穀、檳榔、糖條、乾薯、落花生、豚、牛羊があり、輸入品は金江市と同じうする。

臨高縣の市鎮には、縣城、新興、水邱、東英、波蓮、美台、多文、龍波、加來、和舍、南豐等十餘處あり就中新興、龍波、和舍、南豐等が繁盛である。

新興市は臨高縣第一の市場で、新盈安全兩港と相連り、輸出品魚が大宗で、鹽、生豚、海産物、藤、竹之に次ぐ、輸入品は反物、棉絲、雜貨、銅鐵、器具、麻繩、燒物類、紙料、石油の類である。儋縣の市鎮には、新英、海頭、白馬、光村、洛基、和慶、大成、木裳、大星、南辰、那大、長坡王五、縣城等十餘處ある。就中新英、那大、海頭等が繁盛である。

新英市は、儋縣最盛の市場で、新英港の東岸に位し、新昌江は其前を流れ、北門江は其背を繞り新南公路は其端を發してゐる交通の要衝であるが、港内水淺く沙多く、汽船深く入るを得ず、將來築港をしたならば其繁盛は期待さるゝものがある。輸出品には、紅魚、瓜子、糖、綠豆、錫、苧、牛皮、牛骨、生豚等があり、輸入品には反物、雜貨、銅錢、器具、燒物、木材、紙料、麻、船繩、石油、桐油、藥材、食糧品、飲料等がある。新英港は漁船の集散地で、水産業者の着目すべき點である。

崖縣の市鎮には、藤橋、三亞、保平、臨高、港門、九所、望樓、黃流、鶯哥、縣城、佛羅等十餘處ある。就中稍繁盛なるは、藤橋、三亞、鶯哥の三市である。

藤橋市は、崖縣の交通の要衝で、藤橋港の西北岸に在り、縣内第一の市場である。本島の大帆船漁船等も亦此地に集り、附近各縣の貨物集散地點である。輸出品は木材、藤札、椰子、薏米、木耳、牛皮、米穀、鹽魚、牛、豚、鹿皮沈香等が多く、輸入品としては、商取引不振の爲め特記すべきものはない。本市は近年數回共匪に焚掠されて、市況は凋落し、僅かに茅屋のバラックである。又藤橋附近には民家尙ほ少なく、土地肥沃なるも荒原密めて廣く、樹膠、椰子、咖啡、桐、漆、麻等を播植に好適地多く、本島有數の産業産帶たる將來性に富むで居る。

三亞市は三亞港の北岸に位し、我陸戰隊の上陸地點である。崖縣主要市場であり、沿港附近には多く漁鹽を崖し、北港、陽江、安舖、文昌、樂會の漁船、鹽船は時々來集する。輸出品は、魚鹽を大宗とし、木材、椰子、藤皮、龍眼、椰玉米穀等である、三亞港も將來修築すれば、前途頗る有望である。

昌江縣の市鎮としては、敦頭新街のみが稍繁盛である。本市は縣の南、敦頭港に密接し、其輸出品は、鹽魚、木材を大宗とし、年々百萬元以上に達する。輸入品としては、反物雜貨の類である。感恩縣の市鎮としては、北黎、縣城、板橋の三處あるも、縣内由來商業不振にして、未だよく發

達せず、就中北黎は、民國十二年、鄧本殷部に焚燬せられて以來、頽衰して滿目蕭條、一時尙ほ恢復し難く、縣城板橋と共に寥落してゐる。

氣候

本島は亞熱帶地域に在り、氣候溫暖四時開花し、冬季も雪を見ず、一歳を通じて、寒少く暑が多い。一日の内に氣溫屢々變し、晝は暖、夜は涼、青天は暖、陰雨は寒い。東坡の句に四時皆是れ夏一雨秋を成すとある通りである。只潮海の地は空氣稍濕を帯び、十二月より二月迄は氣溫華氏五十五度に至り、毎年平均の最高溫度は約九十一度、最低溫度は約六十四・三度で、平均溫度約七十七・五度である。以上は北部の氣溫であるが、南部も殆どこれに大差なく、我邦人として、決して凌ぎ難き暑熱ではない。嘗ては瘴霧の區と稱せられた、黎山の奥地も、現在では清淑地域とされて居る。

風雨

本島の風雨は中部と沿岸地帯とで異なる。沿海區は山少く地勢は平かで、海洋の影響を受け、氣候は稍熱く風多く、中部は峻嶺多く地勢高く、其影響で、氣候は稍冷かで雨多い。其風雨の季節は各

地稍差異があるが、風は初秋に多く、雨は初夏及末夏に多い。

風候は四季不同であり、春は東風、夏は西風、秋は北風、冬は北風が多い。

農産物

本島は天恵地福普く、農産物の發育頗る良好で、且耕地面積廣潤、中部山嶺地域を除くの外は平原曠野の荒蕪に任ずるもの多く、河流四方に注ぎ灌溉の便あり、耕牧共に適し、殊に我邦の重要資源たる熱帶農産に絶好なる地域である。

民國五年龍濟光本島に着目し、本島の大規模的開發を計畫したるも、世局不安の爲め、其實行期に入らざりしが、近來各種島業に漸く曙光を認め、島區善後公署は、海南農事試驗所を創設し、研究指導に努力するあり、更に一大飛躍を試みんとせるの時、偶々今回の事變に遭遇したるものである。

要するに海南島開發の問題は、今後のあらゆる施設にあることで、拓人の好試練場として大に發憤を望むに切なる所以である。

以下本島の農産物中、好適せるものを列記せん。

稻、水稻、陸稻の二種がある。水稻は低濕の田に種を、普通十二月七・八日に播種し、二月四・

五日の間に苗を移し植え、夏至より小暑に至る間に收穫し、晩作は、麥刈前後に播種し、大暑立秋即ち八月八・九日の間に播苗し、立冬十一月七・八日の間に收穫する。亦晩作後一作を種え明年二月に至り等收穫するものがあり、是の如きは一年三毛作であるが、多くは二毛作である。之等耕作の回数は皆其地の肥瘠及農民の勤惰に因つて異なり、天然の制限ではない。今後我優秀農民が進出して開發するなら、其增收は疑ひなき處で、米の特産地たることは何よりも心強い處である。

甘蔗 本島は台灣よりも熱帯に接近してゐる爲め、世界の蔗糖地と略同じく、最も甘蔗作に適する、現在本邦製糖業は長足の進歩を來し、國內の供給には十二分であるが、支那大陸に輸出を獨專するに到らば、本島の如きは、唯一の糖業地として價值付けらるゝであらう。

番薯、瓜種、落花生、豆類、芝麻（胡麻の一種）玉蜀黍、藍等の如きも従來有益なる農産物である。

椰子 椰子は現在に於ける、本島主要輸出品の一で、島の東南各縣には、遍、地椰子林に滿ち、崖縣は最も盛である。椰子の用途は油に、食料に、織器に、纜に、屋蓋に、或は杯椀等に頗る多方面に亘り、其利益も甚大であるが、本島は到る處に好適地多く、將來尙開拓の餘地が花る。

護謨 本島の護謨栽培は華僑が馬來半島から種子を試植したるに頗る好適地たるを發見し、民國四年頃より漸次栽培に従事する者増加し、現在三十萬株に及んでゐる。本島では馬來半島よりも發

育良好で、五年木より採液してゐる。護謨栽培事業も將來性を有するものと確信する。

檳榔 檳榔も椰子と共に本島の主要島物である。其用途も亦甚廣く、各縣共栽種に力め東南各縣に最も多い。

咖啡 民國二・三年頃より本島に咖啡を試植し、其成績甚だ佳良なりし爲め、最大園僑興公司の如きは既植數三十餘萬株に達し、其他各公司共競ふて是を栽培して居るが、播種期は春冬兩期で、隨時に苗植し植後五・六年で結實し、壽命は四五十年の久しきに亘り、本島農産中、最も有望の新栽培業である。

茶、煙草、鳳梨、柑橘類も有望視さるゝ栽培業である。

藥草には益智、艾、苘蕒等があり、各地に栽培されて居る。

芭蕉 本島生産の芭蕉には三種あり、一は香蕉と曰ひ又牙蕉とも名付け、皮薄く肉軟く、香甜口に適する高蕉と曰ひ、又鼓槌蕉と名付けるもの、三角蕉又黎蕉と名付けるものがある。

以上の外蔗草、蔬菜類、龍眼、荔枝等の有用農産物に好適し、未墾の地域を開拓する農業者の進出に、幾多の餘地あるは既定的の事實であつて、我國の人口政策上は勿論資源補足問題と相關聯して、閑却すべからざる好適地である。

蠶業

一〇四

本島の養蠶には家蠶と、天蠶の別が在る、家蠶は一歳に八回作とし、産出の絲は僅かに自家用に供するのみで、天蠶絲は急ぐ之を輸出する。現在産額は少ないが本邦人の着目すべき副業である。

家蠶 本島の蠶業は、概して農婦の耕餘の飼養に由り、養蠶法は極めて粗簡で、蠶室もなく、僅かに三角の竹架を以て、層々連貫し屋樑に掛け、随意に放置して居る。將來蠶種桑種を共に改良して、我邦人の如き優秀蠶業者をして従事せしめたなら、其收益も多大なるものがあらう。

野蠶 野蠶は一に天蠶とも名付け、體は家蠶よりも偉大で、其質も硬勁である。之に觸れると音を發する。三角楓葉を食し、安定の嶺門、萬寧の興隆地方では、多く楓樹を植えて野蠶を飼育するものが多い。先づ收繭の後蛾を生じ、蛾をして孵卵せしめる。春初卵が化し成蟲となると之を楓樹の間に放ち、其生長に委すのである。蠶が成熟すれば、樹に下つて適當の處に繭を營むと之を收集し、若干時醋に浸たし裂いて其の絲を取るのである。每蠶絲四・五尺あり其質は粗靱であるが、潔白銀の如く、多く釣絲に用ひるから之を魚絲と名付ける。近年は邦人が買収して居るが、野蠶も亦農業の副業として面白い仕事である。

牧畜業

本島の農民は多く牧畜を副業とし、飼育の畜類は地方の食用に供するもの外香港方面に輸出しつゝあるが、將來專業として發展性あるは、天然牧場に富む本島としては、遺利中の隨一のものであらう。

牛 牛には水牛及黄牛の二種がある。其飼畜は頗る多く、就中黎峒が最も盛で、山野に放牧し群を成し、頸には木鈴を繋ぎ、其音は山谷に振ふと言ふ。黎人は牛を山野に放ち、各中の耳を割き、肥號を付けて識別し、使用の時は繋いで歸る。而して飼育する牛は耕耘及曳車に使用するの外、市場に賣出し、食用に供するのである。島民は殊に牛を嗜み又黎民族は殺牛治病の風があり、屠殺數頗る多く、故に牛角、牛皮、牛骨の輸出は甚だ多いのである。

豚 豚は家として、これを飼育せざるものなく、多くは薯葉碎米又は殘餘の粥飯で之を飼育し、又造酒家は酒粕で飼育する。多くは屋外に放ちて育て、輸出先は香港である。

羊 羊には黒褐二種あり、孰れも飼育して肉食に供する。毛用及乳用はなく、山野に放牧し、樹葉を採食して居る。空室に羊欄を造り厚く禾草を敷いて臥宿に供して居る。山には虎害はないが蛇害の患がある。萬寧の東山嶺は灌木繁茂し、羊性に適合し、著しく肥満し、其肉は軟く美味である。羊群も多く其輸出は此地が本島第一位である。

馬 馬は備、多、冒感の三縣に多く、乗用に供せらるゝが、飼育不良の爲め行歩遅緩で、車を曳

くに用ひ、皆矮少である。一匹の価格は二・三十元である。

鶏、家鴨 鶏は文昌、那大産が最も優美である。鶏卵は海口が最も多い。家鴨は儋、臨、澄の三縣が最も多く、家毎に千百群を成すを見る。多くは田間に飼育して居る。

鵝、鳩蜜蜂の飼育も盛で農家の副業には有益である。

林業

本島は、風勢猛烈なる爲めに、島内に産する木材は、性質堅硬、年輪緻密で、抵抗力があり、腐蝕性に耐へ、材質も優美である。沈香、伽羅等の名香木も亦本島の特産である。中部には斧鉞未だ嘗つて入らざる、良材大木鬱葱たる深林があり、交通不便なるが爲め、多くは棄置枯化するに任せ居る。而も人煙稠密なる地域は天然林を濫伐して補殖を行はず、就中北部諸縣の如きは、用材に欠乏するのみならず、日常薪炭すら、近來價格甚だしく昂騰して居る。本島に於ける林業整理事業は將來の重要問題である。

森林の分布状態 本島の森林は概して天然林が多く、人工林は少い。今其分布状態を概述する。

昌江流域沿岸森林 昌化江は源を五指山に發し、崖縣感恩を経昌江縣を貫流し海に注ぐ、全長六十數里、木材には、石枳、坡瑠、荔枝、紅羅、香楠、高根、油舟、香果、花梨、青梅、鷄簪及其他

格木等數十種あり、江水淺く木材を川流して運搬することが困難であつた爲め、沿岸一帯の林森は今日も尙保存され、將來有望視さるゝ林業地域である。

寧遠河流域沿岸森林 崖縣の寧遠河は源を陵水西部に發し、長さ約三十數里、保平港に至り海に入る。沿岸森林密布し、昌江流域の廣大には及ばないが、花梨、石枳、坡瑠、荔枝、紅羅、香楠、猪尖、高根、龍果、香絲、黃沙、青梅、竹葉松等の良材を産する。

陵水流域沿岸森林 陵水溪は源を五指山に發し、東縣城を経て水口港に至り海に入る。此地域は大木を産し、指經、天料、胭脂、波羅、石枳、苦枳、青皮、加冬、青梅、鐵羅、紅綢、油楠、黃丹、香果、馬尾松、果稿、香椿、紅椰、赤椰等天に沖して蔚蒼たるものがある。

太陽河流域沿岸森林 萬寧太陽河は、源を鷓鴣嶺に發し、萬寧南部を横貫し、興隆の東を経海に注ぐ、河流は長からざるも、其上流一帯の沿岸は、森林頗る豊富で、産木地たる鷓鴣嶺、巴屯嶺、馬尖嶺、大釣羅山、小釣羅山、小釣羅山等の山嶺は孰れも高大で、喬木鬱蒼として、從來交通不便の爲め巨材大木の蓄藏に富み、昌江流域沿岸に次ぐ優良森林地域である。

龍滾河、嘉積河、南渡江、北門江の各沿岸流域は、上流不便の地域には今尙良材を存するも、下流は概して伐採し盡し、將來整理保護を加へざれば、荒涼の赤野化し水患を醸成するに至るべしと言はれて居る。

主要材木 本島各所の天然林木は種類頗る多く、又奇品特種少なからず、未だ學名を確定するに至らないが、俗稱に依れば、下記の如く、其用途としては、各性能を異にせるも梁柱、桁桷、窓戸、椽木、船骨、板材、檣杙器、棺材、家具、船板、舵機、車軸、器具、薪炭等に適し、孰れも有用木である。茲に俗名を列記せば、即ち指經、石枳、波羅蜜、青皮、荔枝、胭脂、山松、黃丹、馬尾松、紅槿、坡酸、母生、山海棠、天料、高根、石果、鐵羅、双本、香果、紅花果、柳果、綠楠、納果、加卜、紅綢、山猪乳、鷄翼羅、果稿、磊稿、杏柱、黃樺、黑亮果、龍角、山蕉、鶯哥、苦棟、山栖、苦枳、坡插、毛丹、油楠、猪牙格、鳥脚看、香楠、厚殼楠、大乳、銀稅、紅果、香厚、烏營、赤蘭、料理、青梅、紅羅、鷄響、八角、花梨、青綠、苦梓、龍眼、竹、黃籐、白籐、鷄籐、苦籐、茄冬、黑榧、柯樹、赤松、黃楊、海棠、枇杷、竹葉松、三角楓、黃豆甲、土檀、鐵稜等の多種類である。

森林副産物

野獸鳥蟲類の中には捕獲して、食用觀賞用其他に利用すべきもの頗る多く今之を摘録すれば、鹿、山鳥、山羊、黃鬃、狸、獺、豪猪、蝟、穿山甲、猴、熊、山猪、栗鼠、燕、鸚哥、八哥、鷓鴣、鶉、鶉、禾花雀、天鵝、蛇類、蛙類、飛蛇等がある。

野生植物 本島には、珍重せらるゝ野生植物が多く、伽楠、沈香、降香、剗香、木耳、靈香、還

香草、萹草、蘭草、餘甘子、曼陀羅、天門冬、蒲葵、木棉、櫻竹、山竹、砂竹、斑竹、甜竹、相思、棕櫚、榕樹等、香、藥用、食用、器具材等に有用植物がある。

鑛産

本島の鑛産は、未知數に屬するもの多く、既に發見されたるものは下記の通りであるが、就中金鑛、及鐵鑛は前途有望なるものあり、又油頁岩よりは石油を採製すべく、將來研究價値が多い、茲に概説せば、

金鑛 本島の金鑛には、山金、砂金の兩種がある。山金は石英、石炭諸岩、及黃銅鑛、黃鐵鑛、硫鐵鑛等の中に産し、砂金は、河底の砂礫に混じて居る。現に金鑛にして發見されたるものは、瓊山の元門峒、儋縣の紗帽嶺、昌江の樂梅嶺、黎山に近き感恩の羅旺嶺、古鎮洞、尾乍溪、陵水の搾銀嶺、猴子嶺等六七個處ある。

銀鑛 本島の銀鑛中發見されたものは多く方鉛鑛と混合し、鑛區の分布は頗る廣く、但し開掘したものは昌江神山鑛區と澄邁銀嶺鑛區の二鑛區である。

銅鑛 には、五指山藤滿峒鑛區、昌江石碌山鑛區、崖縣廻風嶺鑛區、澄邁石鼓嶺鑛區等がある。

鐵鑛 本島の鐵鑛には、赤鐵、褐鐵、磁鐵、錳鐵の多種がある。就中赤鐵は、崖縣喃味獨田、定

安南牛、陵水坡頭嶺、七弓嶺等に産し、褐鐵、錳鐵は崖縣西路第四區に産し、磁鐵は澄邁、西峯、西峯、定安、羊角に産する。

其他錫、鉛、銻、亞鉛、灰石、硅、油頁岩、化石、電氣石、石墨等が散見されてゐるが、要するに本島の鑛産は頗る將來性に富み、總て富鑛探檢時代を出現するであらう。

鹽業

本島は四面環海の地域なるを以て、鹽田を築くべき處廣漠無限であるが、其發達遅々として、作業大ならず面積廣からず、大企業の經營がないが、現在では、三亞が最も盛で總鹽四十七區ある。又榆林、保平、藤橋、保平各港には、鹽田用地多々あり、鹽田は將來有望企業の一つである。

水産業

本島は廣東省漁業上最も重要地點で、西方海防より南は志蘭に至る東京灣は面積一萬七千九百九十平方哩あり、海深百尋を出です、多くは泥底或は沙底で、曳網漁業に適する區域であるが、尙ほ未開發の漁場で其東側は百尋線に至り止る區域亦五千四百平方哩あり、共に廻游魚類は由來富饒と稱され、定置漁業を經營するに最も適して居る。近來日本漁船の漁撈に従事するもの漸次増加しつ

ゝあるが、農産業者の進出と共に、漁業者も並行して發展すべき好舞台である。

海水産 魚類には紅魚、烏鱸、白鱸、馬較魚、石斑、鯉、鮪、刀魚、鯛、鱒、烏賊、河豚、玳瑁、蟹、蝦等數十種あり、貝類には、牡蠣蛤、螺、海月、等亦數十種を算す。又珊瑚類、海藻類も頗る多し。

淡水産 本島は江河四布し、池沼錯雜點在せる爲め、出産の水族極めて種類多く、就中、鱖、鯉、鮪、鯽、鯽、石斑、刀魚、斑魚、鯰、塘虱魚、蝦、蟹等も多く鱖、鯉、鮪三種は人工養殖をするが他は皆天然生産である。淡水産魚も各河頗る豊富である。

河川漁業、近海漁業、遠洋漁業共、本島の住民は、其智識甚だ淺く、漁撈方法も著しく粗雑であつて、二、三曳網船を除くの外、多くは原始時代の漁業に近いから、將來本邦漁業者の活躍區域として、有望なるは敢て説明を要しない處である。

工業

糖業 本島の工業は、未だ大規模なるものはないが、就中製糖業の如きも、概ね舊法を用ひ、機械を用ゆる大工場はない。現在製糖業の如きは第一着手を要すべきものである。

製草業 製草工場は海口に現在二十二家あり、資本多きものは二、三萬元、少なきものは三、四

千元で工人約三百餘人これに従事して居る。然し將來牧畜業の隆昌と共に、製革業も、發展の餘地を存する。

製油業 本島の製油業は、落花生油、海棠油、椰子油の三種に分たるが、是又農産増加と共に將來性ある事業である。

罐詰業 窯業、炭業、椰子殻器製作、印刷業、牛皮業、織布業、製靴業、製氷業、石鹼製造業、玻璃業、燒青業（七寶燒）竹器製作、魚網業、麵業、木工、裁縫業、金銀細工業等も各地の繁榮と共に必須の有望工業である。

貿易及金融

叙上の各種事業の發展には、其推進力としての金融事業、其開發機關としての貿易業の併進すべきは言ふまでもない事である。殊に支那人は商業道德即信用の點に寧ろ邦人を凌駕するものあり、此點大に邦人の注意を要する處で、何といふても、金融の圓滑、貿易の敏捷に依つて、農、工、漁等あらゆる殖産事業をして、多々益辨するの樞軸たらしめねばならぬ。敢て財界人の發憤を冀ふ次第である。

海南島開發は一億萬民族の聲也

皇軍が海南島攻略に對し、敗敵蔣政府が、所謂曳かれものの小唄的に、其常套手段たる強がりや最も密接の關係多き英、佛、米を興奮せしむるが如き、例に依つて巧妙なる宣傳と、これに相呼應する如き、第三敵國側の遠吠の苦情の數々は、新聞紙上に、ラジオに依つて、既に諸賢が知悉する處、今更繰返す必要はないが、我南進論者が擧つてこれを絶讃し、一日も早く其戰果を空しくせざらんことを熱望しつゝあることは、各新聞の論説を始め、南進的雜誌はいつでも大見出しで、其開拓を邦人の手で、實現すべき事を唱導して居る。

現在に即して、他は是を好むと好まざるとを、顧慮すべき場合ではない。海南島即時開發斷行は即ち一億萬日本民族の總和的熱望である。同時に又新東亞建設の第一義である。就中、著者が最も推稱するは、文豪徳富先生の、痛快なる下記一章である。

海南島の占領

蘇 峰 生

紀元節の前日、一大吉報は、天外より飛來した。曰く我陸海皇軍は、完全なる鐵協の下に海南島の一角に、敵前上陸を敢行したと。又曰く瓊山を占領し、海口を陥れ、逐次東西地區肅清の兵を進めつゝありと。我等は此報に接して、眞に踴躍三百である。

海南島は支那南方の咽喉にして、假令廣東を占領しても、此の方面が敵人の手に委せらるゝ間は、第三者は隨意に之を利用して、以て敵勢を支持すべきは、今更ら明目張膽して、論議する迄もなき事だ。我等は今日に於て、此の快報に接したるの、寧ろ晩かりしを憾む。然も晩きも尙ほ止むに勝る。惟ふに收蔣の援護者たる二、三子は、これが爲めに爽然として自失し、茫然として自棄するの他はあるまゝ。

× × ×

海南島は、其位置からすれば、南海の要衝である。所謂る比律賓、印度支那、新嘉坡、香港、何れも皆な指顧の間に在る。誰にもあれ之を占領すれば、直ちに楔をその要衝に打込みたるものである。而して獨り其の位置が、斯く重要であるばかりでなく、海南島それ自身が、亦た一個の寶珠である。單り其の面積が台灣に比して、廣大なるばかりでなく、其の天福地恵が、更らに之に倍するものがある。

× × ×

日本と海南島との干係は、南北朝時代の和寇ばかりでなく、日本の上古史に於ては、支那人は日本——少くとも九州——と海南島とは、隣地でありと誤解してゐた。それもその筈である。一年中

この方面を吹く貿易風は、或時は我が九州の船を、海南島に漂着せしめ、或は海南島の船を、九州に漂着せしむるの神通力を持つてゐる。今日我が皇軍が之を占領したるは、宛も自然の傾向に遵由したるものと云ふても過言ではない。

× × ×

明治二十九年六月、記者が香港を出て、海南島附近の水路を過ぐるや、曾て一詩を賦して曰く、
檣上風高夜色幽、香灣南去水悠悠、金蛇一道掣天末、應是東坡謫處州。

と。記者は當時より海南島には、淺からぬ關心を有つて居た。それは翹だに蘇東坡の遷謫地であるばかりでは無つた。占領甚だ佳希くば守つて之を失ふ勿れ。(昭和十四年紀元節)……
著者は先生のこの熱誠溢るゝ妙文章は、再三復誦し、其都度卓を打つて、快哉を絶叫したものであつた。即ち茲に抄録して其快味を更に分たんと欲するものである。

語を寄す我官僚諸公よ、徒らに逡巡する勿れ、今日の世界情勢は、早いもの勝である。獨の敢行伊の強策、斷じて行へば鬼神もこれを避くとの確言を、吾人は正しく今眼前に直視つゝあるではないか。

徒らに宋襄の仁に千古の悔を残したる、前者の轍を踏む勿れ、勢は乗する時に乗せざれば、何時までも續くものではない。

著者が、海南島開發を絶叫する所以は即ち現在に直面して、尙絶叫せざるを得ざる幾多の杞憂が存するからである。

頃日新南群島が我領土たるを發表さるゝや、知るも知らぬもこれを歡呼した。

就中、笑止千萬なりしは、某々一流の大新聞が、新南群島を叙するに、南洋の寶庫云々と、大見出しをした事である。提灯記事にしても、餘りに南洋の認識がない。吾人が絶叫する海南島こそはかゝる出鱈目的な、無責任極まる、好言令色のお世辭的寶庫そのものではない。正真正銘の大寶庫である。

今や海南島開發は言論の時機ではない、實行の秋である。一日を争ふ焦眉の急務である。

來れ志を同ふする青年諸君よ、來つて

海南島開發の大旗をふりかざし、歩武堂々南進國策の第一線を確保しやうではないか。喝!!!

附 録

大ボルネオと日本人

——過去、現在、將來——

多 田 惠 一 著

熱帯を制するものは世界を制す

「熱帯を制するものは世界を制す」とは、嘗て白人が豪語した至言である。然り現在時局下に於て幾多の熱帯資材の窮乏に、直面しつゝある我が國人は、殊更に此語の眞理を肯定せざる得ぬ場合に立到つてゐる。

茲に見る處あり、予は曩日前編に於て、熱帯資源巨島『大ボルネオ』を著し、南進國策の焦眉の急務なるを力説し、憂國の志士に訴へたる處、幸にして江湖の多大なる贊辭を博し、一面時局に於ても、北支、中支にのみ偏するが如き感あり、隔靴搔痒の嘆に堪へざりしに、卒然廣東の奇襲攻略

となり、世界に驚異の眼を張らしむる間もなく、矢繼早に海南島の奪取となり、近くは又新南群島の我領域宣言となり、更に又、頃日小磯拓相の南方經綸の大抱負の發表等、南へ南へとの新東亞建設の叫びは強震の如く、世界を衝動するに到つたのである。

「人間は永生きはしたいものだ」と頭山翁はよく語られるが、想へば今から三十年前、白瀬中尉の南極探検隊の一士として、青春の骨を極地の白雪裡に埋むべく突進した往年から、其往還に立寄つた、大濠洲、ニュージールランド、南洋、南支の、無限の寶庫に魅惑的の刺激を受け、爾來南方未開の寶庫開拓を叫び續けて、いつしか双鬚に白を交ゆるに到つたが、其意氣に於ては、南極探検の往年と何等變りはない今日、いよいよ南進國策の實現の舞臺が、好轉するを觀るのは愉絶快絶の極である。

本篇は、稍蛇足の感なきにあらざるも、南進國策に寄與する一端ともならば本懐である、海南島から新南群島へ、更に大ボルネオへの視野を展開せられんことを切望する次第である。

×

×

×

×

其中心が赤道直下に位置し、南北兩緯度に亘り、我日本全版圖よりも廣きこと、五千方里の廣漠たる巨島大ボルネオが、未開の謎の寶庫として、千古の儘に放棄され、所謂持てる國英、蘭が、寶の持腐れの現狀にあることは、前篇に於て詳説した通りであるが、新東亞建設の要素資源島「大ボ

ルネオと日本人」との題下に、其解説を試みることにするが、この一篇が幸にして、現下の海南島開發上參考の一資料ともならば、著者の欣懷とする處である。

過去の「大ボルネオと日本人」

我日本民族が、大ボルネオに足跡を印したのは、相當古い歴史を有するであらうが、徳川幕府の鎖國政策が禍し、日本民族の海外發展の文獻すら湮滅されて、今更遡るべき記録もないけれど、少なくとも、中世戰國時代の勇敢なる日本の壯士が、八幡船に搭乘して、南支南洋の海洋を、我物顔に横行し、就中南進の先驅者山田長政一黨が、シヤムを風靡した時代、和寇の名に依つて、幾多の無名の拓士が雄飛した往時には、南支那海の孤島大ボルネオにも、慥に日本人の根據地があつたとが想像される。其遺蹟とも見るべきものが、今も猶、英領ボルネオの、サラワク王國の奥地邊りに、岩石に彫刻されたものが發見され、又蘭領西ボルネオの首都ボンテアナ郊外にも、慥に日本人の墓石であると喧傳されてゐるものがあり、時に訪づるゝ邦人をして、低徊之を久ふし、無限の感慨を喚起せしむるのである。

近代に於ける「大ボルネオと日本人」

近代に於ける大ボルネオへの日本人進出は、明治の末期から大正の初頭へかけてである。明治の末期、豫備陸軍少佐神保文治氏が指導下の邦人組合は、蘭領大ボルネオのバリト河畔に約五百町歩の水田を開拓に着手したが、地域の選定に異算があつたのか、多大の期待をかけられた此壯圖も遂に成功しなかつたのは、頗る遺憾千萬であつた。

大正の初頭、馬來半島に護謨園の黄金時代が出現した際、我もくと護謨園が起業された餘波は孤島ボルネオにも、慧敏なる歐米人は着眼し初め、西部のカツバース河畔東南部のバリト河畔に大規模な護謨園に先鞭を付け、我邦人も亦其波に乗つて、馬來半島に進出した餘力で、大ボルネオにも大小護謨園が出現した。

就中莫領北ボルネオのタワオ附近には、久原財閥、三菱財閥の大規模な農園が企畫され、久原系のもものは、最初故林謙吉郎氏がこれを主宰して、南支の汕頭及廣東方面から、苦力移民を募集し、病院、寺院の設備迄も完成し、一時は大規模的に計畫されたものだが、やがて歐洲大戰亂平和後、護謨悲境時代となり、次で材氏が物故せられてから、此事業は頗る緊縮され、現在では、日本産業護謨株式會社（資本金一千萬圓）に依つて繼續され、其租借面積三三、八四七英反餘を有し、護謨マニラ麻、椰子の植林、外に其生産品の販賣、木材の伐採及製材の各業も兼營し、邦人經營のボル

ネオ護謨園中、依然第一位を占めてはゐるが、往年起業當時の意氣込みには、更に見るべくもないのである。

三菱系の方は、現在タワオ・エステート・リミツテッドと稱し、英領北ボルネオのタワオに於て（資本金百萬海峽弗）古々椰子、マニラ麻、護謨の栽培事業を經營してゐるが、是又大正五年組合組織で事業着手當時の、大企畫に比し、頗る退嬰的なのは遺憾である。

著者は、今茲に前記二大財閥が、最初は脱兎の如く、其有り餘る財力に任せて、立ち上つたボルネオ開發の、國家的大事業が、何故に今日の如く、處女的に始終したかに就ては、其當事者の熱意の程を疑ふものであるが、畢竟持てる國々と同様、得てして資産家の事業が、何等かの緊張味と眞劍味とを欠ぐ處があり、又兎角財界人達は、眼前の營利的、打算的にのみ汲々として、成功を急ぐ癖があり、十年計畫とか五十年計畫とかいふ様な、遠大なる理想などいふ事は、餘り問題にせぬ事が却つて此種事業の退嬰頓挫を來す原因となるのではないかと想ふのである。

これに反して、華僑の成功は、其行き方を異にして、最初は遅々として、其計畫の間口も狭く、所謂質實的に、根強く辛棒強く、小規模から中規模に、中規模から大規模へと、一步又一步、鞏固たる地盤を築き、所謂大器晩成、長期建設を目標に起業するのである。

案ずるに、斯の如きは、華僑の方針は、其出發の初頭から、背水の出陣的渡航である。何となれ

ば、彼等は祖國に於ては、少し蓄財すると、絶えず軍閥に責め付けられて搾取さるゝので、頼みにならぬ祖國は、愛想も未練もなく、第二の故郷を建設すべく、悲壯なる覺悟の下に渡航したものであるから、石に嚙り付いても、成功する決心がある。

此點既に其行き方が大なる相違がある。それ故に、何等かの曙光を認むるや、彼等は一味の郷黨を逐次呼び寄せ、華僑部落を構成しつゝ、累進的に其事業を擴大し、あらゆる遺利を隨所に發見し細大洩らさずこれを我ものとして經營する。

例へば、護謨園、椰子園の大規模な植林事業を經營するに當つても、其初期時代はこれに全力を傾注せず、胡椒、タビオカ、サゴ椰子、砂糖椰子、染料、香料、塗料等の如き、小規模な農産各種に亘りて、一町歩二町歩と、開拓栽培を試み、一面には土人と物々交換をして、厘毫の利益も洩さず收得するなど、智力能力の渾身の發揮を吝まず、經營宜しきを得るため、護謨が暴落すればとて他の有利な農産で補ひ、或は土人等と物々交換の利益で生活を立てるといふ、臨機應變の所置を取るのである。

翻つてこれを我事業家に見るに、護謨園が有利だといふ、甲も乙も遮二無二これに熱中殺到し、而も自己は投資家氣取りで、最初の年から利益配當を目論見上げて、募集した株式資金のあるに任せ、總てが豪華版式であるから、一度其悲境に沈淪するや、昨日の意氣は沮喪して、南洋は駄目だ

と長大息してさちを投げ、没落の醜狀を晒すのであるが、かゝる見じめさは華僑には微塵もない。現在如實に華僑の堅實なる其成功を物語る一斑である。

模範的拓人元島作太郎翁

—華僑を學びし赫々たる業績—

此間に介在して、我日本拓人の龜鑑ともいふべき、隠れたる大ボルネオ開發の模範的偉人元島作太郎翁を紹介するが、元島翁に就ては眞の拓人此處に在りとの、意を強ふするに足る一挿話がある。

元島翁は、鹿兒島縣出身の齒科醫であるが、七十餘歳の今日も猶、壯者を凌ぐ意氣で、大ボルネオに於ける、日本人村の長期建設に孜々として精進してゐる。

今から三十餘年前、翁が壯年時代は、新嘉坡で齒科醫を開業してゐたのであつたが、夙に大ボルネオ開發の雄志に燃えた翁は、大正の初頭ボンテアナの奥地、ランダー州に進出を試み華僑の發展振りを眞似て、數名の同志に依つて邦人行商組合を組織し、二三萬圓の雜貨を携へて、土人と物々交換——野生の脂肪用樹果テンカワンと賣藥雜貨などの交換——を爲すべく、喰人種部落に侵入した。元島一行は、從來の狡猾で、打算本位な華僑や、横暴で傲慢な馬來人の行方と違ひ、溫情的に

進出したので、これが土人部落に人氣を得、忽ち附近に喧傳されて日本の旦那と敬慕され、到る處好結果を得るので、同業の馬來人などの商賣仇的嫉妬から

「日本人の行商組合は軍事探偵だ」

と和蘭官憲に誣告した處、豫て邦人の進出に、猜疑の眼を向けつゝあつた和蘭官憲は、何等の精査も試みず、馬來人の誣告を取り上げ元島一行を捕縛し、就中青年組中村桃太郎中原輝宜兩氏には無態にも拷問的暴行するなど、不當行爲に出でたが、當時報を得た我が在パタビヤ總領事館からは書記生が急行し、其全々虚構的の訴へであつた事が判明して、事件は落着し、元島一行は解放されたが、然しこの爲めに、物々交換の機會は逸し去り、其計畫は凡て畫餅に歸したのみか、二三萬盾の損害を來したのであつた。

其處で元島氏は、これを我外務省に訴へ、損害賠償を和蘭官憲から、支出さすべく盡力方を請願したが、從來外交上手な和蘭外交官に對し、當時の我軟弱外交が徹底すべくもないので、大正五年初春元島氏は歸朝して、祖國の志士に訴へた。當時南極探検終了後、圖南の雄志に驅られつゝあつた著者は、頭山滿翁や、故梅屋望南翁から慫慂され、卒先これが解決策に狂奔し、故佐々木蒙古王伊東知也等の國民黨の闘士や、向軍治、鷗崎鷺城等の雄辯家や、當時は青年學徒たりし、猪野毛利

榮、栗山博、中山福藏の諸士（何れも現代議士）を糾合し、南洋開發青年同盟會を組織し、和蘭外交の傲慢不遜を絶叫し、一面議會の問題ともしたので、和蘭官憲は、遂に我願意の全部を納れ、所謂國民外交の、強硬手段が奏功し、さしも行き惱んだこの事件（ランダー事件といひ、當時は盛に喧傳された）も、我正義の主張を堂々貫徹し、元島一派の組合員は、要求通りの賠償金を、和蘭官憲から支辨せしめた上、當局者は嚴重懲戒處分に附せしめたのであつた。

これが動機となつて、頭山翁、梅屋翁、故本山彦一氏、林謙吉郎氏、杉山茂丸翁等の後援で、南洋開發社が創立され、著者は其急先鋒を承り、大ボルネオ探検に従事することになつたのであるがこの事件の勝利と共に、和蘭官憲は打つて、變つて邦人に好意を示す様になり、（其實裏面では益々警戒する様になつたのであるが）元島氏は、其好轉を巧に利用し、一面親日家たりし、在ボンテアナの有力華僑と協力し、約二十萬盾の開發費を、其華僑から出資せしめ、ランダー州の奥地イガパン村てふ喰人種部落附近に、一大護謨園の開拓に着手し、同時に胡椒、タピオカ等の試作もなし共に頗る好成績を得て、漸次此農園を擴張するに到つたのである。此間其幕下に酒匂、柚木、中原窪田等の青年拓士が、献身的に元島氏に協力した事も亦預つて多大なるものがあつた。

爰に於て、元島氏は大に自信を得て、其故郷鹿兒島縣から逐年拓士を勧誘し、此處に日本人村の建設を試むことになつた。著者もこれに參劃することになつたが、元島氏の慫慂により、専ら祖國

に向つて大ボルネオ開拓の急務を、朝野の有力者に力説宣傳する事になり、歸朝して、著書に、新聞に、秃筆を呵し、或は各地講演に席暖まる暇もなく、文字通り東奔西走したのであつた。此間福田雅太郎中將、後藤新平伯、明石臺灣總督、田中陸相、松田拓相等にも直接面會して、大ボルネオ開拓を力説した。勿論財界人にも説いたが、臺灣に基地を有する製糖業者が南洋に糖業地を獲得する様になつた事と、水産業の目ざましき進出位いなもので、吾人が唱導する大量移民の日本部落建設の大國策は、累進的に（大正五六年頃には支那人には入國税二十五盾を課してゐたが、邦人には無課税であつた）不當の入國税を徴する様になり、現今の如く百五十盾（邦貨三百圓）といふ不當な要求にまでなるやうに、我外交當局は追隨するのみで、對岸火視して一向無頓着な事等に禍され、遂に阻止さるゝに至つた事はかへすゝも遺憾千萬である。

小規模ながらも元島氏の不斷の努力は、祖國からは何等の後援も資金も仰がず、獨力獨歩遂に五六名の日本人村を建設し、華僑の成功にも似たる一步又一步の經營振によつて、模範的日本農園村を出現せしめたのであつた。

終始一貫、三十餘年の半生を大ボルネオ開拓の大業に任ねた、熱血漢元島翁の多年の勞苦に對し我國家は何等の表彰も成さないのである。

遮莫元島翁よ、翁が不斷の努力はやがて後進の日本拓士の感奮勵起の警鐘となるであらう。

現在「大ボルネオの邦人事業と將來の開發策」

上述の外邦人の事業としては、大正六年頃から野村東印度殖産株式會社（資本金五百萬盾）の東大ボルネオ、バンジャルマシン方面の進出となり、護謨殖林の外、護謨精製大工場を起し、次でボルネオ殖産株式會社（資本金四十五萬圓）は、英領北ボルネオ、サンダカンに、スランジン護謨園（資本金百萬圓）は西ボルネオ、カツバース河畔に、護謨大殖林を經營し、次で近年ボルネオ水産南洋林業等の起業となり、又協和鑛業（資本金五百萬圓）のボルネオ油田組合によつて、油田鑛區に進出するあり、又蘭領のポンテアナ、バンジャルマシン、パルクバハン、英領のゼセルトン、サラック方面等に雜貨商等を經營する邦商の不斷の努力者あり、英蘭兩領を通じ、約一千五百人の邦人が、各種産業に活躍しつゝあるのであるが、將來邦人として、實行すべき最有望なるは、何といふても、人口政策上からしても、大移民事業である。

我が本州の八割弱の面積しかないシャバ島が、現在四千二百萬といふ莫大な人口を有し世界隨一の人口稠密地であるのに、近來和蘭官憲は、附近のスマトラ、ボルネオに移住を奨勵するけれど、かゝる人口稠密でありながら、左程生治難もないので、手近の隣の島に空漠なる沃土があつても、シャバ人は發憤しようとはせぬのである。これに見ても、光と熱とに天恵ある熱帯の風土が、如何

に生産力が多大なるかを如實に物語る次第で、移民國策を論ずるものは、此點を觀察檢討する處がなくてはならぬ。ジャバ島に約六倍大の巨島大ボルネオに、將來四五千萬乃至一億の人口を増加することは、決して机上の空論ではなく、其可能性あるは、何人も否定すべからざる問題である。

只現在の様な、封鎖的政策による、過大な入國税とか、起業上排日的の條規などで、現在の持つる國が、障壁を設けつゝあるを打開し、其反省を要求し、堂々たる國際正義による、共存共榮を主張の下に此寶庫巨島を快よく開放せしめることが、今日第一の緊要問題である。

我識者に大ボルネオ再検討を要望す

翻て想ふに、現代戦は一面戰鬪力旺盛なる人的要素と多々益々辯ずる物的資材との兩々相俟つて充實するものが最後の勝利たり得るのは、今更記述する迄もない事で、如何に勇猛果敢なる部隊であつても、彈丸兵糧が缺乏しては、敵陣を蹂躪する事は出来ぬ。連戦連勝の奈翁が、モスコに於て、飢寒の憂目に遭遇して、遂に惨敗の緒に陥つたことや、世界大戰亂に際し、獨逸が武力に於ては優勢であつたが、物資の窮乏が原因して、其頓挫を來したのと、古往今來其軌を一にする處であるが、殊に科學國策を叫ばるゝ今日でも物的資源が完備しなかつたなら、嘗に戰爭許りでなく人類發展途上の平和的産業に於ける覇者たり得ることも絶對不可能である。或は代用品可なりと言ひ、

或は廢物利用を奨勵し、或は科學萬能を嘔歌し、現在の日本は持てる國なりと得意然たる科學者も御座るが、要するに井蛙然たる鎖國者流である。左もなくば一時遁れの諦め言葉である。此程竹越三又先生は著者の大ボルネオの短篇を推稱されたので、扁額の揮毫を冀ふた處、直に快諾され、

「蚯蚓は一穴に安んじ神龍は九天に翔る」

と大書して惠與されたが、宜なる哉と快呼せざるを得なかつたのであつた。成程蚯蚓は土さえあれば満足して居る。又豚の如きは零細な滋養でも吸収する。併し人間は高等動物である。如何に精巧な人絹やス・フでも、其使用價値に於ては、蠶絹や、綿製品とは比較にならぬ。況んや人口國策を樹つるに當り、只廣漠たる空地のみでは議論にならぬ、其處に人間生活を豊ならしむる天惠の豊富なるものがなくては、問題にならぬ、土地の利用價値がなくては、時に一町歩の耕地も、一反歩の良田に劣ることがある。熱帯は多毛作地たと共に、多收穫地である。滿蒙の一町歩よりも、熱帯の一反歩の方が寧ろ多産で收得が多い。此見地から、今大ボルネオを要約解説して見やう。

一、大ボルネオは、面積からいふても、我日本全版圖よりも、尙五千方里廣い、巨島である。
二、大ボルネオは、熱帯地なるも、從來想像された様な、瘴煙蠻兩の地域ではない。氣候も一年を通じて、我臺灣よりも凌ぎよく、而も光と熱との天惠に於ては、世界隨一といふも可なる沃土である。

三、現在大ボルネオには、全住民約二百萬人と稱され、其大部分は蒙昧なる土人である。其土人は白人よりも、我日本人を敬慕歓迎し、所謂人の和に於て、世界何れの國人よりも我日本人が、有利なことを確言する。

四、大ボルネオは、我臺灣よりすれば、僅に三四日航程で達せらるゝ近距離的地の利がある。神戸より直航するとしても約十日航程である。これを持てる國英、蘭の、二ヶ月航程の遠距離に位置すると比較して、其利害得失の差は、論ずるまでもない處である。

五、石油あり、石炭あり、鐵あり、錫あり、金あり、ダイヤモンドあり、然して木材は無盡藏である。米作に適し、而も二毛作三毛作可能地である。筍炭の如きは野生して、新陳代謝的に四時絶えず發生する。天與の美果は豊富である。鳥、獸、魚類は、山、野、河、川に充滿して、一舉手、一投足捕獲に容易である。綿花、甘蔗の栽培に好適地が多い。生活資源、戰爭資源、兩々具備したる地域として、世界無比な天恵地福豊富な地は、他に求むべくもない。而も印度や支那の如き、五千年の文化を有し、何億といふ多數住民を有する舊大陸とは相異なり、三千年以前我天孫降臨時代を偲ぶに足る處女地帯である。未開の寶庫である。其處には原始的土人ガイヤ族が、醉生夢死して文化の害毒に汚されぬ、一大仙境であり、極樂境でもある。

六、日、支、滿、打つて一丸となり、所謂共存共榮的に、將來一大飛躍を試むべく、八紘を一字

として進展する眞の舞臺、所謂新東亞建設の目標地としては、第 が大ボルネオ、次で大ニューギニア、次で大濠洲、次がニュージラントである。日、滿、支經濟ブロックを強呼する我經濟者流は、何故に、日、滿、支、南洋の物的資源ブロックを絶叫しないのか。嘗に机上の空論よりも、實行性のある此大經綸を検討せざるや。

七、大陸政策に過去の舊世界、人類充滿の地域のみを語る勿れ、未開の寶庫たる前項の巨島と新大陸とは、其開發價值に於て、舊大陸に數倍十數倍なることを認識せよ。其處は白人の獨占場裡なりと遠慮する勿れ。ヒットラー的の主張の下に、所謂眞の國際正義、民族發展の大旗幟を振りかざし、正々堂々上述封鎖的巨島、新大陸を、手近にして、生活圈内とも云ふべき、新東亞民衆の前に解放せしめよ。

八、新東亞建設の眞の攝理は、前述の未開發地域に進展する事で、我日本の如き資源に恵まれざる國は、國を空にして上述の新資源地域に移住するも可なりである。

九、人口稠密を調節し、人間生活を豊かにしなかつたならば、如何に結核撲滅を計つても、衛生學を應用しても、焼石に水である。現に帝都に於て見る——昨年夏の如く——江東三萬の浸水住宅三度、蒲田の浸水住宅、一萬といふ、忌はしき記録を皆無にしなかつたなら、安樂な都會たらしむることは出来ぬ。試に大濠洲の郊外住宅地を視察して見よ、其處に我別荘地帯にも見られぬ様な、

明朗にして、光と熱とに普き清酒な住宅のみを發見するであらう。

セシルローズは、祖國では廢人同様の結核病瀕死患者であつたが、頼つて旅行した家兄の任地たる南亞の熱帯にさまよふ中、偶然にも結核は彼の體から消え行き、いつしか健康を取戻し爰に勇氣百倍、遂に南亞の大英殖民地を建設し歴史を飾る大英雄となつたのは、有名な實話である。南進政策は一面結核病撲滅の積極的國策でもある。良醫の眞價は病人を全治するよりも、病氣にかゝらぬ健康體質を養成する方が優つて居る。結核病は一は、文化の中毒であり、又人口稠密が原因する病魔たるは、何人も否定出来ないであらう。熱帯地域には結核病絶無といふてもよい事を熟視せよ。

これを要するに、政治も、經濟も、衛生も、人間生活の原則に逆行しては、其好成績を擧ぐる事は不可能である。況んや世界の強國を敵として、奮ひ立つたる新東亞建設大計畫を遂行するには、天恵と地福とに順應して、其實現を一日も早からしめばならぬ。更に言ふ。

「熱帯を制するものは克く世界を制すと」

蘭印當局を糾弾せよ

|| 往時を追懷して痛憤に堪へず ||

多 田 惠 一

續發する蘭印官民の暴戾不遜

獨逸の電光石火的侵略には、一たまりもなく慘敗して、脆くも祖國を擧げて降服の止むなきに到り、多年列強の鼻息を読む老獪巧妙なる外交手段により、さしにも榮華全盛の我世の春に耽りつゝありし、和蘭女皇もうらぶれの身を英京ロンドンに遁走した。が、其處にも亦獨逸の爆彈が雨注され夢安らかに結ばれぬので、遂に英領カナダへと逃避の旅を續け、配所の寒月を仰いで懊惱苦悶しつゝある今日此頃、其嘗ての臺所的寶庫蘭領東印度は、和蘭官憲の一縷の餘命の綱とばかり英米合作の後押に依存して、我友情的濃厚なる平和交渉すら、無理解に排斥し、事毎に反抗不遜の態度を示し加之動もすれば、敵性行爲を如實に暴露するに到り、曩にはバクヴィヤに於て、警吏の邦人毆打事件があり、又バンドンでは不都合極まる日章旗燒却事件があつたが、此程は又、我現役海軍中

佐三代辰吉氏が、去十一月廿八日シンガポール經由バタヴィヤ飛行場に到着するや、蘭印當局は不法にも同中佐の入國を拒絶し、飛行場着陸と同時に、同地警視廳に護送の上、身柄は保護檢束を名目にバタヴィヤに抑留中、逆に本月一日バタヴィヤ發の飛行機で、パンコツクに向けて送還された事實がある。

帝國軍人が蘭印で入國拒絶の憂目に遭遇した事は、有史以來の不祥事件として、在留官民の憤激は頂點に達しつゝありとのニュースは發表されたのであつた。

最早隱忍自重する能はず

曩に我蘭印特派使節小林商相が、其使命を果さざる中途に於て、一時歸朝の止むなきに到り、今回其代理的任務を帯びた芳澤謙吉大使の出發間際に、此傲岸不遜なる暴舉に對し、我々南進論者は最早隱忍自重の心緒は斷ち切らざるを得ないのである。

問答無用只我當局に於て、斷の一字に出でられんことを切望する次第であるが、それに付けても、過ぐる大正四年——五年に亘り蘭領ボルネオ・ランダール事件を回顧し、弱小オランダ當局を屈服せしむる手段は、脅強硬談判による外ない事を、茲に提唱絶叫する所以である。

ランダール事件の真相

Ⅱ温和的邦商にスパイの嫌疑Ⅱ

そは大正四年四月中の出來事である。我邦人で、蘭領西ボルネオ日本人村の創立先驅者元島作太郎（鹿兒島縣出身、昭和十三年物故）を組合長とする、中村桃太郎、中原輝宜、酒匂懋、小川重吉、柚木仲助、柚木清藏、窪田覺二等の一團が、旅商隊を組織して、テンカワン（ボルネオ特産の野生樹果イリップ・ナツブとも稱する油脂原料果實）と我雜貨との物々交換の爲めに、喰人種ダイヤ族部落なる、ランダール州ムラモン村に出張中、突如オランダ陸軍中尉の指揮する一小隊に踏込まれ、中村桃太郎、中原輝宜の兩名は、正規の居住券を提示するにも拘らず、これを土人兵に命じて捕縛し、剩さへ中村の態度不遜なりとし銃口を中村の腹部に擬して、銃殺を命ぜんとしたが、中村が泰然自若として、悪びれざる態度と、

「銃殺するならして見ろ、日本の國家は決して黙視せぬであらう」と大聲豪語したのに辟易して、和蘭中尉は周章狼狽して、遂に毒手を加ふるには到らなかつたが、兩名共多大なる侮辱を被つたのであつた。

元來オランダは、蘭印に君臨する政略上、オランダこそ世界第一の強國で、何れの國もオランダの前には頭が揚らぬと、平素土人に宣傳して居る關係から、恫喝すれば流石の日本人も縮み上り、平心底頭陳謝するであらう、かくて土人の前に其威武を誇示することが出来ると、高をくくつて、威猛高に威張りかへしたものの、一向きよめがないのみか、却て逆襲された豪膽には、手の付け様もなくなつたので、今度は壓迫を土人に加へ、日本人と商取引した者は片つ端しから拘引して、其不心得を詰問する態度に出でたので、遂に一行の組合員は其取引を中止せざるを得ぬ破目に立到り、多大の損害を被つたのであつた。

然して、其原因を詳かに調査した結果、商賣仇たる馬來人等が日本人組合はスパイだとオランダ官憲に誣告したのを、不用意にも過信した官憲の横暴が實現された事が分明したのである。

元島組合長祖國同志に訴ふ

此事件は勿論何等根據なき浮説を、過信した和蘭官憲の認識不足の過失であつて、元島一行の嫌疑は全く晴れたるも、晴れぬは一行の譴憤である。かくて元島等はこれを我バタヴィヤ在留の日本領事館に訴願し相當の損害賠償を和蘭官憲から下附されんことの斡旋方を願ひ出でたのであつた。

當時のバタヴィヤ駐在領事浮田郷次は、祖國加藤外務大臣に具陳した結果、渡部外務書記生が派

遣されて、再調査の上いよ／＼本事件は國際外交の問題となつて、翌大正五年石井外務大臣が更迭の時代に持ち越されたのであつた。然し、外交では一枚上手のオランダ當局は、所謂飄箆餘で、彼が不利益外交の常套手段たる、遷延又遷延の奥の手を出し、容易に解決する様子もないので、元島等は躍起となり、歸朝の上頭山滿、梅屋庄吉兩先輩に訴へ其後援を要請した。

南洋開發青年同盟會の憤起

或日著者は兩翁から招致され、元島等の窮狀を詳にし、大に義憤を感じ、且兩翁から慫慂さるゝので、其打開の方法を考慮の結果、南洋開發青年同盟會を組織し、同志佐々木安五郎、伊東知也、向軍治、猪野毛利榮、鶴崎鷺城、中山福藏（元島の甥）等と相謀り、頭山翁、梅屋翁、三宅雪嶺、寺尾亨兩博士の應援により、帝都各所に和蘭官憲糾彈演說會を開催すると共に、一面開會中の帝國議會に陳情して、政府當局に對する外交質問が行はれたのであつた。

茲に於てか、さしものオランダ政府當局も、大に狼狽して、遂に我邦人への損害賠償と暴行將校嚴罰の條件を受諾し、事件は元島一行の要求百パーセントの圓滿解決するに到つたのである。

著者現地特派員となる

これより先、事件解決直前大正五年五月著者は、南洋開發青年同盟會より、現地視察の特派員として、單身ボルネオに渡航し、現地視察中、其八月解決の快報を得たのであつたが、果然和蘭官廳の邦人に對する待遇は、百八十度の反比例的な角度を以て、好感的になり、著者は大手を振つて旅行を續行しオランダ官吏以上に、土人からは優待され各地の酋長も大歓迎して呉れるので、頗る愉快な旅行を續けた。これが著者のボルネオ奥地探檢の動機となり、爾來二十數年大ボルネオの極樂境宣傳家となつたのも、著者とボルネオの一大因縁の淺からざるものがあるのだ。

強硬外交あるのみ

これに付けても、弱小國相手のみならず、すべての外交の奥の手は、一にも二にも押しの一手段である。此程も徳富蘇峰翁が日々紙上に「日本に外交ありや」我外務當局を痛罵して居られたが、一國民外交を、然も一貧書生たりし著者の提唱で、でつち上げ、遂に勝利的解決に到達した往年の快事を追憶して、現下の風雲暗澹たる外交場裡を觀察し、轉た痛噴止むなきものあり茲に此文を草して江湖志士に訴ふる所以である。

官幣大社南洋神社の御創建を 拜察して青年諸君に檄す

茲に紀元二千六百年の佳き年を送るに當り、我祖國青年諸君に檄し、徹底的に感銘して貰ひたい一事がある。

そは去る十一月一日の佳辰、長くも、聖慮により、我南洋委任統治領の南端パラオ島に、御創建相成りし官幣大社南洋神社に御靈代御奉安式を取り行はせられし御事である。

謹で按ずるに、二千六百年の前日皇宗神武天皇我肇國の基礎を定め給ひし、御時に下し給ひし、八紘一字の御詔勅の一端を具現し給ふ御聖慮に因つて、南進國策を獎勵し給ふ御恩召を拜察し奉り吾人は感激措く所を知らず、手の舞ひ、足の踏むを忘れ欣喜雀躍する次第である。

語を寄す祖國の青年諸君よ、諸君は須く胸に手を當てよこの廣大無邊なる大御心を恐察し奉れよ、然して今より後この南洋神社が體ては新東亞建設の中心點たるべき雄大なる企圖を完成し、圖南鷲翼を能く萬里の波濤を踏破せねばならぬ。

一度眼を轉すれば、大ボルネオあり、大ニューギニアあり、ニュージラードあり、大濠洲あり、

南極大陸あり、眞珠の連鎖の如き幾多の未開の地域は、日本男兒中の拓士が、勇敢進取の出陣を期待して、眠るが如く靜かに横はつて居るのである。

著者が魂の父と私淑する頭山滿翁曰く、

「汝等はさても廻り合せの好い時節に遭遇した者だ、光輝ある紀元二千六百年而も世界新秩序建設の大舞臺に歴史を更改すべき好時機に活躍し、赫々たる偉勳と功績とを、後世百年千萬年の歴史の頁に印することが出来る。手に唾して蹶起せば、先人の遺業に數倍する、一大快學が眼前に待機して居るのだ。」

虎は死して皮を留め、人は名を止む、碌々たる眼前の私利私慾にあこがるゝなく、知己を後世百年千年に求めた大楠公や、大西郷の雄志を學び、大所高所より君國百年千年の大事を決行すべく頑張れよ。さてもく好機は汝等の眼前に手を受けて待つて居るぞよ」と、案を打つて訓誨されて居るのだ敢て諸君の蹶起を促して止まない次第である。(昭和十五年十二月八日稿)

◇南有妙邦極樂郷

春秋不問挿新秧。

美果無盡賦畝傍。

莫言人口食糧苦。

南有妙邦極樂郷。

紀元二千六百年新春試作 義堂 多田惠一

米穀恐慌時代の對策

唯一の南進國策あるのみ

須く百年の大計を樹てよ

多田 惠一

興敗存亡の岐路

予は去る大正七年、南洋諸島第五次巡遊探檢の旅から歸朝した折も折、恰も祖國は米穀不足による米價暴騰に起因する米騒動の眞只中であつた。

予は詳に其情況を觀察して、此大問題の解決には唯一の南進國策あるのみと絶叫して、下記のパンフレット **興敗存亡の岐路**

と題する論文を草し、朝野愛國慨世の人士に配布したのである。然るに馬耳東風、一浪士の駄辯と聞き流され、予が東奔西走文字通り百方の遊説も何等進展實績に至らず、加之、其後米作の豊穰と歐洲第一次戦亂後の財界好況とに禍？せられ、更に又南洋各地に一時澎興した護謨事業が戦亂一段落と共に、大衰退に遭遇する等、南進國策に暗影を來し、一面南米進出が朝野に一大勢力を展開するに到り、所謂脚下に暗く、寧ろ南進國策退嬰時代ともいふべき悲境に轉落したのであつた。

併しながら眞理は何處までも眞理である。遠き慮なきものは、近き憂ありで予が三十年來稱導しつゝある南進國策は、今日に於て其錯覺誤謬でなかつた事は、苟も世界の大大勢を洞察し、國運進展の那邊にあるかを知悉する達觀の士は、必ず肯定する妙略である。否寧ろ冥慮ともいふべきものである。

往年予が熱血を傾注した短篇は、これを現在に直面して更に一言一句の訂正を要せぬ適切な議論であつた、茲に再録して江湖の參考に資せんとする次第である。

興敗存亡の岐路

米作好適地たる南洋開發の急務

▲米穀問題の解決

熟々按ずるに、現在我國民をして、一大恐慌を感ぜしめつゝある、米穀問題は、これを南進主義に於てするより外、他に如何なる方法を以てするも、決して適切なる解決を得べからざるべきを信ず。

今日政府當局者も、國民も、抑々何が故に此の策に出でざる、予は寧ろ怪疑の念を禁ずる能はざるものあり。

▲一時遁れ策の節米論

現代既に焦眉の急に迫りつゝある米穀の不足は、勿論これを外米の輸入に依り、或は雜穀乃至馬

鈴薯等の併用食に依り、(註に曰く歐洲一次大戰亂中獨逸人はパンに窮し貴賤貧富となく、馬鈴薯を盛に食し、貴婦人も紳士も街頭放屁百出一大異變を出現したさうであるが、祖國でもこの眞似をさせんとした馬鈴薯食首唱論者があつたのである)或は減食、交換食等の消極的節米法に依り、所謂一時遁れの解決に俟たざるべからざるは、萬止むなき境地なりとして、尙成すべき良方策に向つて進まざるは、抑々何が故ぞや。

▲氣休め的の耕地整理論

就中、稍高遠なる理想論者は、我邦土内に於て、耕地整理を施しなば、猶幾多の米作地を得べしといふ、或は又滿韓に移往を説くものあり、これ稍出色の論者とすべきものなるも、其實行に當つては、決して滿點なりと言ふべからず、抑々現在の如き米價に於ては、如何に暗愚なる農民たりとて之に致へずとも、苟も米作に適する耕地整理の餘地ありとせん手、尺土寸地曷ぞ見遺すべき理あらんや。況んや人口の稠密世界に稀なる本邦に於ては、假令多少整理の餘地之れ有りとすも、それは既に限り有るの地域に非ずや。這般限り有るの地域に最近に於ては年々歳々數十萬の増率を有する膨脹力限りなき我國民に満足を與へ得べきか否、滿韓の地亦米作地の餘裕あるもそれは亦知るべきの

み。此種の論も亦決して樂觀すべきものに非ず、畢竟机上空論者流の氣休め論たるのみ、而も他に良策あるを唱へざるは、抑何が故ぞや。

▲豊作も亦頼むに足らず

見よ、現在未曾有の豊作たりてふ、本年の米收穫季に於てすら、米價は依然として暴騰を來しつゝあり。是れ實に今日我國人に充足する米作地の缺亡を告げつゝあるを、明かに物語るものならずんばあらず。隨て諸物價亦日に月に暴騰を告げ、國民の生活は彌が上に、其負擔を増加し國を擧げて、前途の生活問題に不安を抱き、戦々兢兢たるは、果して策の窮する處たるか、否か。

▲何ぞ新天地に米作場を開拓せざる

是に於て乎予は斷言す、今日の我國民に米穀問題の解決を與ふべきもの、唯一の予が所謂南進主義に依るの外他なし矣。

現在世界を通じ、人口最稀薄にして將來尙幾多の人類發展の餘裕を存する地域に於て、米作に適切な地を撰び、其處に我國民第二の新天地を開拓し、永久に生活すべき解決を求むるに非ずんば、

決して安全の策と言ふべからざるに非ずや、予が所謂南進主義なるものは、即ち此が即時實現にあるなり。

▲米作に適切の新天地

然らば今日、其地域を何處にか求むる、現在米作地に富み、我國民の發展に適當の地北米あり南米あり、濠洲あり、新西蘭あり、蘭領東印度諸島あり、南支方面あり、佛領印度あり、暹羅方面あり、而して何れも廣漠たる沃野豊土の餘裕あり、されど現在に於ては遺憾ながら、北米も濠洲も、新西蘭も、我國人の自由渡航を許さず、只餘す處、南米及蘭領東印度諸島、南支方面あるのみ、就中予は實査上、最も邦人の發展に適したる米作地として、蘭領東印度諸島中の、大ボルネオを挙げざるべからず。

▲見よ大ボルネオの大沃野を

現在南洋諸島中、大ボルネオは、人口最も稀薄にして、大陸的肥沃地を有し、氣候も亦頗る凌ぎよく、到る處米作に適し、而も一年二回乃至三回の收穫ある好個の地域あり。加ふるに土人は酋長

を始めとして、何れも邦人に好感を有せり、實に是れ天與の邦人發展地たらずや、若し夫れ、西部ボルネオ・カツパース河畔、南部ボルネオ・パリトー河畔の如き、沿岸萬里の大沃野は未だ嘗て斧鉞の入らざる千古の大深林を以て蓋はれ、人烟稀れにして、往らに猪鹿の群棲に任せつゝあり。這般邦人の發展地域を南洋及南支方面に求めん乎到る處五百萬一千萬の邦人は容易に抱擁するを得べく、而も地は我臺灣より一葦帶水の彼岸にあり。これを内地よりするも、僅々二三週間にして到達するを得るの邊にあるなり。

▲永久的生活の福音を與へよ

近來邦人の南洋方面に活躍するもの尠ならず、然れども其多くは、護謨或は麻甘蔗栽培業の如き、資本家の事業にあらずんば、貿易乃至諸雜貨販賣の商業及航海の事業に屬す。(註當時は未だ鑛業には着手して居らず)眞に第二の新天地として、永久的生活を營みつゝある開拓者は頗る少數なり。

是に於て乎、予は斷言す、今日我政府當局の獎勵と、先覺の士の指導其宜しきを得ば、容易に先天的嗜米人種たる邦人をして、米作の好適地に送り、而も永久的満足と、最も鞏固なる生活の保全

とを得せしめ、子々孫々の將來に及ぼす幸福を獲得せしめんこと、決して難問題に非ざるを。

▲徒に國民の元氣を 喪せしむる勿れ

此萬全の方策あるをしも顧みず、唯徒らに實行難を以て國民に強ゆるは、抑々何たる無謀無策に非ずや、嗟世の節米論者よ、堂々たる博士號を有する學者、經綸ある政事家を以て自負する人士にしてこの見易き積極の方策を捨て、徒らに消極的にして、稍もすれば、國民の意氣を沮喪せしむるが如き論議に出でんとするは、抑々何たる無定見ぞや。

▲一日遅るれば一日の悔あり

現代生先き長からざる、考政客や、老學者輩は或は知らず、吾人青春の徒を如何にかする、將又吾人の子々孫々を如何にかする。想ふて茲に到れば、予が所謂南進主義は實に焦眉の急務たらずんばあらず。

近時東京府の如きは、各所に愚劣なる消極的節米主義の廣告を貼付し、而も「一日遅るれば一日の悔あり」となせり。予はこの一句を藉りて以て、予の所謂南進主義に移さんと欲するものなり。

▲須く支那人の海外發展に學べ

予は去明治四十三年南極探檢に従事以來、南洋に航すること前後五回、此間濠洲、新西蘭、比律賓群島、馬來半島、蘭領東印度諸島に於ける、世界人種の發展狀態を視察し、最も感嘆措く能はざりしものは前記各殖民地に於ける、支那人の活躍振りなりき。彼等は何れも其處に土着の決心を以て、永久的基礎を確立し、漸次子孫に連続して、一步又一步發展成功し、支那人部落より及ぼして、支那人町を成すものあり。殊に南洋方面に於ては、華僑の名に於て其勢力白人を凌駕する成功者決して尠なからず、往々其他の經濟界を左右するに足る實力を有する者すらあり。予が所謂南進主義は軍國主義に依るものに非ず、又資本主義に依るものにもあらず、畢竟するに彼支那人の如く永久的努力主義に依り隨處に日本人部落、日本人町村の建設を試みんとするにあるなり。

◇眞に興敗存亡の岐路

之を要するに、今日の日本國民は、世界の舞臺に立つて、滅亡か、然らずんば膨脹かの岐路にあるものなり。若し夫れ今日の節米論者の言の如く、只管節米々々の主張にのみ汲々として、消極

主義實行の曉には、人口増加防止の時代之に次ぎ（註當時からサンガー夫人の人口調節の主義が擡頭し來り我邦人中にも似而非愛國者石本某夫人の如きが産兒制限の非國策を唱導し、日本國民滅亡の素因を造らんとする危機があつた）聽ては國民滅亡の危機到來すべきや必せり。

嗟乎、滅亡か膨脹かこの興敗存亡の岐路に當り、敢て憂國慨世の士の熟慮を冀ふや切なる所以なり。（終）

みんなみの實しま山さちの海

ひらくはいまぞやまとますらを

XXXXXXXXXXXX

XXXXXXXXXXXX

XXXXXXXXXXXX

XXXXXXXXXXXX

以上は頗る簡單ながら、往年の時弊を痛切に説破して、聊か南進國策のため、一大氣焰を吐いたものである。一貧書生論としては、二十年後の今日に於て決して當時の廟堂に在りしお歴々の持論に對比して、遜色ないのみか、純情國を想ふ百年の大計といふ點からは、寧ろ卑見の優れるものを發見し自惚的獨悦感に浸りながら、茲に抄録した次第である。

歴史は繰返すとかや、去る大正七年米穀騒動の際南進國策を絶叫した時と殆ど軌を同ふしたるは今回の米穀恐慌問題である、

内憂外患現下の國歩艱難の時代に於て、在朝の政治家も、在野の學者も畢竟すれば、異口同音消極的減食乃至節食論者か、外米輸入による一時凌ぎの行きあたりばつたり主義者かであるのを直視して、轉た憂慮に堪へざるものがある。いでや更に筆を呵して卑見を陳述することゝせん。

予が南洋開發絶叫時代の回顧

是れより先き、大正六年第四次南洋壯遊より歸朝の當時、予は大阪毎日新聞に約一ヶ月連載の「西ボルネオ探」檢の記事を始め、實業の日本、新日本、日本一、海外其他數種の雑誌への寄稿及「南洋西ボルネオ」「南洋見物」「南洋渡航案内」「南洋開發案内」等の拙著に依り、或は東京、大

阪、京都、名古屋、岡山、仙臺等の全國主要都市に公開講演をなし、所謂南洋熱の鼓吹に力め、且南洋開發社を創立して、南洋に日本人村の建設の急務を説き、大隈重信侯、頭山滿翁を始め、本山彦一、田中舍身、佐々木蒙古王、林謙吉郎、杉山茂丸、梅屋庄吉等諸氏の、後援支持を得て、更に時の軍部の首腦者たりし參謀次長福田雅太郎中將にも佐々木蒙古に同伴されて面接し、詳さに南進國策の急務を力説し、ボルネオに大量移民團の實現を試みたいから、賛助ありたいと述べた所、大に共鳴され、先づ以て外務省の意向を質せよとの事であつたから、外務省に石井外相を往訪した處代理者たる幣原次官が應接されたので、前述の意見を陳べた所、當時の外務省としては、今日よりも猶英米依存外交萎縮主義的外交時代であつたので、結局冷眼視され、予の獻策も笑殺的運命に遭ふ外なかつたのであつた。

然し頭山滿翁を始め、前記國士等の後援激勵さるゝあり、當時臺灣民政長官たりし、下村宏博士なども盡力されて、多少の旅費を得たので再びボルネオに渡航し更に約一ケ年探検視察を試みいよ／＼確信を得ると共に、在ボルネオの同志故元島作太郎、柚木、窪田、酒匂等の日本人村建設者の懇切なる囑望もあつたので、予は「大ボルネオ日本人村建設」宣傳の大使命を果すべく、越えて大正七年に歸朝して、前述パンフレットなども作成し、南進國策の力説に、一層拍車をかけたものであつた。

た。

××××××××××

××××××××××

「南船北馬十餘年 西走東奔耻瓦全 遙望海洋道猶遠 遂志何日奏皇天」

との拙詩は、此當時予の肺腑を抉つて出た實感のまゝを絶句としたものである。

田中陸相に進言す

越えて大正八年、田中義一陸相の厚遇を受けて居た末富達雄氏に伴はれ田中陸相に大ボルネオ開發の急務なることを力説した處、田中陸相も予の熱血を認められたが、陸軍省には南洋開發に補助する豫算はないが、臺灣總督府には南洋調査に資する費目がある、幸にして同志の明石中將が總督であるから、明石を往訪して相談して見よと、懇切なる添書を下附され且激勵されたので、更に頭山滿翁にも相談した處、頭山翁も明石總督への紹介依頼狀を給つたので、予は勇躍して臺灣に渡り、明石總督を訪問したのは其年の夏のことであつた。

明石總督の病歿て頓挫

當時明石總督は病臥中であつたが、田中陸相と頭山滿翁の紹介状を讀まれ、病を冒かして面接され、苦痛の中を一時間以上も予の説明を聴取され、多大の賛意を表され、當時矢張り病氣入院中の下村長官とも打合せられたのであつたが、其時には既に南洋調査費は支出済になつて居て、總督府としては補助出來難いが自分も病氣療養の爲め近々歸省するから、其時田中陸相と相談して、希望を達する様取計ふであらうから、一先づ歸つて待つて居れとの事であつた。予は止むなく歸京して明石總督の歸省を待つて居たのだが、總督の病勢は次第に悪化して歸省はされたが、間もなく病歿されたのであつた。かくて多大の希望をかけて居た予が壯圖も、空しく一頓挫せざるを得なくなつたのである。

長期劃策

是に於てか予は自覺した。苟くも國家百年の大計である。たゞ焦慮するのみでは不可だと感念して、長期劃策といふことになり、日比谷ビルに事務所を設置し、一面大正十年には仙臺市と千葉市とに博覽會が開設されたのに便乗して、南洋館を建設し、南洋開發の宣傳に力め、又芝浦に「南洋軒」てふ南洋料理店を開き、大衆に呼びかけて見ることにした。(南洋軒は五年目に閉店)

又歴代の拓務大臣の更迭毎に面談して、南洋移民大計畫を力説したのであつたが、當時は政黨内閣時代であつたのでいづれの内閣も、政權獲得と共に黨勢擴張を第一義として、南進國策の如き百年の大計は到底手を附ける餘地もなく、加之漸次南洋方面の移住計畫に持てる國々の輿論が悪化し、日本の南進國策に暗影を生じ、所謂南風競はざるに至つたのはかへすくも遺憾千萬であつた。

叡慮を拜察し奉れよ

畏こきあたりにおかせられては、南洋方面の日本民族發展状態に敬慮を注がせたまひ、昭和四年五月甘露寺侍從を御差遣あらせられ、詳かに南進日本の姿を調査せしめられたのであつた。此御事を洩れ承はつた事は、恐懼措く處を知らず、草莽の身をも忘れて、

南洋樂土大ボルネオを謹著し、松田源治拓相の協賛の下に出版するを得、横山勝太郎商工政務次官の傳達を得て、畏こくも天覽の光榮に浴したのであつた。

松田拓相は大に南洋開發に賛意を表して居られたが、聽て内閣の更迭に遭ひ、拓相の交代と共にまた予の遠大の理想も、實現するに至らなかつたのであつた。

朝野の政客よ、學者よ、財界人よ、卿等は嘗に滿蒙開發の如き、〇〇の一つ覺え的問題をのみ固

執するなく眞の大國策、眞の國家百年の大計、眞の新東亞建設の大目標完成の爲めに、南進國策に邁進することは、上
 級慮に對し奉り、下億兆を指導する絶好の機會にあることを熟慮すべきである。而も時は今である。

須く國際正義、社會正義を正視せよ

近衛公は日支事變の初頭に當り、國際正義の爲めに支那と戦ふも領土的野心なしと大鼓判を擦されたではないか、忠勇義烈なる將兵十數萬の尊き犠牲と、二百億の老大な戦費を消耗しても、寸土尺地を占領しない唯一の蔣介石及其一黨を滅亡せしむるにありといふが所謂國際正義であるならば、持てる國が開拓もせず、利用厚生の実も擧げず、無爲に放棄しある日本に近き島々を、今や喰ふに米なく着るに綿毛なく、寒中焚くに炭さえなき窮地に沈淪しつゝある一億萬の日本民族の前に開放せぬといふことの、不條理を打破する爲めには、より以上に一大勇猛心を奮起し、持てる國の横暴無道を膺懲せねばならぬではないか。要するに政治は生活である、國民生活の安定を圖ることが政治の原則である。これは廟堂に在つて常に不自由を知らぬ方々には判らぬかも知れぬが、人間一度

衣食住の困苦缺乏に遭つたものでなければ、味はれぬ問題である。只口先の國際正義、社會正義だけでは、億兆の大衆には通用せぬことを留意されたいものである。

日獨伊軍事同盟の急務

予は最後に斷案を提供せん事は、現在此窮迫せる祖國の生活難打開の方策は、今日只今日獨伊軍事同盟の實現である、次は日ソ不戰條約締結通商修交の促進である。

即ち一面持たざる國々日獨伊が、軍事同盟を確立して、持てる國々の植民地再分配強要である。一面ソ聯と通商を圓滑にして、彼我の物資有無相通することである。(共產主義は何處までも排除せばよいのである)而して大手を振つて南進國策を實行し、雙腕に滿支五億の民衆を擁し、步武堂々南方の大陸、大ボルネオ、大ニューギニア大濠洲、ニュージールランド等の、支那印度に匹敵する廣漠たる大沃野に横行闊歩することである。

これが眞の新東亞建設である、この遠大の方策を措いて、又何ぞ國策型企畫あらんやと言ひたいのである。(昭和十五年二月一日稿)

昭和十六年六月一日印刷
昭和十六年六月五日發行

定價八十錢

大日本
米と南
海
才ネル島



著者
發行
者

多田惠一
東京市澁谷區千駄谷四ノ七四一
河野正義
東京市神田區駿河臺二ノ一
濱岡次男
東京市神田區駿河臺二ノ一
國民印刷株式會社

發行所
發賣所

東京市澁谷區千
駄谷四ノ七四一
東京市
代々木
前市

大日本國民中學會
東京國民書院

電話四谷三一〇一四番
振替東京三〇〇九番

415
347

終

